

# 平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告  
二〇一二―一三

平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人  
京都市埋蔵文化財研究所



# 平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡

2013年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様幅広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、共同住宅建設工事に伴う平安京跡・旧二条城跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

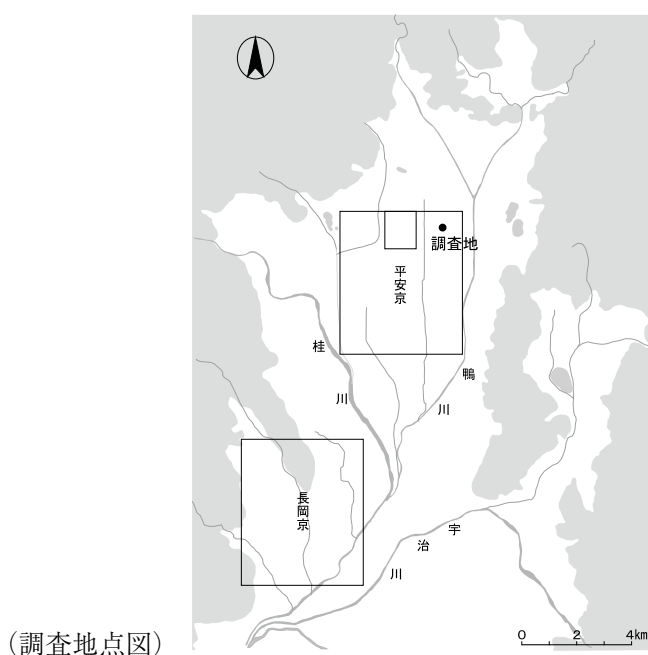
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成25年2月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 井 上 満 郎

# 例 言

- |          |  |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名  | 平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡（文化財保護課番号 11H411）          |
| 2 調査所在地  | 京都市上京区室町通出水上る近衛町40-1、42、45                   |
| 3 委 託 者  | 大和ハウス工業株式会社 取締役上席執行委員本店長 上川幸一                |
| 4 調査期間   | 2012年8月6日～2012年11月6日                         |
| 5 調査面積   | 420㎡   |
| 6 調査担当者  | 伊藤 潔   |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「聚楽廻」「御所」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）               |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                               |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。            |
| 11 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。                         |
| 12 遺物番号  | 通し番号を付し、写真番号も同一とした。                          |
| 13 本書作成  | 伊藤 潔   |
| 14 備 考   | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。   |



(調査地点図)

# 目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	5
(1) 第1面の遺構	5
(2) 第2面の遺構	9
(3) 第3面の遺構	12
(4) 第4面の遺構	13
(5) 第5面の遺構	15
4. 遺 物	17
(1) 遺物の概要	17
(2) 土器類	17
(3) 瓦類	37
(4) その他の遺物	40
5. ま と め	44

# 図 版 目 次

図版1	遺構	第1面平面図 (1:150)
図版2	遺構	第2面平面図 (1:150)
図版3	遺構	第3面平面図 (1:150)
図版4	遺構	第4面平面図 (1:150)
図版5	遺構	1 第1面全景 (東から) 2 第2面全景 (東から)
図版6	遺構	1 第3面全景 (東から) 2 第4面全景 (東から)
図版7	遺構	1 第5面全景 (北東から) 2 南壁 (北から)
図版8	遺構	1 石室20 (南から)

- 2 石室25 (北から)
- 3 石室125 (東から)
- 4 石室180 (東から)
- 5 石室161B (北から)
- 6 石室161A (南から)
- 図版9 遺構
  - 1 土坑105 (北東から)
  - 2 石室177 (東から)
  - 3 土坑400 (北から)
  - 4 石室280 (北から)
  - 5 井戸213 (北から)
- 図版10 遺物 出土土器 1
- 図版11 遺物 出土土器 2
- 図版12 遺物 出土土器 3
- 図版13 遺物 出土土器 4
- 図版14 遺物 軒瓦
- 図版15 遺物 土製品・石製品

## 挿 図 目 次

図1 調査位置図 (1 : 2,000)	1
図2 調査前全景 (西から)	2
図3 作業風景 (東から)	2
図4 調査区配置図 (1 : 500)	2
図5 周辺の調査地位置図 (1 : 5,000)	4
図6 北壁断面図1 (1 : 100)	6
図7 北壁断面図2 (1 : 100)	7
図8 石室125実測図 (1 : 50)	8
図9 石室180実測図 (1 : 50)	9
図10 石室161実測図 (1 : 50)	10
図11 石室130実測図 (1 : 50)	11
図12 石室177実測図 (1 : 50)	11
図13 土坑105実測図 (1 : 50)	11
図14 土坑163 (西から)	12



図15	土坑163断面図（1：50）	12
図16	西壁断面図（1：100）	13
図17	建物1実測図（1：50）	14
図18	第5面平面図（1：150）	15
図19	流路468断面図（1：60）	16
図20	土坑75・76出土土器実測図（1：4）	18
図21	土坑178・石室125・石室161・土坑169・土坑163出土土器実測図（1：4）	20
図22	土坑126・石室177・土坑232・土坑227・土坑281出土土器実測図（1：4）	22
図23	土坑283出土土器実測図（1：4）	23
図24	土坑271出土土器実測図（1：4）	24
図25	溝301出土土器実測図（1：4）	25
図26	土坑400出土土器実測図（1：4）	25
図27	溝289出土土器実測図（1：4）	26
図28	溝285出土土器実測図1（1：4）	28
図29	溝285出土土器実測図2（1：4）	29
図30	土坑405・土坑445・土坑432・433・464出土土器実測図（1：4）	31
図31	流路468出土土器実測図（1：4）	32
図32	その他の遺構・整地層出土土器実測図1（1：4）	34
図33	その他の遺構・整地層出土土器実測図2（1：4）	35
図34	軒丸瓦・金箔瓦拓影・実測図（1：4）	37
図35	軒平瓦拓影・実測図（1：4）	39
図36	土製品実測図（1：4）	40
図37	石製品実測図（1：4、石1のみ1：2）	41
図38	銭貨拓影（1：2）	42
図39	土坑169出土木製品実測図（1：4）	43

## 表 目 次

表1	遺構概要表	5
表2	遺物概要表	17
表3	その他の遺構・整地層出土掲載土器一覧表	36
表4	銭貨一覧表	42
表5	緑釉陶器産地別破片数一覧表	44



# 平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡

## 1. 調査経過

調査地は京都市上京区室町通出水上る近衛町40-1、42、45である。同地にマンション建設が計画されることになり、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が事前に試掘調査を実施したところ、江戸時代から平安時代の遺構面が4面以上良好に遺存していることが判明し、発掘調査が必要であると判断された。

その結果、文化財保護課の指導により財団法人京都市埋蔵文化研究所が調査の依頼を受け、2012年8月6日より発掘調査を実施した。

調査は文化財保護課の指導により、東西30m、南北14mの調査区を設定し、近世層まで重機掘削し、安土桃山時代から室町時代後半の遺構面から人力による手作業で調査を開始した。

途中、調査の節目ごとに文化財保護課の視察を受け、その指導の下に調査を進めた。

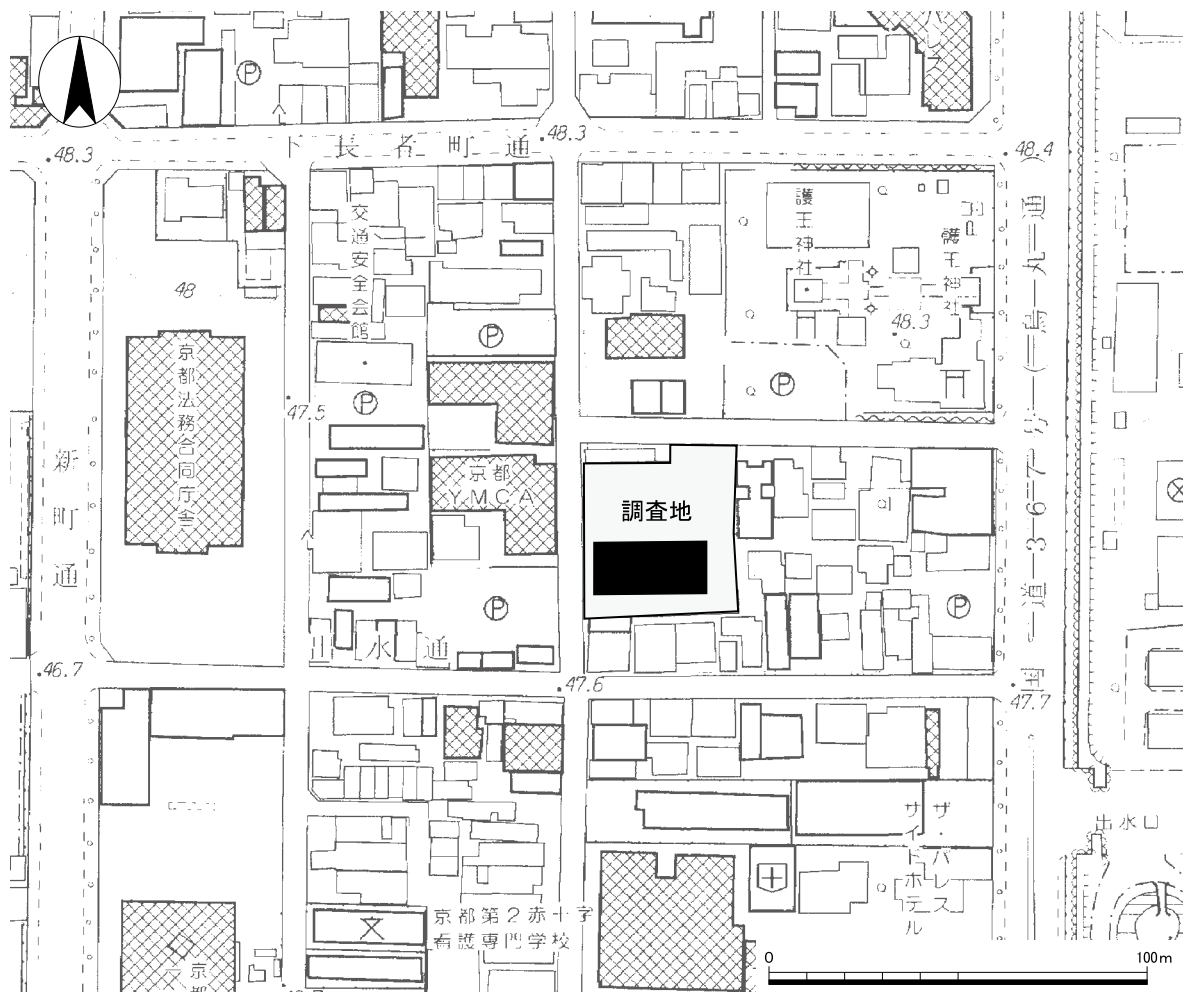


図1 調査位置図（1：2,000）



図2 調査前全景（西から）



図3 作業風景（東から）

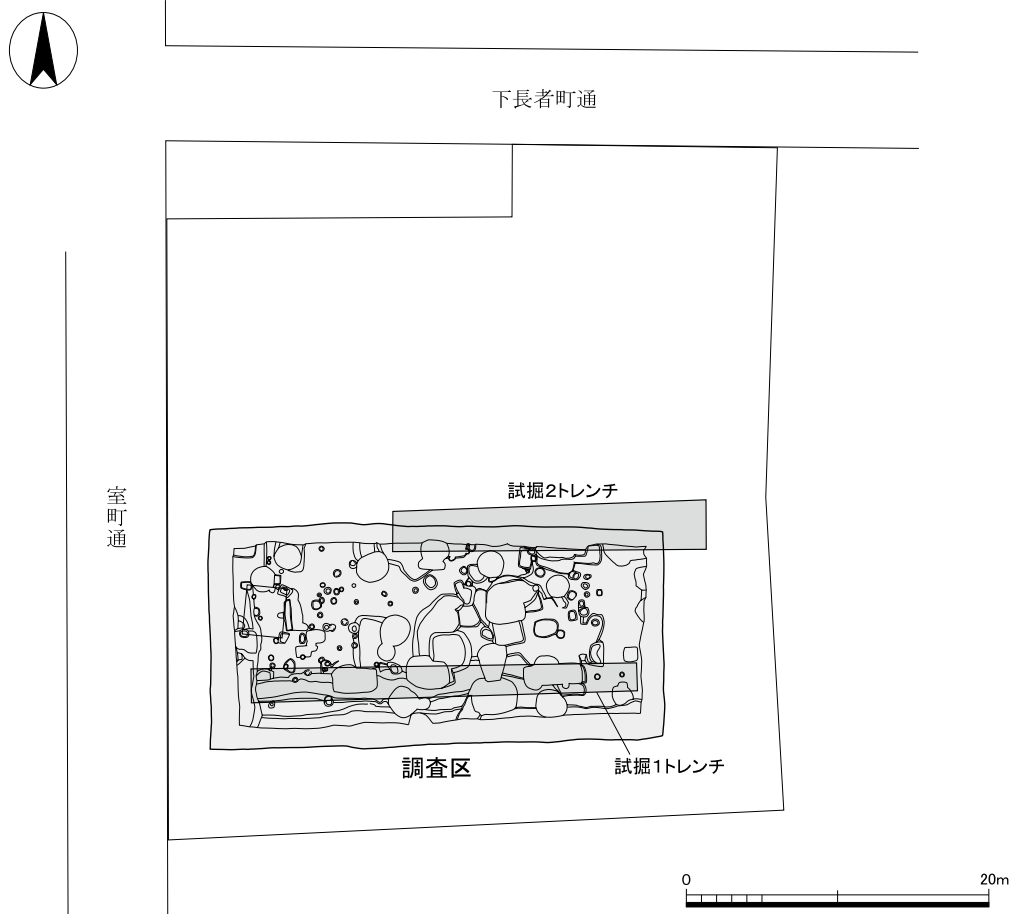


図4 調査区配置図（1：500）

## 2. 位置と環境

### (1) 歴史的環境と立地

調査地は、平安京の条坊では北側を鷹司小路、西側を室町小路、南側を近衛大路、東側を烏丸小路に四方を画された左京一条三坊十町の南西部にあたり、近衛家の邸宅である近衛殿が存在した。1町内を区分する「四行八門制」では「東一・二行北七門」の二戸主分に該当する。

この町は、平安時代前期から中期には、藤原安親邸ほか小規模邸宅によって分割されていた。近衛殿が造営された年代は明らかではないが、平安時代末期には摂政藤原忠通の邸宅になっており、久安三年(1147)には、忠通の娘皇太后聖子(崇徳天皇中宮)の御所となり、上皇の御幸も行われた。仁平元年(1151)11月13日には、近衛天皇が六条東洞院から近衛殿に移って里内裏とし、久寿二年(1155)7月23日、この近衛殿で崩御した。承安二年(1172)に焼亡にあったが、正治二年(1200)、この地に鷹司室町殿が建造されて近衛基通が移り住み、以後近衛家代々の本邸として伝領された。その後、天正十九年(1591)、近衛家は豊臣秀吉の命によって内裏の東北の地に移り、近衛殿は消滅した。

### (2) 既往の調査(図5)

当十町における発掘調査例は2件ある。1971年の隣接地の調査(1)では、平安時代中期(10世紀)の溝から土師器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器、白磁、青磁などが出土したほか、室町時代から江戸時代の遺構群が検出されている。また1970年に護王神社境内においても発掘調査(2)が行われているが、江戸時代前期より以前の遺構は検出されていない。

二町内では、京都府庁構内北西隅の発掘調査(3)で、平安時代後期、室町時代、江戸時代各時代の西洞院大路西側溝が検出されている。

四町内における発掘調査は2件ある。京都府警察本部庁舎の調査(4)では平安時代の柵列が南北18mにわたって検出された。また上京消防署の調査(5)では、平安時代前期の土坑、中期の井戸が検出されているほか、室町時代、桃山時代、江戸時代の遺構群が検出されている。

六町内における発掘調査は2件ある。京都第二赤十字病院の調査(6)では、室町時代の溝、土坑、柱穴が検出されている。2012年に行われた調査(7)では桃山時代の旧二条城の濠跡が検出された。

七町内では、京都法務合同庁舎の調査(8)で、平安時代末期から鎌倉時代の礎石をもつ建物跡、柵列のほか、室町時代、江戸時代の井戸、土坑などが検出されている。

九町内における発掘調査は3件ある。北東部のKBS京都の調査(9)では、平安時代後期から末期の土御門大路路面、南側溝および、邸宅の内部を区切る溝などが検出されている。京都私学会館の調査(10)では、平安時代中期から後期の溝、土坑、柱穴や、戦国時代の堀が検出されている。また、調査(11)では、平安時代の宅地割の溝や、室町時代後半から安土桃山時代の土坑、井戸、

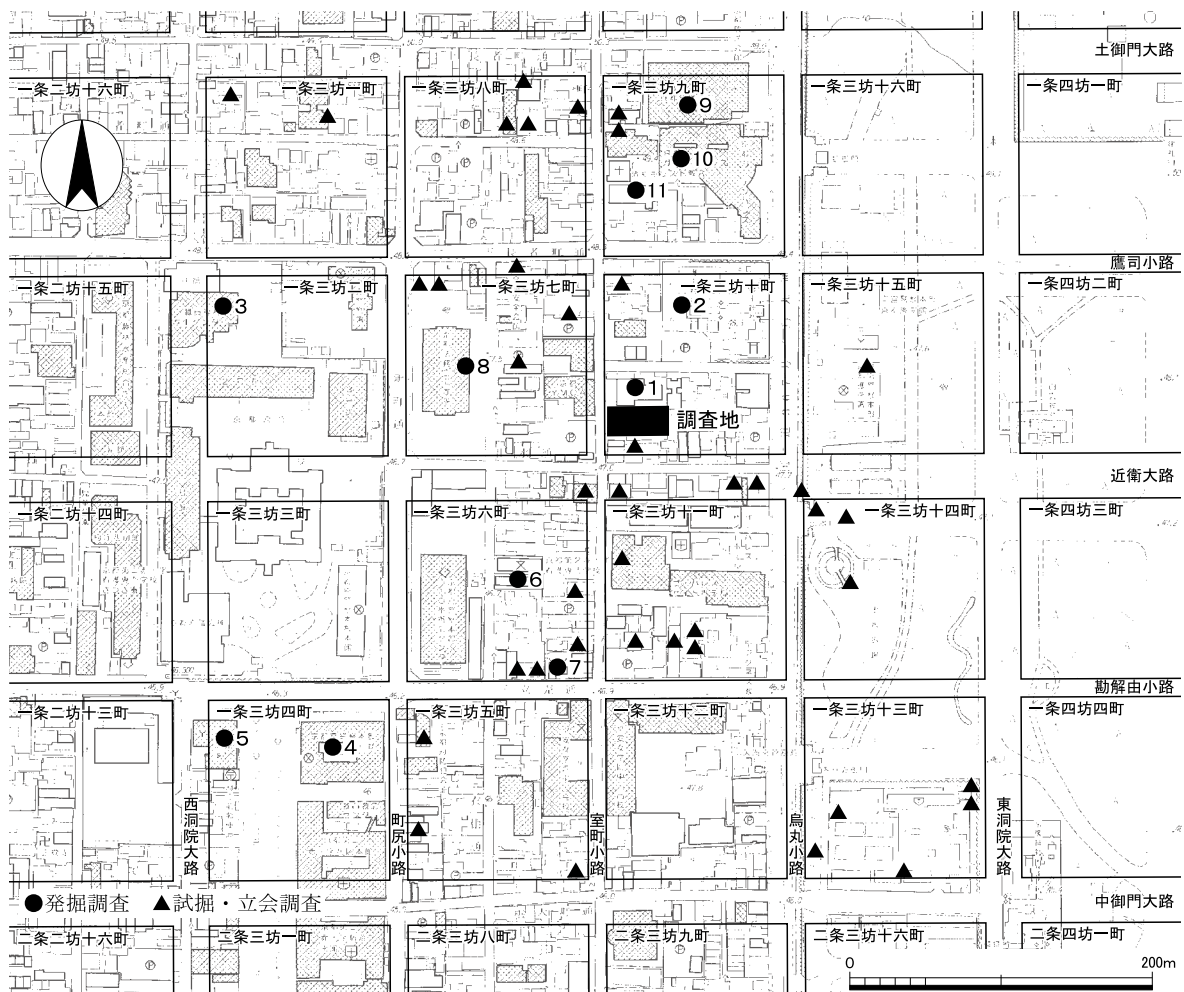


図5 周辺の調査地位置図 (1 : 5,000)

石室などが検出されている。

十一町内では地下鉄烏丸線の調査が行われており、平安時代の遺構は少ないが、旧二条城の石垣、濠が検出されている。

十二町内でも、地下鉄烏丸線の調査で、平安時代後期の土坑や、旧二条城の濠が検出されている。このように周辺の調査では、古墳時代から近代まで重層する遺構や遺物が検出されており、今回の調査でも、これまでの調査成果に関連する遺構の検出が期待された。

### 3. 遺 構

調査地の基本層序は、近世から現代層（1.4～1.6m）、第1層（北壁断面図13・29・39・52層など<以下同>：0.1～0.2m）、第2層（14・23・31・32・41・53層など：0.2～0.4m）、第3層（15・16・33・43・60層など：0.2～0.4m）、第4層（37・45・54・66層など：0.1～0.4m）、にぶい黄褐色砂泥（76層）、にぶい黄橙色砂礫（77層）の基盤層となる。第1層から第3層の整地層は調査区全域に広がる整地層であるが、第4層は調査区西半部で検出される整地層である。

第1層の上面を第1面、第2層の上面を第2面、第3層の上面を第3面、第4層の上面を第4面、基盤層上面を第5面として調査した。

第1面は室町時代後半から江戸時代、第2面は室町時代、第3面は鎌倉時代から室町時代、第4面は平安時代の遺構が主体をなす。調査で検出した遺構は、総数472基である。各時期の遺構が複雑に重複する平安京の左京特有の状況を示し、各時期に施された部分的な整地などのため層序は複雑で、単一時期の遺構面の広がりを必ずしも捉えきれたわけではなく、第1面から第4面のそれぞれの調査では目的とした時期の遺構の他に、前後する時期の遺構を検出することも多かった。

#### （1）第1面の遺構（図版1・5）

第1面で検出した遺構には、井戸、石室、土坑などがある。井戸は12基検出したが、江戸時代から近代にかけてのものである。井戸1・15・21・43・45・48は、井戸側に花崗岩割石を使用した円形の石組井戸である。井戸1は上部に漆喰の補修痕がある。井戸2・6・29・41・44・66は掘形のみで井戸側はない。埋土は井戸1以外焼土・炭を多量に含んでいる。

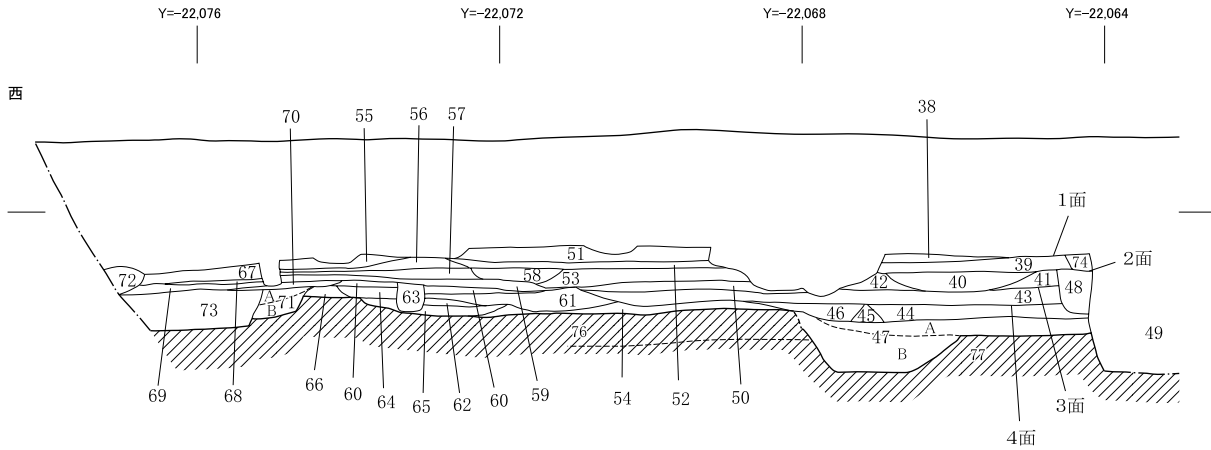
**井戸48** 調査区中央北壁沿いで検出した、花崗岩割石を使用した近代の石組井戸。埋土に焼土・炭を多量に含む。

**井戸66** 調査区中央で検出した井戸。北半は試掘トレンチで削平されている。掘形は径約1.8mで、井戸側は抜き取られている。

**石室20**（図版8） 調査区南東部で検出した。掘形は径1.6mのほぼ円形を呈するが、南半は試掘トレンチで削平されている。大きさ0.2～0.3mの花崗岩割石、河原石を円形に積み上げるが0.4×

表1 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
弥生時代 ～古墳時代	流路468	
平安時代	溝285・289・301、土坑271・400・405・410・432・433・445・464、 建物1	
室町時代	石室130・177・216・280、土坑126・227・232・281・283、井戸213	
安土桃山時代 ～江戸時代	石室20・25・125・161A・161B・180、土坑27・53・75・76・95・ 96・105・119・163・169・178、井戸48・66・129	

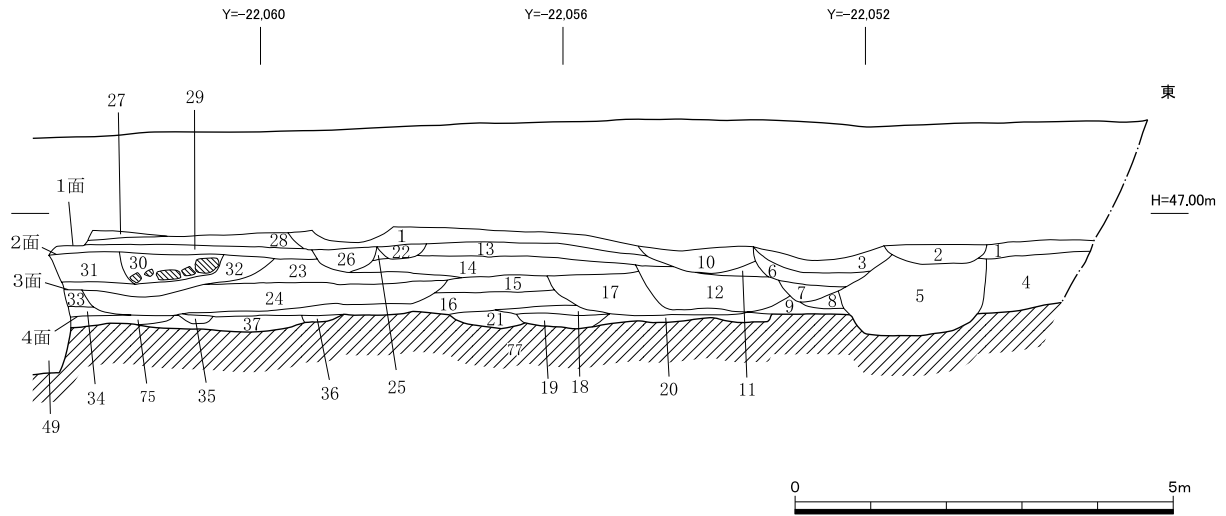


- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ 6cmまでの礫少量混、土師片少量混
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 2~7cmの礫多く混
- 3 10YR3/1~3/2 黒色砂泥 粘質、10YR5/6 微砂含む、φ 5cmまでの礫少量混
- 4 2.5Y3/2 黒褐色砂泥 10YR5/6 微砂含む、炭混、土師片少量混
- 5 10YR3/2 黒褐色砂泥 同色泥砂~粗砂含む、φ 1mまでの礫少量混、炭、土師器少量混
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥、同色砂礫少量混、φ 5cmまでの礫混、10YR5/6 砂含む
- 7 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質、炭混、10YR5/6 微砂含む
- 8 2.5Y3/2 黒褐色泥砂、φ 15cmの礫混、10YR5/6 砂含む
- 9 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭混
- 10 10YR3/2 黒褐色砂泥、同色砂礫少量混、φ 5~10cmの礫少量混
- 11 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、炭混、10YR5/6 砂含む
- 12 10YR3/2 黒褐色砂泥、炭混、10YR5/6 砂含む、土師片多く混 (土坑227)
- 13 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 2cmまでの礫少量混
- 14 10YR3/2 黒褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 0.5~2cmの礫少量混、土師片少量混
- 15 2.5Y3/2 黒褐色泥砂、同色砂礫含む、10YR5/6 砂含む
- 16 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 5~10cmの礫混
- 17 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、同色砂礫含む、φ 1~5cmの礫少量混、土師片多く混 (土坑281)
- 18 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、炭混、10YR5/6 砂含む
- 19 10YR3/2 黒褐色砂泥、砂礫多く含む、φ 1cmまでの礫混、10YR5/6 砂含む
- 20 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ 15cmまでの礫混
- 21 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、φ 3cmまでの礫少量混、10YR5/6 砂含む
- 22 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ 6~10cmの礫多量混
- 23 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ 1cmまでの礫少量混、炭、土師片少量混、10YR5/6 砂含む
- 24 10YR3/2 黒褐色砂泥、砂礫少量混、φ 5~15cmの礫少量混、炭、土師片少量混、10YR5/6 砂含む (土坑233)
- 25 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 2cmまでの礫少量混
- 26 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ 18cmまでの礫多く混
- 27 10YR4/3 にぶい褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 28 10YR4/4 褐色砂泥
- 29 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 2cmまでの礫少量混
- 30 10YR3/2 黒褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、φ 10~30cmの礫混
- 31 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混、土師片少量混
- 32 10YR3/2 黒褐色砂泥、10YR5/6 微砂含む、土師片少量混、φ 3~15cmの礫多量混
- 33 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 34 10YR3/2 黒褐色泥砂、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 35 10YR3/3 暗褐色泥砂、10YR4/6 褐色粘土ブロック混
- 36 10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質、10YR5/6 微砂含む
- 37 10YR3/3 暗褐色砂泥 やや粘質、10YR4/4 褐色砂礫、φ 1~8cmの礫少量混
- 38 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、φ 0.5cmまでの礫少量混、10YR5/6 砂含む、土師片少量混
- 39 10YR4/2~4/3 灰黄褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混、10YR5/6 砂含む、土師片少量混
- 40 10YR3/2 黒褐色泥砂、φ 0.5cmまでの礫多量混、φ 10cmまでの礫少量混、土師片少量混

(土坑178)

図6 北壁断面図1 (1:100)





- 41 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、土師片少量混
- 42 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、10YR5/6 砂含む、土師片少量混
- 43 10YR3/2 黒褐色砂泥、同色砂～砂礫含む、10YR5/6砂含む、土師片少量混
- 44 10YR3/3 暗褐色砂泥、10YR4/2 灰黄褐色砂泥含む、土師片少量混
- 45 10YR3/2 黒褐色砂泥、10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫含む、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 46 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 47A 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 3cmまでの礫多く混、同色砂泥含む
- B 10YR2/2 黒褐色粘質土
- 48 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 10～20cmの礫多く混、10YR5/6 砂含む
- 49 SE48 (近代井戸)
- 50 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 51 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 52 10YR4/3 にぶい褐色泥砂、φ 5cmまでの礫少量混
- 53 10YR3/3 暗褐色砂泥～泥砂、10YR4/6 粘土ブロック混、土師片少量混
- 54 10YR4/2～4/3 灰黄褐色粗砂～砂礫、φ 0.5cmまでの礫少量混
- 55 10YR4/3 にぶい褐色泥砂、砂礫少量混、φ 0.5cmまでの礫混、10YR5/6 砂含む
- 56 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、φ 10cmまでの礫混、10YR5/6 砂含む
- 57 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、炭、土師片少量混
- 58 10YR4/3 にぶい褐色砂泥、φ 10cmまでの礫含む、土師片混
- 59 10YR3/4 暗褐色砂泥、φ 1cmまでの礫少量混、炭少量混
- 60 10YR5/6 黄褐色粘土
- 61 10YR4/3 にぶい褐色泥砂、同色砂礫多く混、φ 0.5cmまでの礫混、10YR3/3 粘土質含む
- 62 10YR4/2 灰黄褐色砂礫、φ 0.5～1cmまでの礫混
- 63 10YR4/3 にぶい褐色泥砂、φ 1cmまでの礫少量混、土師片少量混
- 64 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、砂礫多く混、φ 1cmまでの礫混
- 65 10YR4/4 褐色泥砂 同色砂礫含む φ 0.5cmまでの礫混、10YR5/6 粘土ブロック混
- 66 10YR4/2 灰黄褐色泥砂、砂礫少量混、φ 0.5cmまでの礫混
- 67 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、φ 0.5cmまでの礫少量混、土師片少量混
- 68 10YR4/3 にぶい褐色泥砂、砂礫混
- 69 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、砂礫多く混、φ 0.5cmまでの礫混、炭少量混
- 70 10YR4/2 灰黄褐色砂泥、土師片少量混、10YR5/6 砂礫含む、φ 1cmまでの礫混
- 71A 10YR4/2 灰黄褐色砂礫、φ 1～5cmの礫混、10YR5/6 粘土ブロック含む
- B 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 72 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ 1～5cmの礫少量混、炭少量、土師片混
- 73 10YR3/2 黒褐色砂泥、φ 1～10cmの礫少量混、炭、土師片少量混
- 74 10YR3/3 暗褐色砂泥、φ 3～20cmの礫多量混、炭、焼土多量、土師片、瓦片混
- 75 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂、φ 5cmまでの礫混
- 76 10YR7/4 にぶい黄褐色砂泥 (基盤層)
- 77 10YR4/3 にぶい黄褐色砂礫、φ 3cmまでの礫混 (基盤層)

図7 北壁断面図2 (1:100)

0.25mの花崗岩質の石塔婆片も転用している。石組は2～3段残存している。石組の内法は0.85m、深さ0.7mを測る。底部はほぼ平坦である。埋土は暗褐色砂泥で、出土遺物から17世紀前半と考えられる。

石室25（図版8） 調査区南壁沿で検出した。掘形は径1.4mのほぼ円形を呈するが、北半は攪乱により壊されている。0.2～0.3mの花崗岩割石を円形に積み上げる。石組は3～5段残存している。石組の内法は0.8m、深さ0.45mを測る。底部は平坦である。埋土は黒褐色砂泥で炭を多量に含む。

石室125（図8、図版8） 調査区中央で検出した。掘形は東西3.9m、南北3.1mの隅丸方形を呈する。0.2～0.5mの花崗岩の割石をほぼ垂直に方形に積み上げる。石組は3～4段残存している。石組の内法は東西3.0m、南北1.6mで、深さ0.8mを測る。底部は平坦であるが、北東隅に径0.5m、深さ0.25mの小穴が1基ある。埋土上層には0.5～1mの漆喰片が多量に混入している。17世紀中頃の遺物が出土しているが、埋土上層からは18世紀前半の遺物が出土している。

石室180（図9、図版8） 石室125と重複している。掘形は東西2.6m、南北2.0mの隅丸方形を呈する。0.2～0.5mの花崗岩の割石をほぼ垂直に小判型に積み上げる。石組は1～5段残存してい

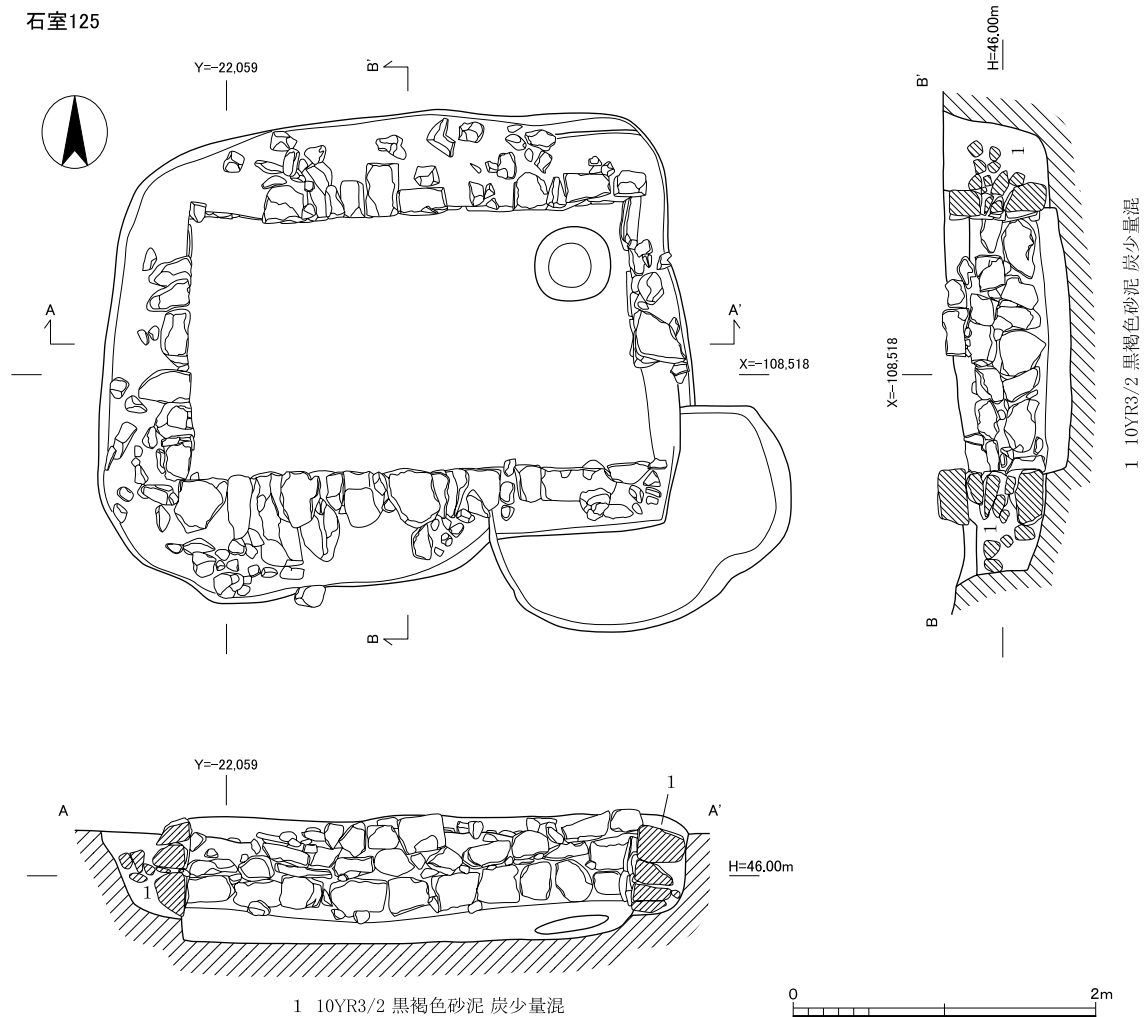


図8 石室125実測図（1：50）

る。石組の内法は東西2.0m、南北1.0mで、深さ1.0mを測る。底部は平坦であるが、一部に板の痕跡が認められる。埋土は黒褐色砂泥である。17世紀前半の遺物が少量出土した。

**土坑27** 調査区中央北半部で検出した径1.7m、深さ0.5mの土坑。埋土は黒褐色砂泥で、0.03~0.2mの礫を多量に含む。16世紀末から17世紀前半の遺物が出土した。

**土坑53** 調査区南西部で検出した。北半を試掘トレンチで削平されている。埋土は上面に焼土・炭を多量に含む。灰黄褐色砂泥である。16世紀末から17世紀前半の遺物が少量出土した。

**土坑75・76** 調査区東半部で検出した土坑である。方形ないしは長方形を呈する。深さは0.6m~0.9mで、底は凸凹している。埋土は炭・炭混じりの砂泥層で、17世紀前半代の多量の土師器・施釉陶器など出土した。

**土坑178** 調査区北東隅で検出した。大型の不定形なゴミ捨て穴である。埋土は黒褐色砂泥で、炭・焼土・礫を多く含む。数回にわたり掘り返されているが、17世紀前半から中頃の遺物が出土した。

## (2) 第2面の遺構 (図版2・5)

第2面で検出した遺構としては、井戸、石室、土坑、柱穴などがある。

**井戸129** 調査区中央南壁沿で検出した井戸で、南半は調査区外に広がる。河原石の石組で円形に井戸側を構築しているが、大半が調査区外であり、詳細は不明である。

**石室130** (図11) 調査区南西部で検出した。東半を井戸66で壊されている。掘形は南北1.5m、東西1.3m以上の隅丸方形に復元できる。0.2~0.5mの河原石を小口面を内側に向けてほぼ垂直に積み上げる。石組は2~4段残存している。石組の内法は南北0.85m、東西0.7m以上で、深さは0.45

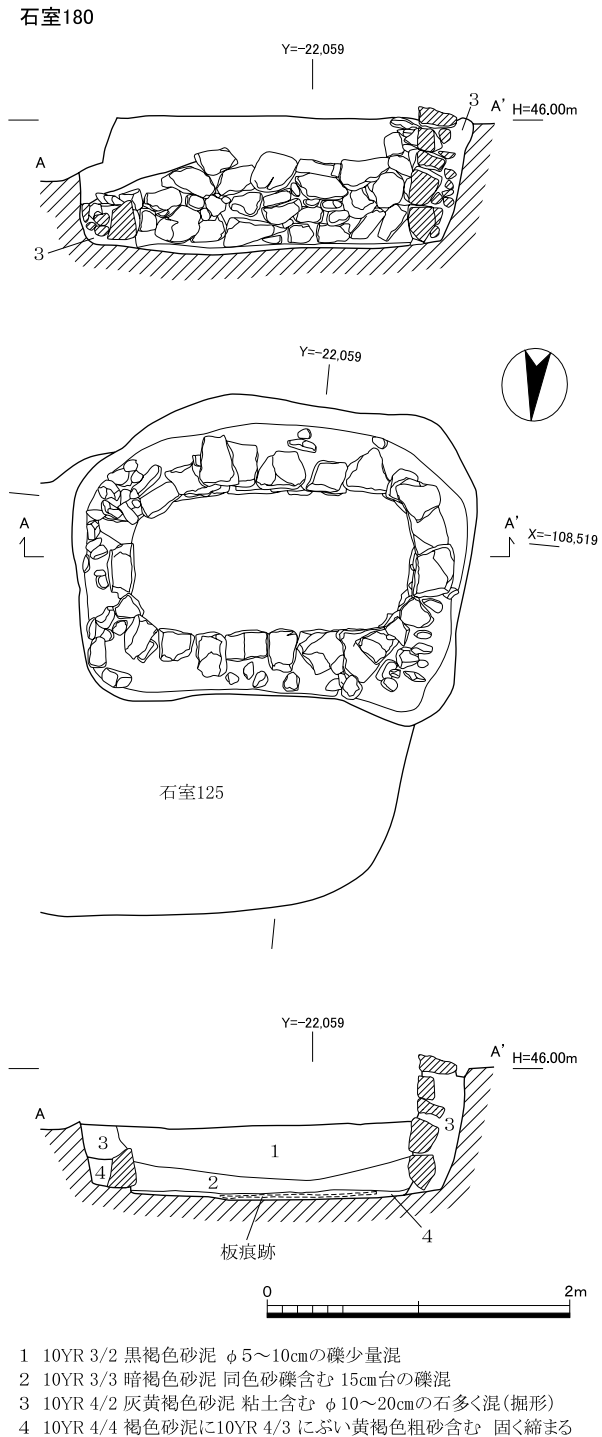
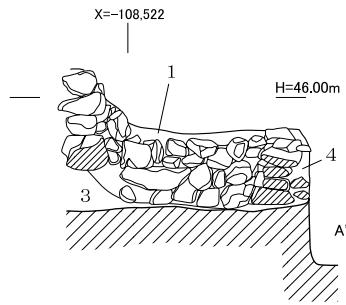
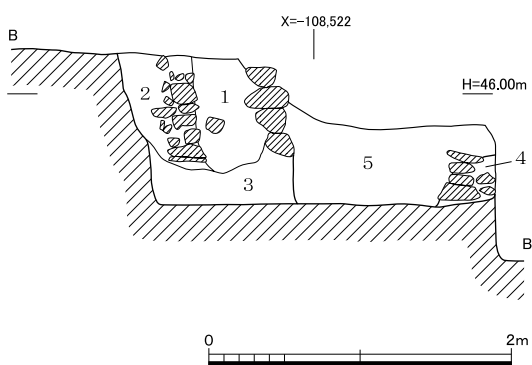
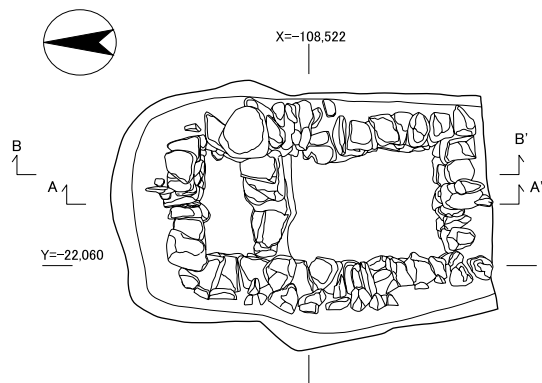
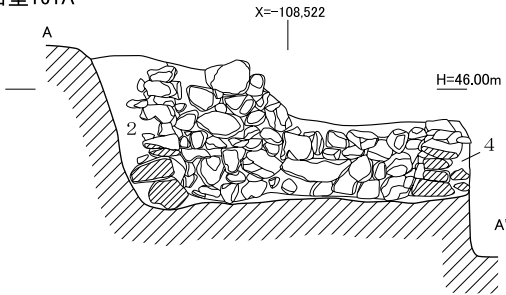


図9 石室180実測図 (1:50)

石室161B



石室161A



- 1 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1cmまでの礫少量混
- 2 10YR3/2 黒褐色砂泥 10YR2/2 粗砂含む
- 3 10YR4/3 にぶい黄褐色泥砂 粗砂含む φ1cmまでの礫少量混
- 4 10YR3/2 黒褐色砂泥
- 5 10YR4/1 褐灰色砂泥

図10 石室161実測図 (1:50)

mである。底部はほぼ平坦である。

石室161A・B(図10、図版8) 調査区中央部で検出した。掘形は東西1.7m、南北2.5m以上の隅丸方形を呈し、南半上部を試掘トレンチで、南端部を攪乱で削平されている。0.2~0.5mの河原石を小口面を内側に向けてほぼ垂直に積み上げる。石組は4~8段遺存している。石組の内法は東西0.8m、南北1.6mで、深さは1.0mである(石室161A)が、後に北側を埋め戻して新たに石を組んで南北1.0mに縮小している(石室161B)。北面以外の石組はそのまま利用している。底部はほぼ平坦である。いずれも埋土から17世紀前半から中頃に属する土器類が出土し、顕著な時期差は看取できない。

石室177(図12、図版9) 調査区中央やや西寄りで検出した。掘形は東西2.2m、南北1.8mの隅丸方形を呈する。0.2~0.4mの河原石を小口面を内側に向けて積み上げる。石組は2~4段残存している。石組の内法は東西1.3m、南北1.0mで、深さは0.5mである。底部はほぼ平坦である。出土遺物は小片であり、計測できるものは少ないが、16世紀代の遺物が出土した。

土坑105(図13、図版9) 調査区中央部で検出した掘形径1.5mの石組の土坑である。0.5~0.6mの大石を北・西・南面に据える。石組内法は東西0.7m、南北0.5mで、深さは0.5mである。

土坑119 調査区南東で検出した。径1.7mの円形を呈する。埋土は粘質の黒褐色砂泥で、16世紀後半代の遺物が出土した。

土坑126 調査区中央で検出した。東西2.6m、南北1.6mの方形を呈する土坑である。深さは0.5mを測る。底部は平坦である。埋土には0.2~0.3mの河原石が多量に含まれており、石室の残穴の可能性はある。16世紀代の遺物が出

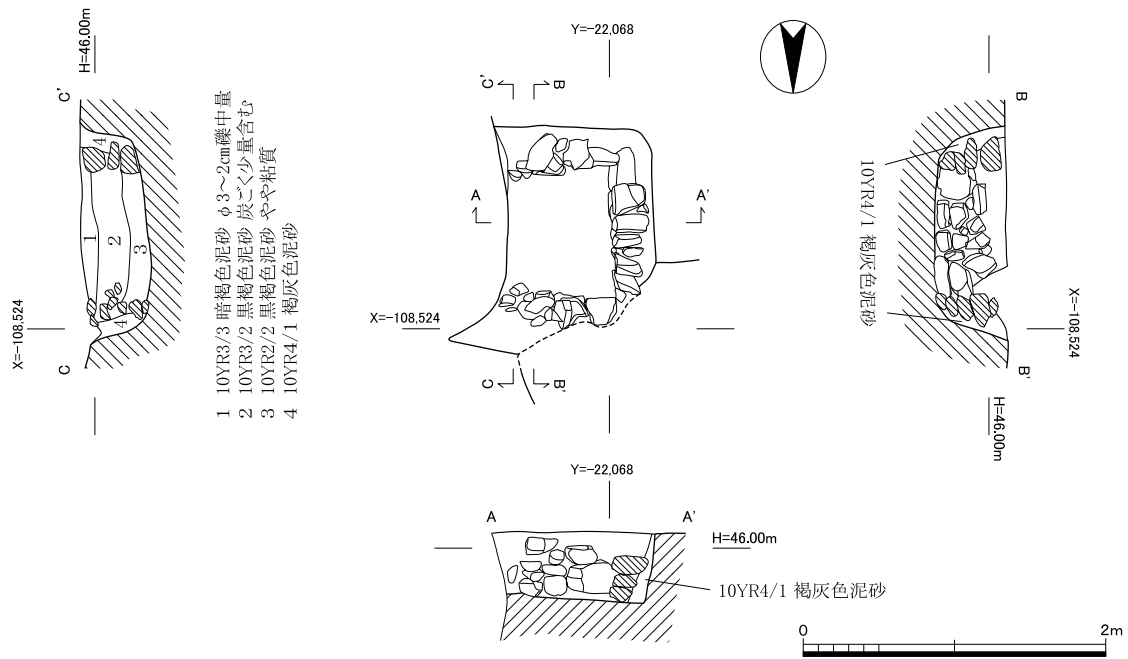


図11 石室130実測図 (1 : 50)

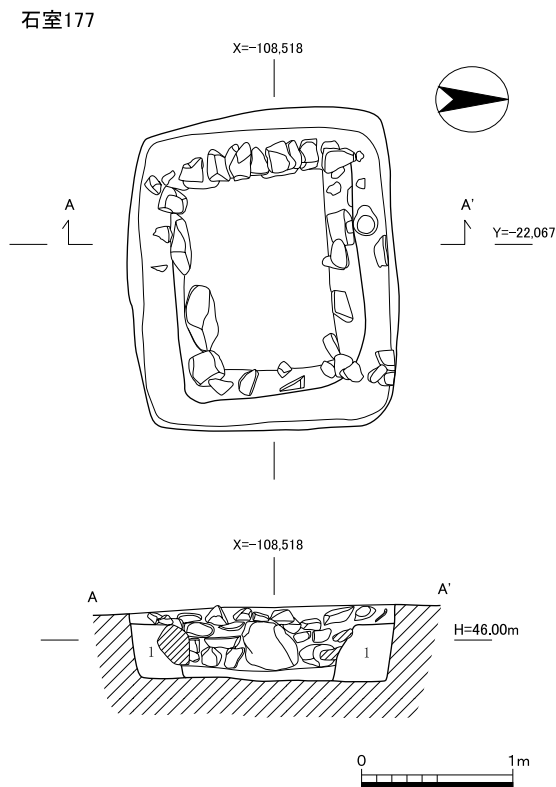


図12 石室177実測図 (1 : 50)

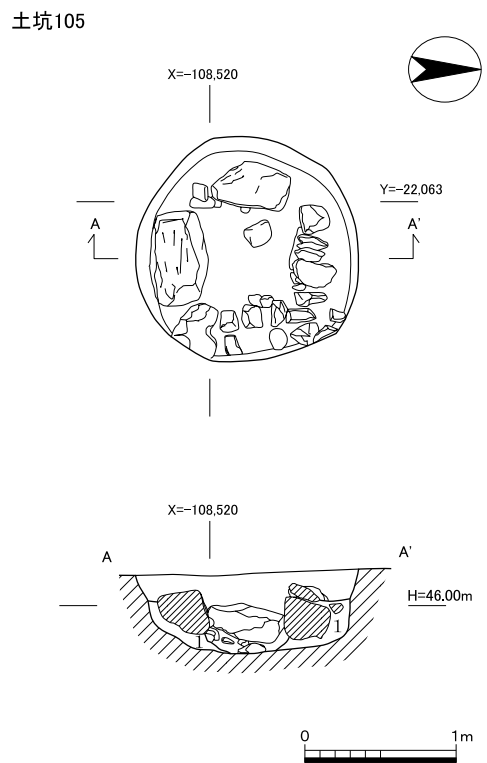


図13 土坑105実測図 (1 : 50)

土した。

土坑163 (図14・15) 調査区南東部で検出した円形の土坑である。南半は上部を試掘トレンチで削平されている。掘形は径1.25m、深さ0.6mで、中に径1.5mの桶が据え付けられている。埋土



図14 土坑163 (西から)

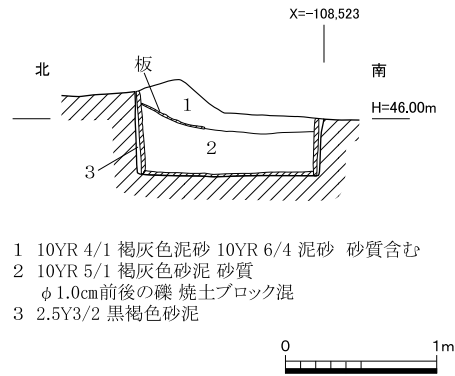


図15 土坑163断面図 (1 : 50)

は褐灰色泥土で、16世紀後半の遺物が出土した。

**土坑169** 調査区南東部で検出した土坑で、土坑118・119に切られており全形は不明である。室町時代の土器類とともに漆器碗、箸などの木製品が出土した。

**土坑227** 調査区北東部で検出した。不定形な大型遺構。埋土は黒褐色砂泥で、15世紀末から16世紀初頭の遺物が出土した。

### (3) 第3面の遺構 (図版3・6)

第3面で検出した遺構には、井戸、石室、土坑、柱穴などがある。

**井戸213** (図版9) 調査区北西部で検出した円形石組井戸である。掘形は長径1.8m、短径1.7mの楕円形。石組は内径約1mで、0.2~0.6mの石を積み上げているが、南半は崩落している。安全確保のため完掘していない。

**石室216** 調査区中央南壁沿で検出した。掘形は東西1.35m、南北1.2m以上の隅丸方形を呈する。石組は1段残存している。石組の内法は東西0.6m、南北0.9m以上で、深さは0.3mである。底部は平坦である。南は調査区外へ延びる。

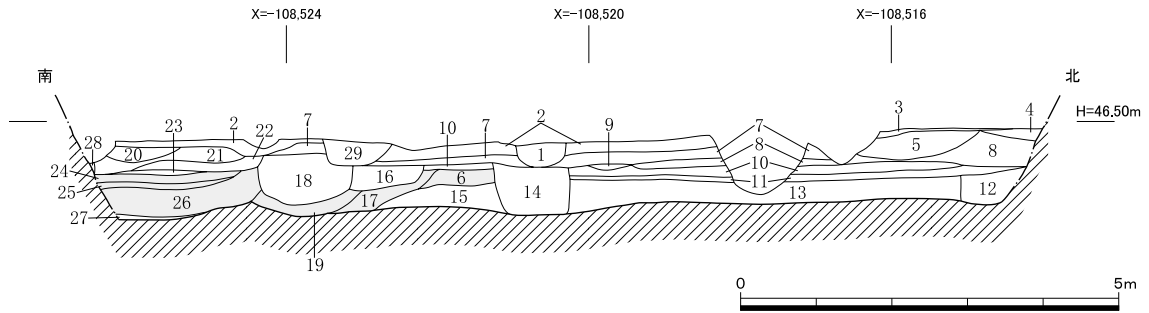
**石室280** (図版9) 調査区中央北寄りで検出した。掘形は東西1.6m、南北1.25mの方形を呈する。石組は1段残存している。石組みの内法は東西1.0m、南北0.8mで、深さは0.2mである。底部は平坦である。

**土坑232** 調査区中央北半で検出した。東西1.6m以上、南北1.0m以上の隅丸方形を呈す。深さは0.2mで、埋土は黒褐色砂泥である。16世紀前半代の遺構が出土した。

**土坑281** 調査区北東部で検出した。土坑227に切られている。埋土は黒褐色砂泥で、出土遺物の大半が15世紀末の土師器皿である。

**土坑283** 調査区東半中央付近で検出した東西1.2m、南北0.8m、深さ0.25mを測る隅丸方形を呈する土坑である。埋土は炭を少量含むにぶい黄褐色泥砂で、鎌倉時代の土師器がまとまって出土した。

**土坑271** (図16 - 西壁断面24~26・19・17・6層) 調査区南西隅で検出した大型の落ち込み遺構である。7層に分層できる。③・④層から9世紀代から12世紀代の土師器、須恵器、緑釉陶



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~15cmの礫少量混 炭、焼土多量混
- 2 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ1~10cmの礫少量混 炭、焼土、土師器片少量混
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 炭、土師器片少量混
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥 炭、焼土中量 土師器片少量混
- 5 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~20cmの礫少量混 炭、焼土少量混
- 6 10YR3/2 黒褐色砂泥 (土坑271 ⑥層 第3面)
- 7 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥 炭、焼土微量 土師器片少量混
- 8 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量混 炭、土師器片少量混
- 9 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ0.5~20cmの礫多量混 土師器片微量混
- 10 10YR3/3 暗褐色砂泥 φ1~15cmの礫多量混 炭微量混 (2層)
- 11 2.5Y3/2 黒褐色砂泥粘質 炭、土師器片少量混 (3層)
- 12 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫少量混 炭、土師器片少量混
- 13 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~5cmの礫少量混 炭、土師器片少量混 (溝301 第4面)
- 14 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ1~25cmの礫少量混 炭少量 土師器片微量混
- 15 10YR3/2 黒褐色砂泥+10YR4/4 褐色砂泥(地山ブロック)固く締まる φ1~3cmの礫中量混 炭、土師器片少量混 (溝301 第4面)
- 16 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~25cmの礫中量混 炭、焼土微量 土師器片少量混
- 17 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫少量混 炭、土師器片少量混 (土坑271 ⑤層 第3面)
- 18 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 φ1~20cmの礫少量混 炭、焼土微量 瓦片土師器片少量混
- 19 2.5Y3/1 黒褐色泥砂 φ1~5cmの礫多量混 炭微量 土師器片少量混 (土坑271 ④層 第3面)
- 20 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 炭、土師器片少量混
- 21 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色泥砂 φ1~5cmの礫少量混 炭、焼土少量 土師器片微量混
- 22 10YR3/3 暗褐色泥砂 φ1~5cmの礫中量混 土師器片少量混
- 23 10YR5/4 にぶい黄褐色砂泥(地山ブロック) 炭、焼土少量混
- 24 10YR4/1 褐灰色砂泥 炭、焼土、土師器片少量混 (土坑271 ①層 第3面)
- 25 10YR3/1 黒褐色砂泥(粘質) 炭、土師器片少量混 (土坑271 ②層 第3面)
- 26 10YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量混 炭、焼土中量 土師器片少量混 (土坑271 ③層 第3面)
- 27 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭微量 土師器片少量混 (流路468 第5面)
- 28 10YR4/2 灰黄褐色砂泥 炭少量混
- 29 10YR4/2 灰黄褐色砂泥+7.5YR5/6 明褐色砂泥 炭、焼土、土師器片少量混

図16 西壁断面図 (1:100)

器、灰釉陶器、輸入陶磁器、瓦類などが多量に出土した。下層の第4面で検出した溝289・285と接合する遺物も多い。この一角は第1面調査時から水気が染み出てくる所であった。何度も整地が繰り返されたものと考えられる。

#### (4) 第4面の遺構 (図版4・6)

第4面で検出した遺構には、溝、建物、土坑、柱穴などがある。

**溝301** 調査区西端で検出した南北溝である。西肩部は調査区外である。幅1.5~2.0m以上、深さ0.3~0.4mを測る。南西端は第3面で検出した土坑271と重複する。埋土は黒褐色砂泥で11世紀代の土器類とともに緑釉軒平瓦が出土した。

**溝289** 調査区南壁沿で検出した東西方向の溝である。西側は土坑271に切られ、東側は調査区中央部付近で不明瞭になる。溝幅は1.4~2.0m、深さ0.2~0.3mである。埋土は黒褐色砂泥層で、10世紀代の土器類が出土した。

**溝285** 調査区南壁端で検出した東西方向の溝である。西側は土坑271に切られているが、東側は浅くなりながら東壁まで続く。南肩部は調査区外であるが、溝幅は1m以上、深さは0.1~0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で9世紀代の土器類が出土した。

**建物 1** (図17) 調査区北西部に位置する東西1間(2.7m)×南北1間(3.1m)の掘立柱建物。柱穴423・424・466・467からなる。柱穴掘形は方形を呈する。柱穴423・424は溝301の底で検出した。遺物は柱穴466から須恵器杯A(367)が出土した。

**土坑400** (図版9) 調査区中央西寄りに位置する土器埋納土坑である。径0.45mの円形を呈し、埋土は灰黄褐色砂泥で、拳大の石数個の下から瓦器碗、白磁碗が重なった状態で出土した。

**土坑405** 調査区中央で検出した。南北4.0m以上、東西3.0m以上で、深さは0.05~0.1mである。9世紀代の遺物がまともに出てきたため遺構として扱ったが、整地層と捉えることができる。

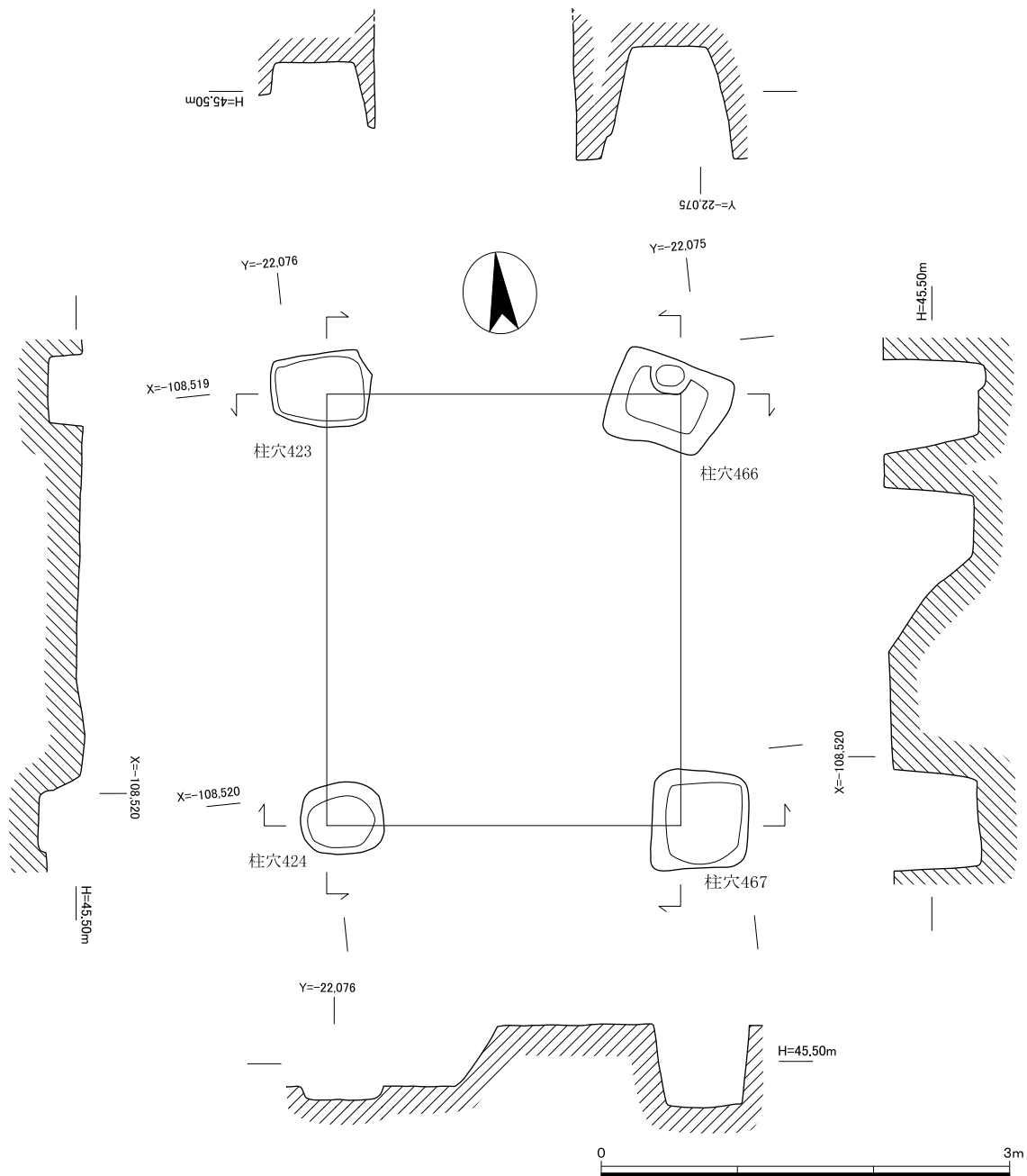


図17 建物1実測図(1:50)



土坑445 調査区中央で検出した。東西2.0m、南北1.5m以上の方形を呈する。深さは0.15mで、埋土は灰黄褐色泥砂で炭を多く含む。

土坑432・433・464 調査区中央で検出した。埋土はにぶい黄褐色泥砂で炭を少量含む。深さは0.15～0.2mである。遺構の重複関係が不明瞭で、遺物の接合も認められる。

### (5) 第5面の遺構 (図18、図版7)

第5面では弥生時代中期後半から後期にかけての流路を検出した。

流路468 (図19) 流路468は、調査区中央部から西半にかけて検出した自然流路である。流路の検出面での規模は、北端では幅4.5～5mである。調査区南半部では東肩が不明瞭であったが、10・12層から古墳時代の土師器長甕、須恵器などが出土しており、断面観察からも流路埋没後も湿地化していたことが判明した。底面の標高は北端が44.8m、南西端が44.7mあり、北東方向から南西方向に流れていたと考えられる。堆積層は暗褐色粘質土層が主体であり、砂礫・砂が混入する。22・23層からは、弥生時代後期の土器が一定量出土した。

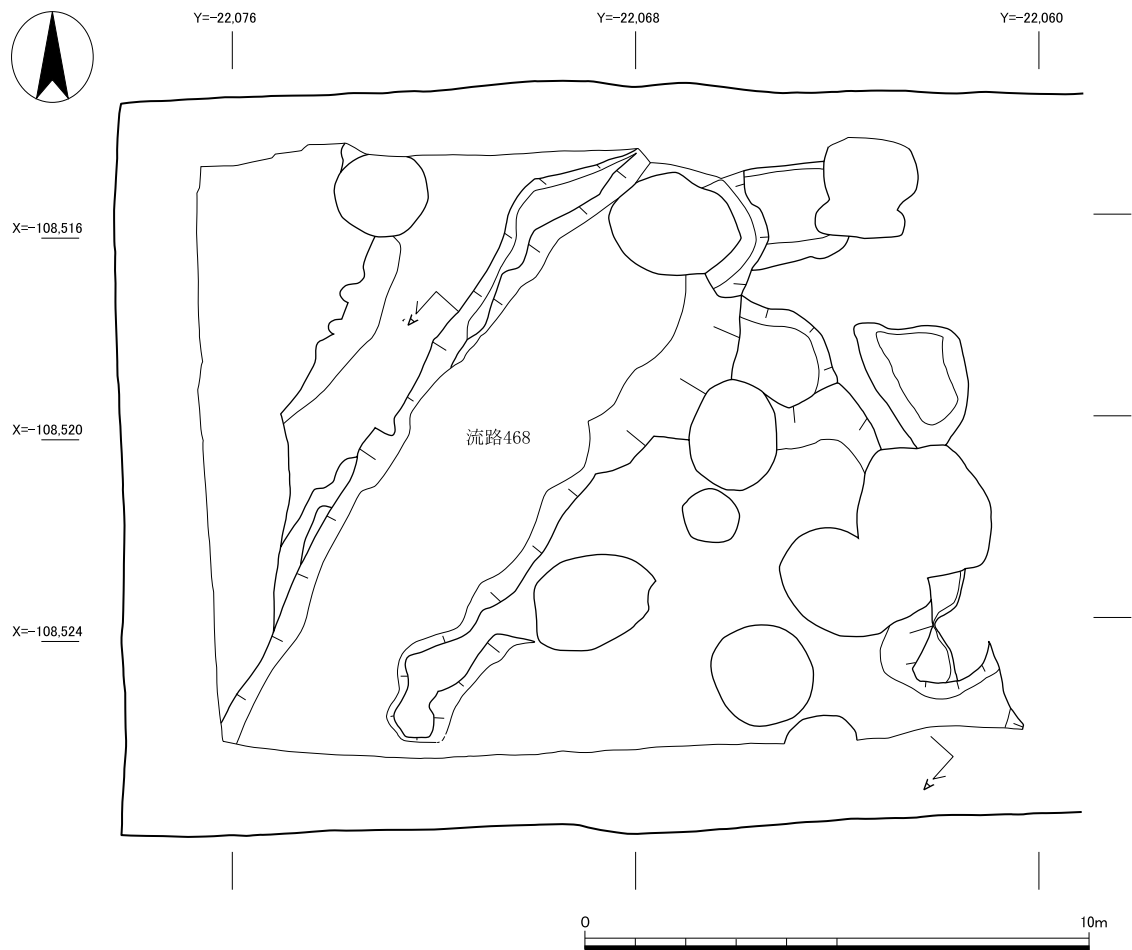
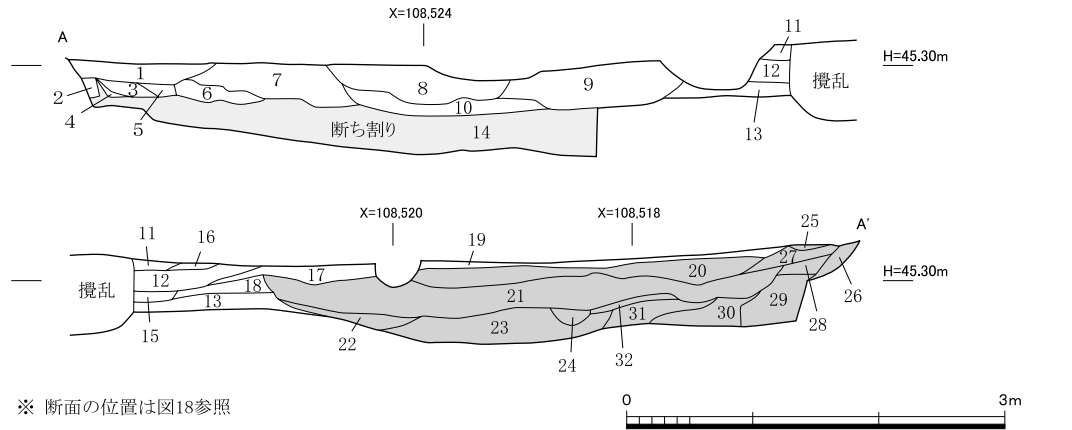


図18 第5面平面図 (1 : 150)



- |   |  |
|---|--|
| <p>1 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥、φ1cmまでの礫中量混</p> <p>2 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色細砂、シルト粘土混</p> <p>3 2.5Y3/2 黒褐色粘土、細砂混</p> <p>4 10YR4/3 にぶい黄褐色細砂～粗砂、10YR3/1 黒色泥土含む</p> <p>5 10YR3/3 暗褐色粗砂～砂礫、φ0.5cmまでの礫混</p> <p>6 10YR4/3～4/4 褐色粗砂～砂礫、φ1cmまでの礫混</p> <p>7 10YR3/1 黒色粘土粗砂～砂礫、φ1cmまでの礫混</p> <p>8 10YR3/2 黒褐色砂泥 砂礫少量混、φ1cmまでの礫混</p> <p>9 10YR5/3～4/4 にぶい黄褐色砂礫、φ3cmまでの礫混</p> <p>10 10YR3/1 黒色粘土、10YR3/3 暗褐色砂礫 砂泥含む、φ1cmまでの礫混</p> <p>11 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、砂礫少量混</p> <p>12 2.5Y3/2 黒褐色砂泥、砂礫少量混</p> <p>13 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質土、粗砂混</p> <p>14 2.5Y3/1 黒褐色粘土</p> <p>15 10YR3/3～3/4 暗褐色砂礫、φ0.5cmまでの礫混</p> <p>16 10YR3/2 黒褐色砂泥、細砂混</p> | <p>17 10YR3/2 黒褐色粘質土、粗砂～砂礫混</p> <p>18 10YR3/3 暗褐色粗砂～砂礫、粘土少量混</p> <p>19 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色砂泥、粗砂～細砂多量混</p> <p>20 10YR3/3 暗褐色砂泥、10YR4/3褐色砂礫～粗砂多く含む</p> <p>21 10YR2/2 黒褐色粘質土、砂礫少量混、φ1～3cmの礫少量混、土器片少量混</p> <p>22 10YR3/3 暗褐色砂礫、10YR4/2灰黄褐色粘質土含む</p> <p>23 10YR3/3 暗褐色粘質土、砂礫混、土器片、炭混</p> <p>24 10YR2/3 暗褐色粘質土、砂礫混</p> <p>25 10YR3/3 暗褐色砂泥、粗砂～砂礫混</p> <p>26 10YR2/2 黒褐色砂泥 粘質</p> <p>27 10YR3/4 暗褐色砂泥、砂礫少量混</p> <p>28 10YR3/4 暗褐色砂泥</p> <p>29 10YR3/3 暗褐色砂泥 粘質、砂礫少量混</p> <p>30 10YR3/3 暗褐色砂泥 粘質、砂礫多量混</p> <p>31 10YR3/2 黒褐色砂泥 粘質、砂礫少量混、φ1cmまでの礫混</p> <p>32 10YR4/3 にぶい黄褐色粘土</p> |
|---|--|
- 流路埋土

図19 流路468断面図 (1 : 60)

## 4. 遺 物

### (1) 遺物の概要

弥生時代から江戸時代に至る各時代の遺物が整理箱にして154箱出土した。その内容は土器・陶磁器類、瓦類、石製品、金属製品、木製品、土製品など多岐にわたるが、その大半は土器・陶磁器類である。

調査では第1面から第5面のそれぞれの遺構面で遺物を採取したが、遺構相互の重複が激しかったため、新しい遺構埋土に古い時代の遺物が混入することが多くみられた。

時代別では平安時代の遺物が多く約50%を占める。次に多いのは室町時代の遺物であり、鎌倉時代に属する遺物は少ない。弥生時代の遺物は流路内より一定量出土した。

なお、平安時代以後の土器形式は小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡跡から出土する土器の編年的研究」<sup>1)</sup>に準じる。

### (2) 土器類

土坑75・76出土土器（1～34）（図20、図版10） 土師器（1～22）、瓦器（23）、国産陶磁器（24～33）、焼締陶器（34）などがある。土師器には皿（1～14）、小壺（15）、塩壺（16～19）、焙烙（20・21）、羽釜（22）などがある。1～4は皿Nr。口径は6.0cm前後で7.0cmを超えるものもある。5は皿Sb。6～14は皿S。口径11.0cm前後であるが大きいものもある。9～11は口縁端部に

表2 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
弥生時代 ～古墳時代	弥生土器、土師器、須恵器		弥生土器14点、土師器2点、須恵器3点		
平安時代	土師器、須恵器、黒色土器、緑釉陶器、灰釉陶器、白色土器、瓦器、輸入陶磁器、瓦類、石製品、金属製品		土師器73点、須恵器62点、黒色土器12点、緑釉陶器43点、灰釉陶器21点、白色土器8点、瓦器3点、輸入陶磁器11点、軒瓦23点、石製品1点、銭貨1点		
鎌倉時代	土師器、須恵器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦器		土師器2点、軒瓦6点		
室町時代	土師器、施釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、金属製品、瓦類		土師器76点、施釉陶器2点、焼締陶器1点、銭貨37点		
安土桃山時代 ～江戸時代	土師器、施釉陶器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、磁器、瓦類、木製品、石製品、土製品、金属製品		土師器43点、瓦器2点、施釉陶器19点、焼締陶器3点、輸入陶磁器3点、軒瓦2点、木製品14点、石製品5点、土製品17点、銭貨2点		
合 計		192箱	511点（32箱）	8箱	152箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物を抽出したため、出土時より38箱多くなっている。

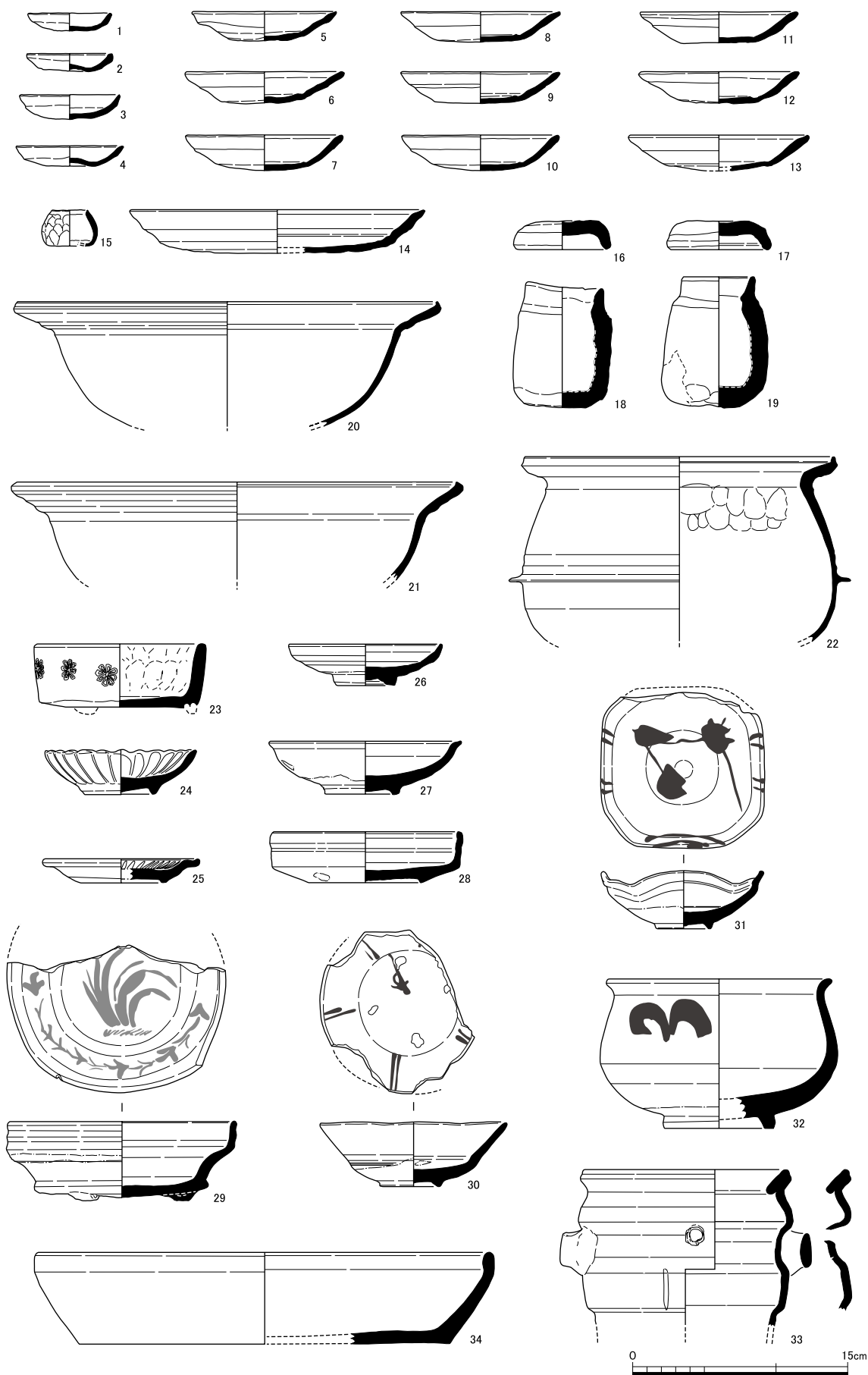


图20 土坑75·76出土土器实测图(1:4)

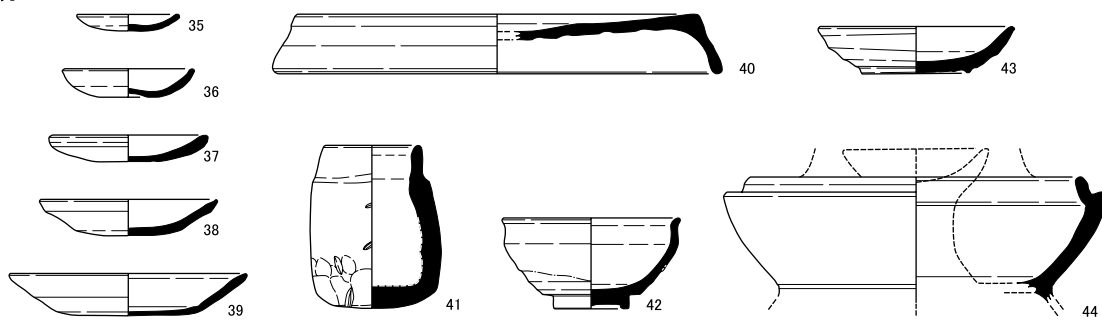
煤が付着している。15はいわゆるつぼつぼである。胴下半部が膨らむ。塩壺は体部が円筒形のもの(18)と、体部がややふくらみ壺形を呈するもの(19)とがある。焙烙(20・21)は口径30cm前後で体・底部は浅い半球形を呈する。台型で成形し口縁部を継ぎ足している。羽釜(22)はふくらんだ胴部下段に鏝が付くもので、口縁部は外反し、端部は上方に小さく突出する。瓦器には香炉(23)、火鉢などがある。香炉は平底の外縁部に三足が付く。体部外面はタテミガキの後、印刻蓮花文を施す。24は伊万里系磁器の菊皿。国産施釉陶器(25～33)には瀬戸・美濃、唐津、軟質施釉陶器がある。25は瀬戸・美濃系の折縁菊皿。底部外面に輪トチン痕。26は底部内面にトチン痕。27は肥前系の皿。釉調は濃淡がはっきりしており、所々にチヂレがある。28は瀬戸・美濃系志野向付。底部外面外に3箇所トチン痕。29は草文志野向付。見込みに目アト3箇所。底部外面にトチン痕。30・31は唐津向付。30は口縁部が5方に開き、見込みに目アト4箇所。31は高台を削り出した後4方の口縁部を内側へ大きく弯曲されている。見込みと高台外周辺に目アト4箇所。いずれも鉄釉で文様を描き灰釉を施す。32は唐津鉄絵草文鉢。33は高取掛花入。口縁部を内側に折り返す。体部にヘラを陰刻した窯印「 $\times$ 」がある。焼締陶器には盤、播鉢などがある。盤(34)は体部が外上方へのび、口縁部は立ち上がる。丹波産。

土坑178出土土器(35～44)(図21) 土師器(35～41)、国産施釉陶器(42・43)、瓦器(44)、焼締陶器、焙烙、染付などが出土した。土師器には皿Nr(35～37)、皿Sb(38)、皿S(39)、蓋(40)、焼塩壺(41)がある。皿Nrは口径5.4cm、器高0.9cmの小と、口径7.4～8.0cm、器高1.5cm前後の大がある。皿Sbは口径9.4cm、器高1.9cm。皿Sは口径12.6cm、器高2.3cmである。40は天井部が平坦で口縁部は短く開く。内面には煤が付着している。口径23.8cmと大きく火消壺の蓋か。焼塩壺(41)は体部が直立し、口縁部はすぼまる。42は鉄釉天目茶椀。口径9.4cm、器高4.8cmの小型品である。43は瀬戸・美濃系の灰釉皿。44は瓦器灯火具。上半部、底部内面中央の受皿部および高台部は欠損している。体部外面はミガキを施す。17世紀前半代に位置付けられる。

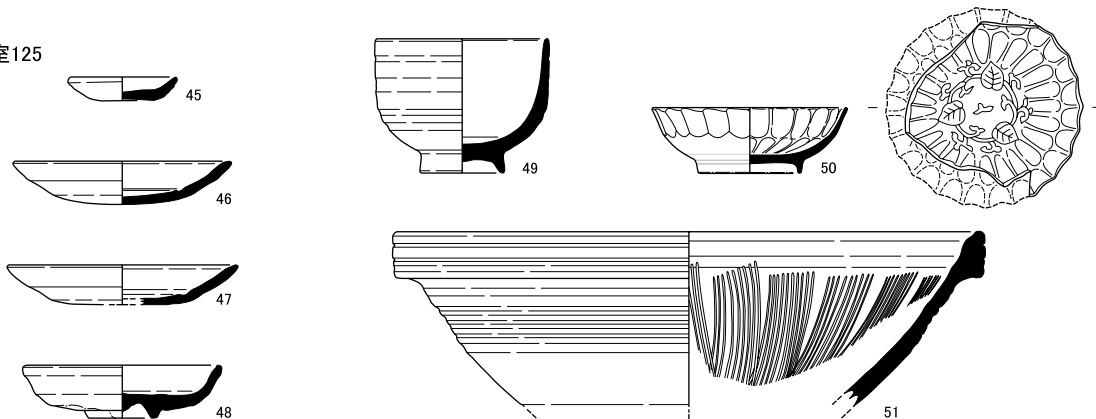
石室125出土土器(45～51)(図21) 土師器(45～47)、国産施釉陶器(48・49)、焼締陶器(51)、染付(50)などがある。土師器皿Nr(45)は口径5.8cm、器高1.3cm、皿S(46・47)は口径12.0cm前後、器高2.2cm前後である。48は唐津産施釉陶器皿で灰釉を施す。49は京焼系丸椀。50は輸入陶磁器染付皿。呉須はきれいに発色している。51は焼締陶器備前産播鉢。口縁端部は拡張して外面に突帯がめぐる。内面の播り目は密である。45～48は17世紀前半から中頃に位置付けられる。49～51は埋土上層からの出土遺物であり、18世紀前半代に石室が廃棄されたことを示している。

石室161出土土器(52～58)(図21、図版10) 土師器(52～54)、国産施釉陶器(55・56)、輸入陶磁器、焼締陶器、瓦器などがある。土師器には皿Nr(52・53)、皿S(54)がある。52は口径6.4cm、器高1.4cmの小。53は口径8.6cm、器高1.9cmの大。皿Sは口径12.0cm前後、器高2.0cm前後である。55は唐津産灰釉皿。56は瀬戸・美濃系の灰釉皿。57は白磁小椀。底部内面を環状に釉を掻き取る。58は青磁鉢。体部内面に蓮弁文が退化した放射状文を施す。遺構には新(161B)・旧(161A)があるが、161Aからは55以外は小片で計測できないが、顕著な時期差は看取できない。17世紀中頃に位置付けられる。

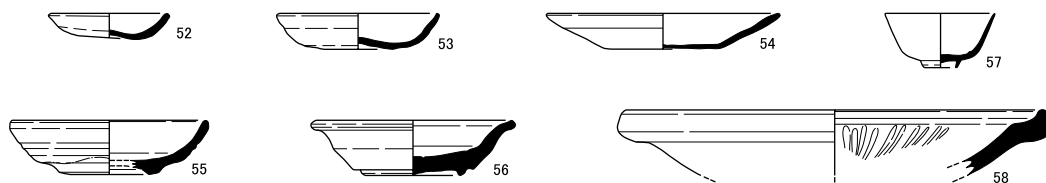
土坑178



石室125



石室161



土坑169



土坑163

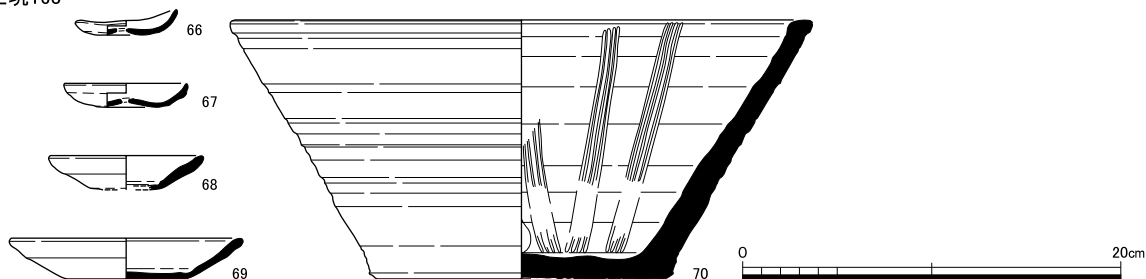


图21 土坑178·石室125·石室161·土坑169·土坑163出土土器实测图(1:4)

土坑169出土土器(59～65)(図21、図版10) 土師器(59～62)、国産施釉陶器(63～65)、焼締陶器などがある。土師器皿Sb(59・60)は口径9.0cm、器高2.0cm前後である。皿S(61・62)は口径9.6cm前後、器高2.0cm前後である。63・64は瀬戸・美濃系の灰釉皿。65は美濃産の天目茶碗。全面に鉄化粧を施している。17世紀前半から中頃に位置付けられる。

土坑163出土土器(66～70)(図21) 土師器(66～69)、焼締陶器(70)、施釉陶器などがある。土師器皿Nr(66・67)は口径5.4～6.6cmで、焼成前に中央部に0.4cmの小孔を穿つ。皿S(68・69)は68が口径8.4cmと小さい。70は信楽の播鉢。播鉢の櫛目の単位は4本である。16世紀後半に位置付けられる。

土坑126出土土器(71～81)(図22、図版10) 土師器(71～80)、施釉陶器(81)、焼締陶器、瓦器などある。土師器皿Nr(71～74)は口径6.0cm前後、器高1.3cm前後である。皿Sb(75～77)は口径10.0cm前後、器高2.0cm前後である。皿S(78～80)は口径14.5cm前後、器高2.2cm前後である。81は瀬戸・美濃系鉄釉天目茶碗。体部は直線的に開き、口縁部は屈曲して端部は外反する。

石室177出土土器(82～88)(図22、図版10) 土師器(82～87)、焼締陶器(88)、輸入陶磁器などが出土した。皿Sh(82)は口径7.0cm前後、器高1.8cm前後である。皿N(83・84)は口径10.0cm前後、器高2.1cm前後である。皿S(85～87)は口径14.0cm前後、器高2.0cm前後であるが、87は口径15.0cmである。焼締陶器播鉢(88)は信楽産。体部は直線的に開き、口縁端部は外上方につまみ出す。櫛目の単位は4本である。輸入陶磁器には白磁碗、青磁碗の小片がある。16世紀前半から中頃に位置付けられる。

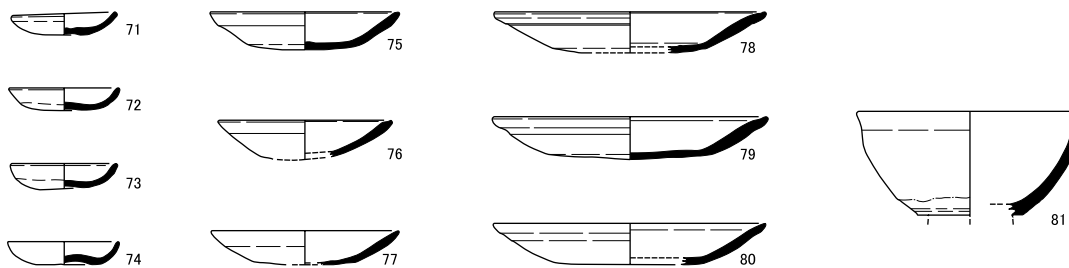
土坑232出土土器(89～103)(図22、図版10) 土師器(89～102)、施釉陶器(103)、瓦器などが出土した。土師器皿Sh(89)は口径7.0cm前後、器高1.7cm前後である。皿N(90・91)は口径10.5cm前後、器高2.1cm前後である。皿S(92～102)は口径が8.0cm台(92～96)と12.0cm台(97・98)および15.0cm前後(99～102)の3群がある。103は鉄釉天目茶碗である。体部は直線的に外上方へのび、口縁部は屈曲して端部はわずかに外反する。瓦器は火鉢・羽釜・鍋などがあるが小片である。16世紀前半に位置付けられる。

土坑227出土土器(104～107)(図22、図版11) 土師器、瓦器、国産施釉陶器、輸入陶磁器などが出土したが、形状が明らかなものは土師器皿(104～107)である。土師器には皿Sh(104)、皿S(105～107)があり、皿Sは口径が8.0cm台(105)、12.0cm台(106)、15.0cm台(107)の3群がある。15世紀末から16世紀前半に位置付けられる。

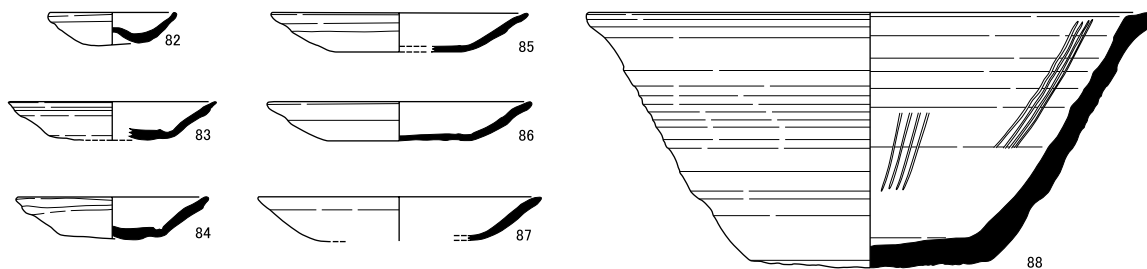
土坑281出土土器(108～127)(図22、図版11) 土師器、焼締陶器備前産壺・播鉢、信楽産播鉢、瓦器羽釜などが出土したが、大半が土師器皿(108～127)であり、他の遺物は体部の小片であり図示していない。土師器皿Sh(108～113)は口径6.5～7.0cmで、器高は1.6cm前後である。皿N(114～116)は7.0cm台(114・115)、10.0cm前後(116)の2群がある。皿S(117～127)は8.0cm台(118～120)、10.0cm台(121)、12.0cm前後(122・123)、15.0cm前後(124～127)の4群がある。15世紀末頃に位置付けられよう。

土坑283出土土器(128～149)(図23、図版11) 15世紀中頃に属する土師器皿が一括廃棄さ

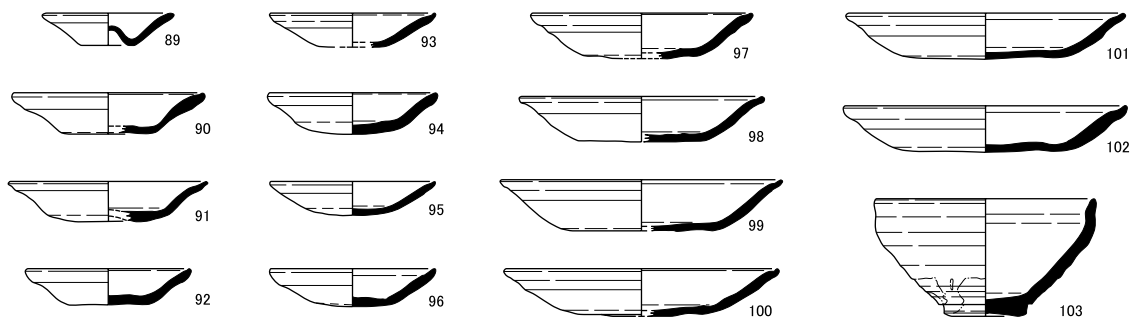
土坑126



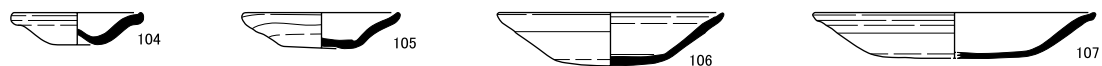
石室177



土坑232



土坑227



土坑281

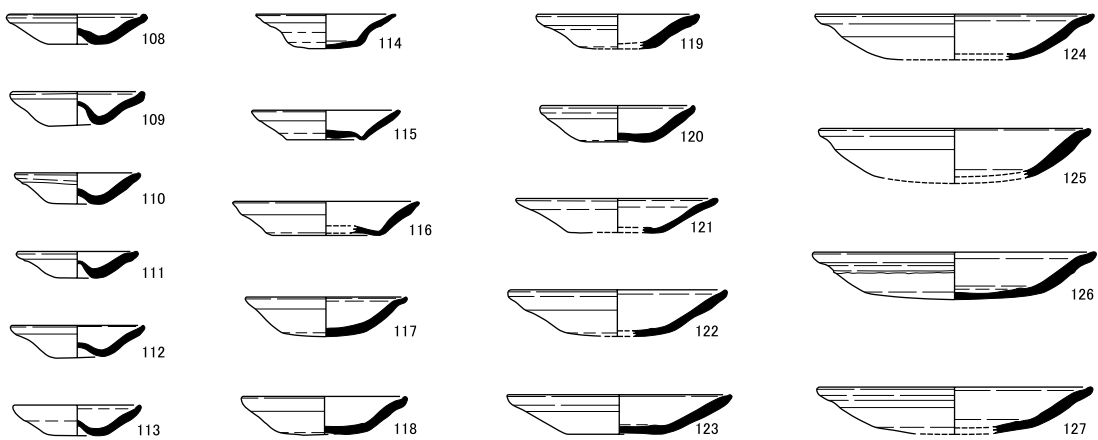


图22 土坑126·石室177·土坑232·土坑227·土坑281出土土器实测图(1:4)



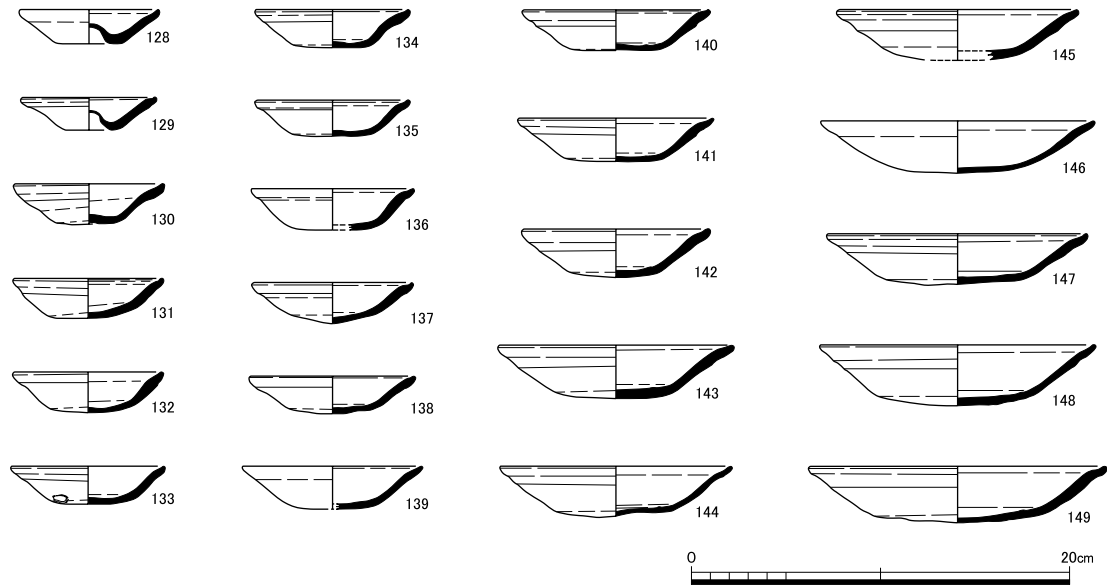


図23 土坑283出土土器実測図（1：4）

れた土器群。皿Sh、皿Sがある。皿Sが主体を占める。皿Nは小片がわずかに出土しているにすぎない。皿Sh（128・129）は口径7.2cm前後、器高1.7cm前後である。出土量は少ない。皿Sは口径8cm台の皿S小（130～138）、10cm台の皿S中（139～142）、12cm台の皿S大1（143～145）、14cm前後の皿S大2（146～148）、16cm前後の皿S大3（149）に5分できる。体部がなだらかに外反し、口縁端部がつまみ上げられた形態をなす。皿S大には形態も多少の個体差がある。体部の外反が弱い個体や、口縁端部のつまみ上げがほとんどみられない個体もある。皿Sは色が赤味を帯びる群と、本来の白から黄白色の群に分類できる。この土器群の特徴は、皿S大3以外は赤系の皿Sが大半を占めることである。

土坑271出土土器（150～185）（図24、図版12）土師器（150～159）、黒色土器（160）、瓦器（161）、須恵器（162～167・170）、灰釉陶器（168・169・171）、白色土器（172・173）、輸入陶磁器（174～180・185）、緑釉陶器（181～184）が出土した。土師器皿は口縁部が屈曲する形態の皿A（150～153）と外反する形態の皿N（154～159）がある。皿Aは口径が9cm台のものから12cm台のものまでがある。器壁は厚く、形態も崩れている。皿Nは口径10cm台のものと15cm台のものがある。皿N小（154・155）は口縁部が外反している。皿N大（156～159）は口縁部上半から端部を上方へ立ち上げ、端部だけが外反状を呈するもの（158・159）と、体部上部から口縁部外面にナデによる浅い二段の凹みを持ち、断面三角形状を呈するもの（156・157）がある。11世紀中頃から12世紀中頃の土師器が混在している。160は黒色土器甕。ミガキは認められない。161は瓦器皿。内面ミガキ。口縁部外面もミガキが施されているが不鮮明。162は軟質の須恵器皿。口縁部は黒色化している。170は須恵器皿。緑釉陶器の素地に内外面自然釉がかかる。底部は削り出しの蛇ノ目高台。163は軟質の須恵器鉢。口縁部は玉縁状を呈する。底面外面糸切り。164は鉢底部。内面磨滅している。165は短頸壺。外面に自然釉が厚くかかる。肩部に紐が付く。166・167は壺底部。166は短頸壺又は双耳壺の底部。灰釉陶器には皿（168・169）、椀（171）がある。168は段皿。168・

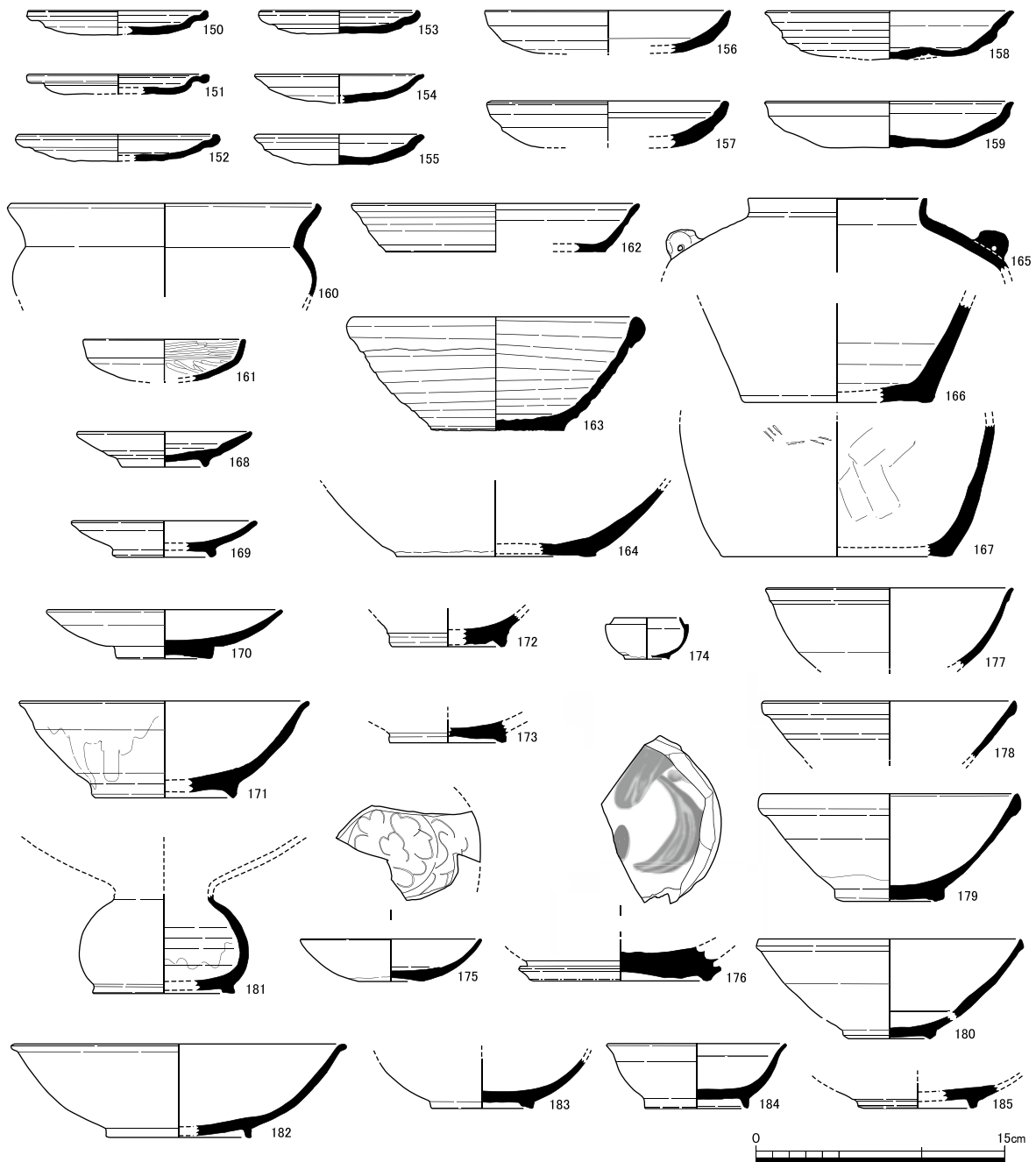


図24 土坑271出土土器実測図（1：4）

169は底部に低い輪高台を貼り付ける。171は底部糸切りで断面三角形の高台を貼り付ける。172・173は白色土器。底部は削り出しの輪高台。173は内面にヘラミガキを施す。181から184は緑釉陶器。181は唾壺。口縁部は欠損。下方に張りのある体部に輪高台が付く。外面ヘラミガキ。釉は外面および内面体部下半から底部に施釉。猿投産。9世紀。182は大椀。底部に方形の輪高台が付く。内外面丁寧なヘラミガキを施す。内外面施釉。猿投産。9世紀中頃。183は椀。底部に蛇ノ目高台が付く。内外面に施釉。猿投産。9世紀。184は小椀。口縁部内面一条の浅い凹線がめぐる。底部内外面にトチン痕。底部外面以外濃緑色の釉薬を施す。174は白磁合子身。口径4.0cmと小さく器壁は薄い。口縁部内外面および底部外面は露胎である。175は青磁皿。底部外面露胎。176は鉄絵白

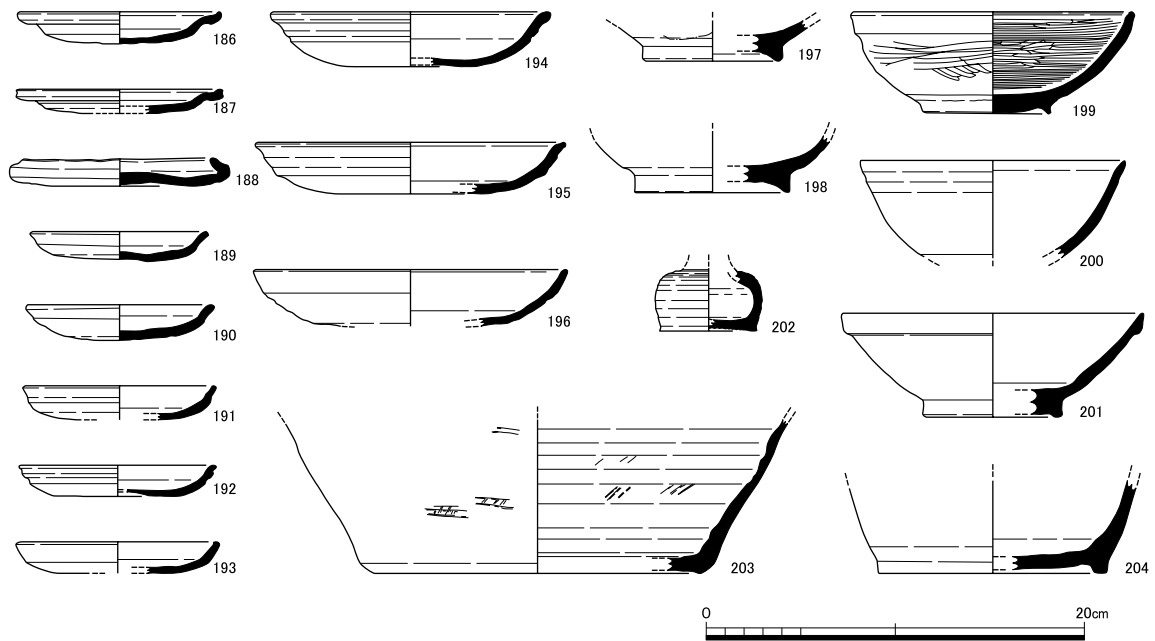


図25 溝301出土土器実測図（1：4）

磁鉢。体部と底部の境界に稜を持つ。底部はケズリで短い高台を削り出す。底部外面露胎。177～180は白磁碗。178・179は内厚な玉縁口縁で、179は底部外面露胎である。180は口縁部に小さな玉縁を有する青白磁碗である。底部外面露胎である。185は越州窯青磁碗底部。

溝301出土土器（186～204）（図25、図版12）土師器（186～196）、須恵器（202～204）、灰釉陶器（197・198）、瓦器（199）、輸入陶磁器（200・201）、緑釉陶器、黒色土器などが出土した。土師器皿は口縁部が屈曲する形態の皿A（186・187）、コースター形の皿Ac（188）、外反する形態の皿N（189～196）がある。皿Aは口径が11cm前後である。皿Acは口径10cm台で、器高は1.5cm前後。底部周縁部のナデによる凹みが不明瞭で、口縁が底部周縁部から直接内上方へ折り込んでいる。皿Nは口縁部上半から端部を上方へ立ち上げ、端部だけが外反状を呈する。体部上半から口縁部外面はナデによる二段の凹みをもつ。口径は10cm台のもの、15cm前後のもの、16cmを超えるものの3群がある。202は須恵器ミニチュア壺。口縁部は欠損している。底部糸切り。203・204は壺底部。灰釉陶器碗（197・198）は底部糸切りで、断面三角形の高台を付す。体部内面施釉。瓦器碗（199）は内外面ヘラミガキを施し、口縁端部内面に1条の凹線をめぐらす。200・201は白磁碗。201は内厚な玉縁口縁で体部下半は露胎である。11世紀後半から12世紀前半に位置付けられる。

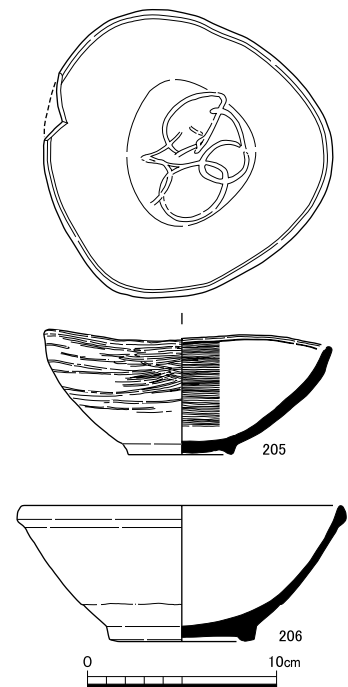


図26 土坑400出土土器実測図（1：4）

土坑400出土土器（205・206）（図26、図版12）瓦器碗（205）と輸入陶磁器白磁碗（206）が出土した。瓦器碗は平面形

態が隅丸三角形を呈している。器壁は厚めで内外面丁寧にヘラミガキを施し、口縁端部内側に1条の凹線をめぐらす。底部に暗文を施す。白磁碗は内厚の玉縁口縁を有する。体部下半から底部は露胎である。11世紀後半に位置付けられる。

溝289出土土器(207~237)(図27、図版12) 土師器(207~217)、須恵器(218~224)、黒色土器(225・226)、緑釉陶器(227~229)、灰釉陶器(231~233)、白色土器(234~237)、輸入陶磁器(230)などがある。土師器には皿(207~212)、杯(213~216)、甕(217)、高杯などがある。皿A(207~210)は口径11cm前後で、器高は1.0cm台である。皿Ac(211・212)は、口径は皿Aとはほぼ同様であるが器高は1.0cm以下で、口縁端部も同様であるが全形は円盤状を呈している。杯(213~216)は口径14.0cm台から16.0cm台で、器高は2.0cm台である。216は体部上半から口縁部がナデのため浅く凹み、口縁端部は外反処理されている。甕(217)は丸い体部に短く立ち

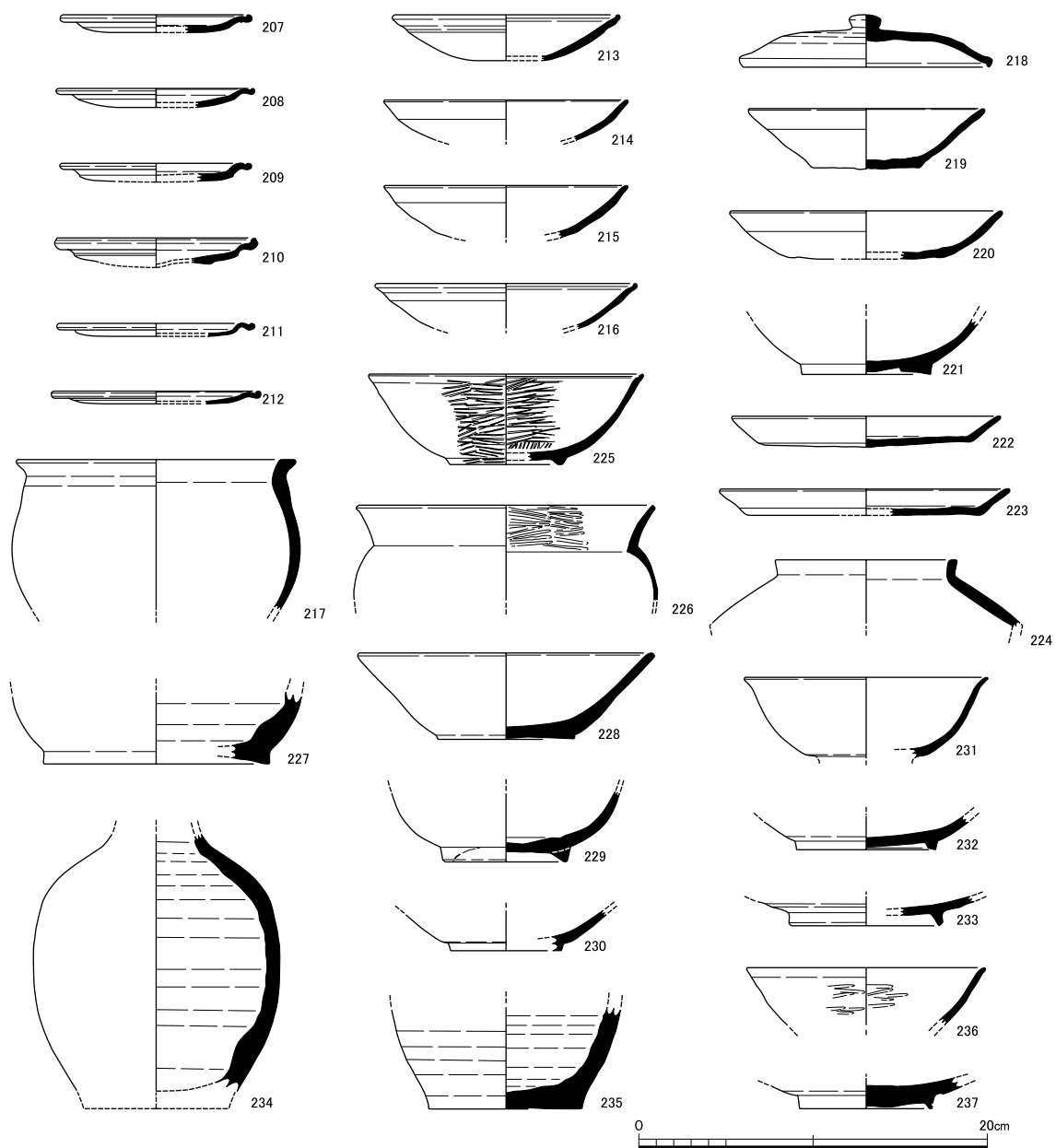


図27 溝289出土土器実測図(1:4)

上がる口縁部で、上端に面をもつ。須恵器には蓋(218)、杯(219・220)、椀(221)、皿(222・223)、壺(224)、甕などがある。蓋は平坦な天井部と屈曲した口縁部からなり、つまみが付く。219・220は杯A。平らな底部に体部は直線的に外上方へのびる。口縁部ヨコナデ、底部はヘラ切り後ナデ調整。椀は底部削り出しの蛇の目高台。内面は粗いヘラミガキを施す。皿(222・223)は平坦な底部で、外傾度の大きい短い体部をもつ。口縁部内外面ヨコナデ、底部はヘラ切り後粗いナデ調整。224は短頸壺。短く直立する口縁部をもつ。外面に自然釉付着。他壺体・底部や甕体部片が多く出土している。黒色土器には椀(225)、甕(226)がある。椀はB類。内外面とも丁寧にヘラミガキが施され、口縁端部内側に1条の沈線がめぐる。甕はA類。丸い体部に外反した口縁部が付く。口縁部内面はヘラミガキで他はナデ調整。緑釉陶器には、壺(227)、椀(228・229)などがある。227は底部は削り出しの平高台。灰白色の軟質素地に浅黄色の釉を全面に施す。山城産。228は底部は削り出しの平高台で、体部は外上方に直線気味に立ち上がり、端部は丸くおさめる。にぶい黄橙色の軟質素地に浅黄色の釉を全面に施す。山城産。229は糸切りの底部に断面三角形の高台を貼り付ける。にぶい橙色の軟質の素地に濃緑色の釉を底部外面以外に施す。近江産。10世紀前半。その他皿類や香炉蓋などが出土している。灰釉陶器には椀(231・232)、皿(233)がある。231は体部がゆるやかに外上方へ立ち上がり、口縁部は外反し端部は丸くおさめる。内外面施釉。232は椀底部。断面方形の短い高台が付く。内面施釉。233は皿底部。短い三日月高台が付く。内面体部と底部の境に重ね焼き痕。体部内面施釉。白色土器には壺(234・235)、椀(236・237)、高杯などがある。壺は内面にロクロ成形痕が顕著に認められる。外面はヘラケズリ、ヨコナデ調整。235の底部には静止糸切り痕が残る。236は椀口縁部。内外面粗いミガキ調整。237は椀底部。削り出しの輪高台で内面ミガキ調整。230は白磁椀底部。土師器皿・杯類から10世紀末から11世紀初頭の年代に位置付けられる。

溝285出土土器(238～284)(図28、図版13) 土師器(238～253)、須恵器(254～269)、緑釉陶器(270～278)、白色土器(279・280)、灰釉陶器(281～284)、黒色土器、輸入陶磁器などがある。土師器には皿A(238～241)、杯A(242～247)、杯B(248)、高杯(249)、甕(250～253)などがある。皿A・椀A・杯Aの調整は、ヘラケズリによるc手法のもの(238・241・244～246)と、オサエとナデによるe手法のもの(239・240・242・243・247)がある。ヘラケズリは全体的に粗く雑であり、ケズリ残しのあるものも見られる。皿Aは口径16.0cm台の皿AⅡと、口径18.0cm前後の皿AⅠがある。杯Aは口径15.0cm前後の杯AⅡと、口径18.0cm前後の杯AⅠがある。248は杯B。口縁部ヨコナデ。外面はヘラケズリ調整。249は高杯脚柱部。棒状の芯に粘土を巻きつけ、ヘラケズリで断面七角形に面取りする。タテ方向の粗いミガキ調整。杯部・裾部は小片で図示していない。甕(250～253)は全形が口縁より張り出したもの(253)、体部の張り出し方が小さいもの(250)、口径より小さいもの(251・252)などがあり、屈曲した口縁部が付く。口縁部は端部を内上方へ突起させておさめる。口縁部と体部の境界には成形時に生じた段が残る。須恵器には杯、皿、椀、鉢、壺、甕などがある。皿(256)はやや丸味を持つ体部で口縁部は外反し、端部は面取りしている。口縁部内外面はヨコナデ。内面に灰が付着する。杯A(254・255)は平坦な底部

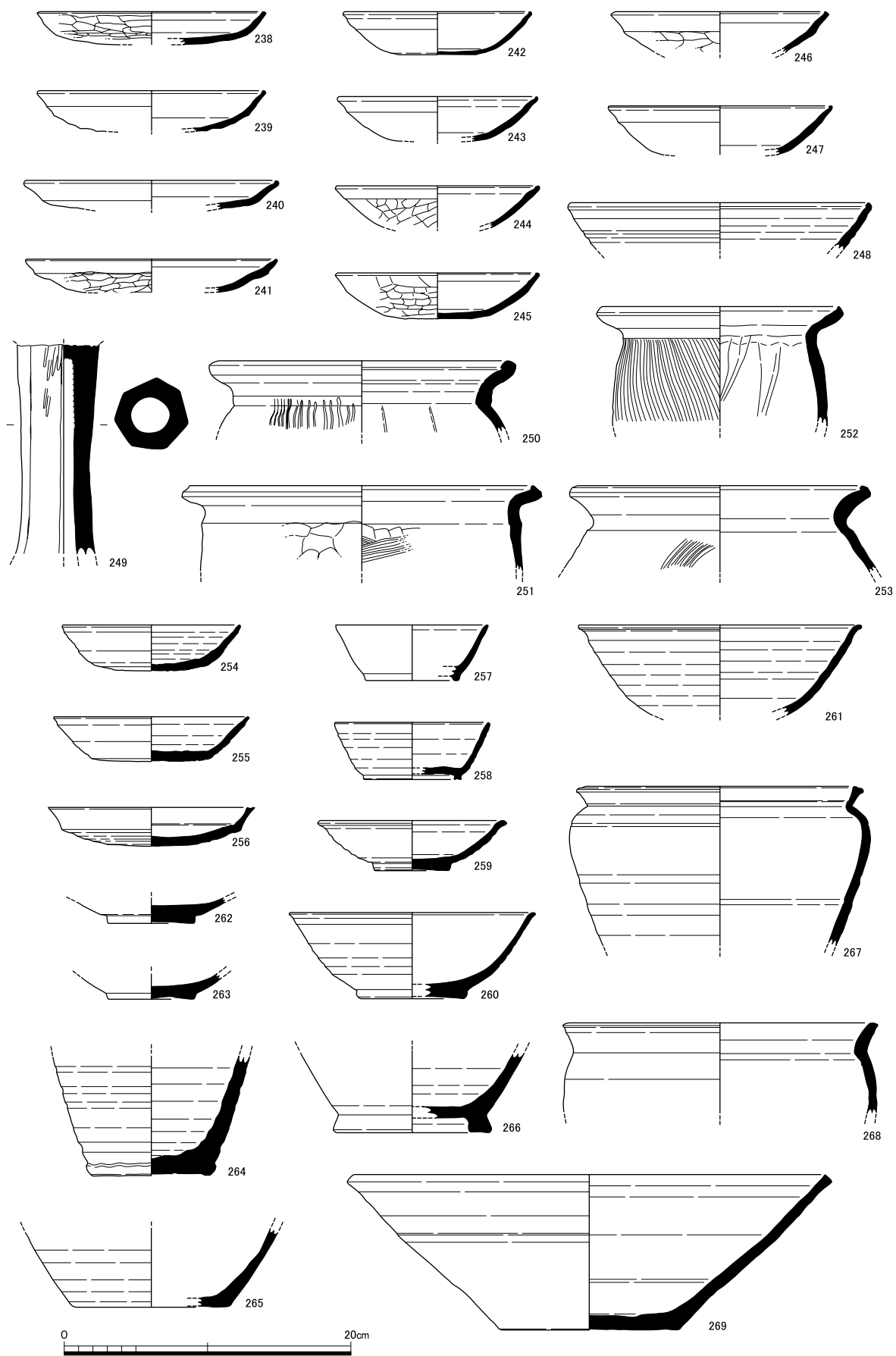


图28 溝285出土土器实测图1 (1:4)

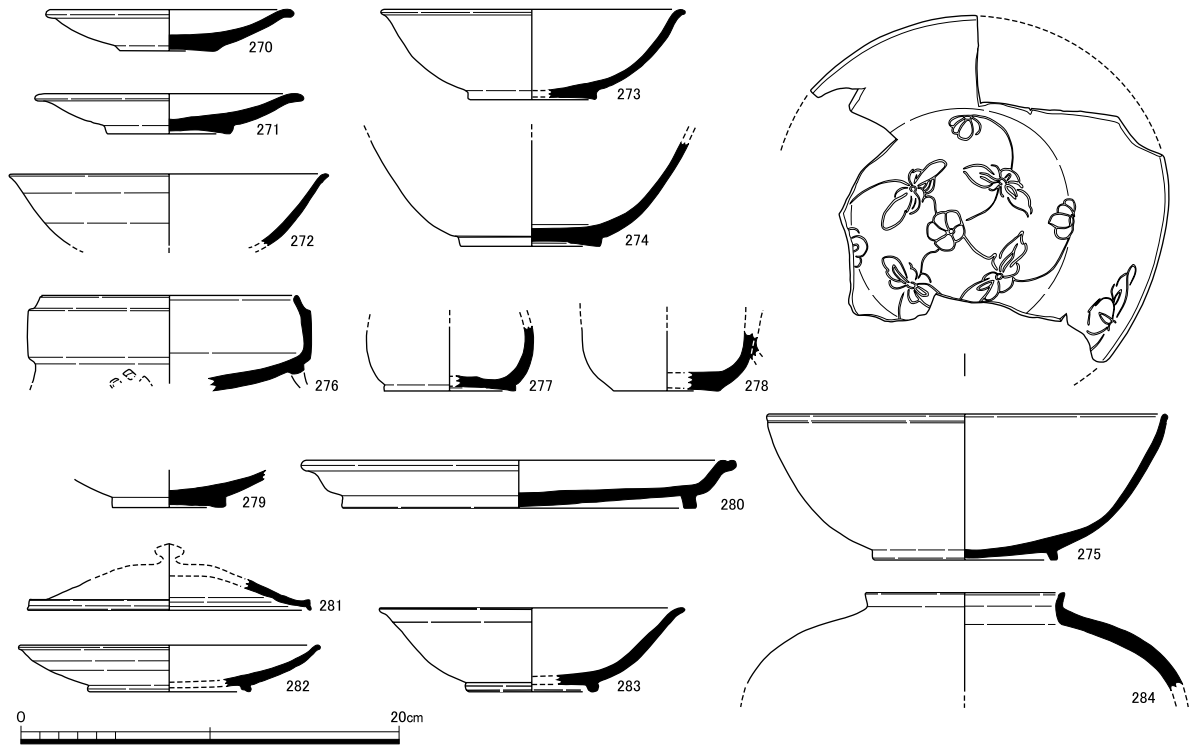


図29 溝285出土土器実測図2 (1:4)

に体部はやや内弯気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラオコシの後ナデ調整。杯B (257・258) は平坦な底部に断面方形の高台が付く。体部は直線的に外上方へのび、端部は丸くおさめる。椀 (259～262) は底部削り出しの平高台。体部は内弯気味に外上方へのび、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。259～261は内外面ヨコナデ調整。263は底部削り出しの蛇ノ目高台。262・263は内面粗いヘラミガキ調整。264～266は壺底部。267～269は鉢。267・268は外側に開く体部から、上半で内弯気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字形に外側へ屈曲する。269は体部が直線的に外上方へのび、口縁端部は外傾する面をもち、上・下端共にわずかに突出する。緑釉陶器には皿 (270・271)、椀 (272～275)、香炉 (276)、壺 (277・278) がある。皿は底部が削り出しの平高台で、体部は浅く、口縁部は外反し、端部を丸くおさめる。270は内面ミガキ。灰白色の軟質の素地に浅黄色の釉を全面に施す。271は内外面ミガキ。灰白色の軟質の素地に灰白色の釉を全面に施す。山城産。272は体部が内弯気味に外上方へのび、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。外面ヨコナデ、内面ミガキ調整。灰白色の軟質の素地ににぶい黄色の釉を施す。山城産。273は削り出しの平高台で、体部は外上方にゆるやかに立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ヨコナデ。灰白色の素地に浅黄色の釉を全面に施す。山城産。274は削り出しの蛇ノ目高台で口縁部は欠損する。外面ヨコナデ、内面ミガキ調整でトチン痕。灰白色の素地に浅黄色の釉を全面に施す。275は大型の椀。底部には断面方形の輪高台が付く。体部は丸味をもって立ち上がり、口縁端部を丸くおさめる。体部内外面四方および底部内面に陰刻花文をもつ。内外面ナデの後全面にミガキを施し、灰白色の釉を全面に施す。猿投産。9世紀。香炉 (276) は底部にゆるやかに外下方に開く脚が付くが、端部は欠損しており不明である。体部は直立し、内傾する口縁

部が付く。脚部には透かしを設けるが形態は不明である。体部・脚部外面に陰刻花文をもつ。ナデ調整の後体部外面に粗いミガキを施す。灰白色の釉を厚く全面に施す。猿投産。9世紀。277・278は壺。277は底部削り出しの蛇ノ目高台で、下膨れ気味の体部をもつ。外面ヘラミガキで黄緑色の釉を全面に施す。278は体部に板状の把手が付く小壺。外面ヘラミガキで、浅黄色の釉を全面に施す。279は白色土器碗の底部。削り出しの平高台。内外面剥離が著しく調整不明。280は多彩陶盤の素地。底部に輪高台が付く。体部は外上方へのび、口縁部は外反し、内側に1条の沈線がめぐる。内外面ヨコナデ調整。器形は西寺跡出土の三彩盤に近似する。灰釉陶器には蓋(281)、皿(282)、碗(283)、壺(284)などがある。281は天井部中央は欠損しているが、天井部は丸味をもってゆるやかに口縁部に至る。端部は下方に屈曲する。外面に施釉。282は平坦な底部にわずかに内傾し、凹む端面をもつ低い高台が付く。外面ヘラケズリ、内面ナデ調整。内面に施釉。283は底部に断面方形の輪高台が付く。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整。内面に施釉。284は短頸壺。口縁部は短く立ち上がり、端部は丸くおさめる。外面に施釉。

土坑405出土土器(285～292)(図30) 土師器(285)、須恵器(287～292)、緑釉陶器(286)、黒色土器などがある。土師器には碗A(285)、皿、杯、甕などがある。285は口径12.5cm、器高3.4cm。口縁部および内面ナデ、体部外面オサエ。他の器形は小片で計測できない。須恵器には蓋(287)、杯A(289)、杯B(287)、壺(290～292)、甕などがある。287は器壁が厚く、口縁端部および内面に自然釉が厚く付着している。289は軟質で底部ヘラ切り。口縁部外面は黒色化している。288は小型で器壁も薄い。底部ヘラ切りで、内外面ヨコナデ。290は瓶子体・底部。丸い体部に断面方形の高台が付く。291は壺Gの体・底部。底部は糸切りで、細い筒状の体部。内外面にロクロ目の凹凸が顕著に残る。286は緑釉陶器碗。底部に断面方形の輪高台を貼り付け、体部は内弯気味に外上方へのび、口縁部は外反する。口縁端部はU字形に切り欠き、体部にはヘラで押しあげて内面に突出した輪花をつくる。オリーブ黄色の釉を全面に施す。猿投産。9世紀。

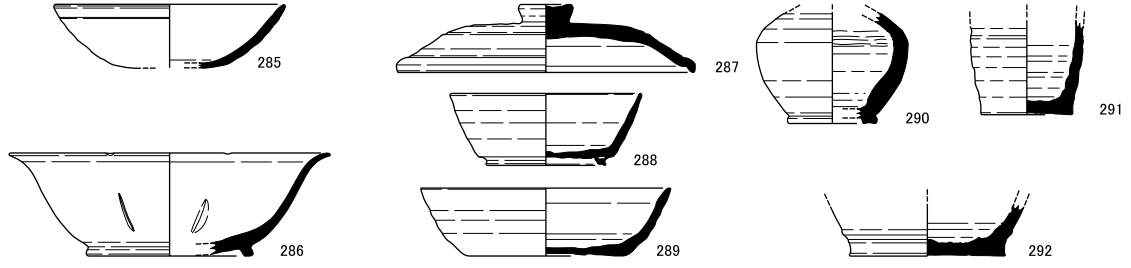
土坑445出土土器(293～301)(図30、図版13) 土師器(293～295)、須恵器(296～299)、緑釉陶器(300・301)がある。土師器には碗(293・294)、杯B(295)、高杯、甕がある。碗は口径13.0cm台で、器高は3.5cm。口縁部および内面ナデ、外面オサエ・ナデ調整。295は口縁部および内面ナデ、体部外面ヘラケズリ調整。須恵器には蓋(296)、杯A(297・298)、瓶子(299)、甕などがある。296は天井部が平らで、つまみは付かない。杯Aは底部ヘラ切りで、体部は外上方へ直線的にのび、端部は丸くおさめる。口縁部ヨコナデ。体部にロクロ目混顕著に残る。瓶子は平坦な底部から卵形の体部が立ち上がる。底部は糸切り。緑釉陶器には皿(300)、碗(301)がある。いずれも体・底部であるが、削り出しの平高台。灰白色の軟質の素地に淡緑灰色の釉を全面に施す。山城産。

土坑432・433・464出土土器(302～321)(図30、図版13) 遺構の切り合い関係が不明瞭で、かつ須恵器鉢(314)、壺(315)などが接合したため一括して掲載した。

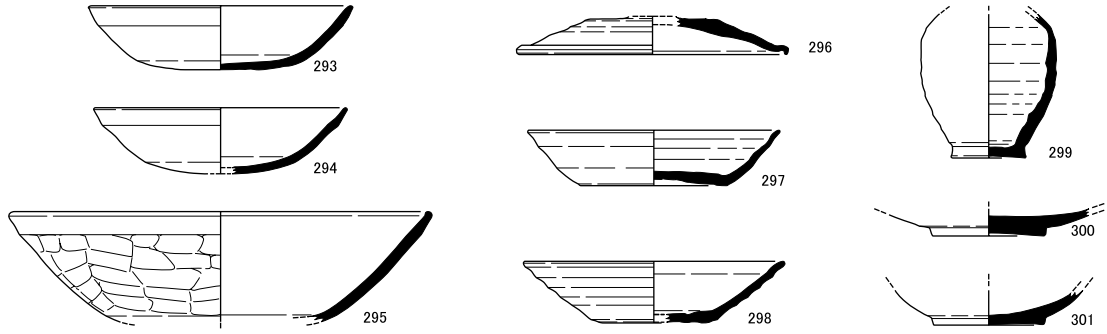
土師器碗(303)、皿(302・308・309)、杯(304～306)、甌(310)、黒色土器碗(307)、須恵器



土坑405



土坑445



土坑432·433·464

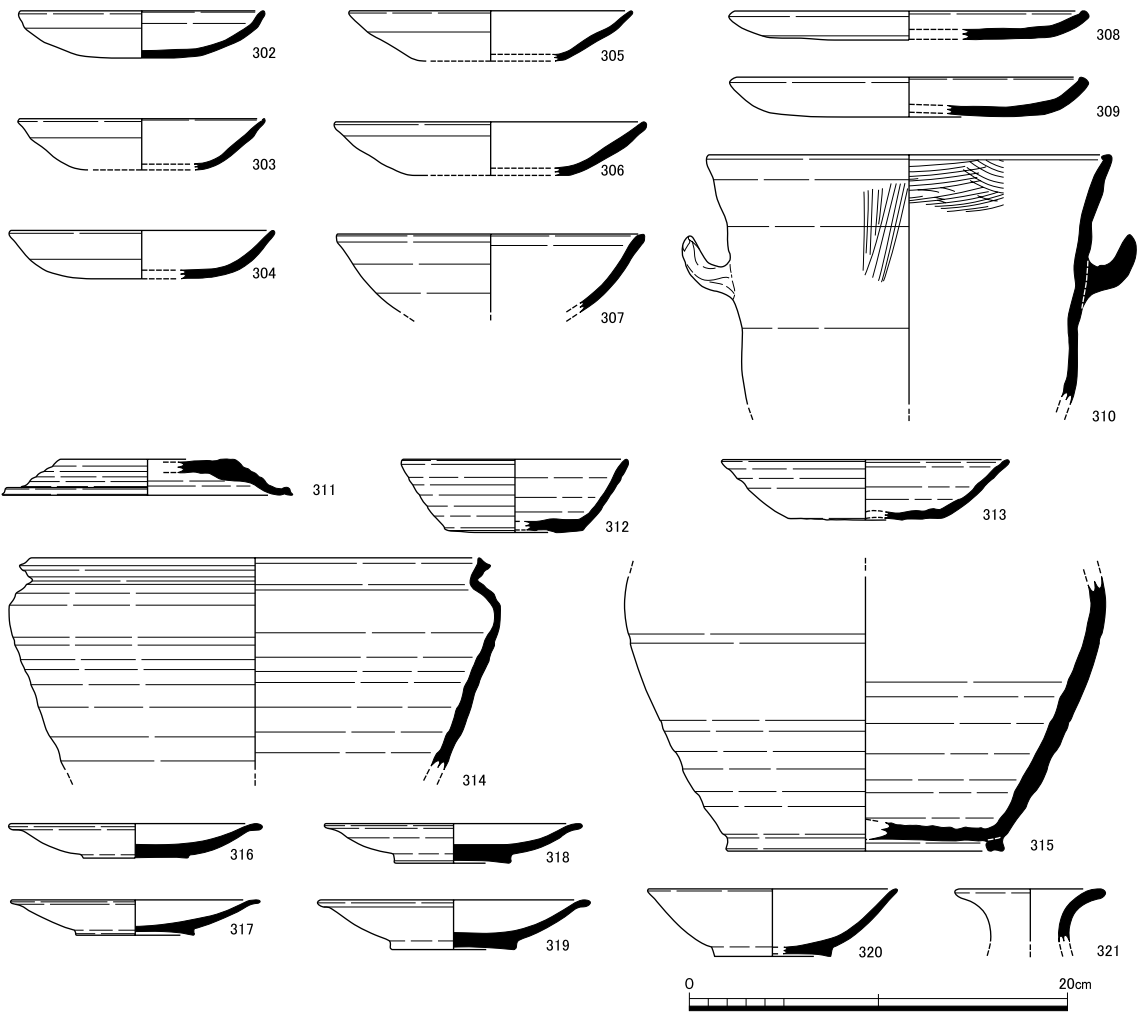


图30 土坑405·土坑445·土坑432·433·464出土土器实测图(1:4)

蓋 (311)、杯A (312・313)、鉢 (314)、壺 (315)、緑釉陶器皿 (316～319)、椀 (320)、壺 (321) がある。302～305はe手法。306・308・309は体部外面ヘラケズリ調整であるが不鮮明。310は甌で底部は欠損する。口縁部は外反し、端部を内上方へ突起させておさめる。体部上半に把手が付く。口縁部内側および体部外面は粗いハケ調整。須恵器蓋は、天井部が平坦でつまみは付かない。杯A (312・313) は底部ヘラ切りで、体部は外上方へ直線的にのびる。端部は丸くおさめる。313は軟質で、体部の外傾度が大きい。鉢 (314) は、外側に開く体部から上半で内弯気味に立ち上がり、口縁部が「く」の字形に外側へ屈曲する。口縁端部は外傾する面をもち、上・下端共わずかに突出する。壺 (321) は、丸味の強い体部に低い高台を貼り付ける。全体をロクロ成形し、体部下半はヘラケズリ。307は黒色土器椀A類。内面粗いミガキ。緑釉陶器皿 (316・318・319) は、底部が削り出しの平高台で、体部は浅く口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。内外面ナデ調整の後、内面および体部外面ミガキ。灰白色の軟質の素地に浅黄色から灰白色の釉を全面に施す。山城産。317は削り出し。316などと同様の形体であるが、器壁は薄くシャープなつくりである。内外面ミガキ。内外面底部に三叉トチン痕。灰黄色の素地にオリブ黄色の釉を全面に施す。320は削り出しの平高台の小型椀。内外面ミガキ。灰白色の軟質の素地にオリブ黄色の釉を全面に施す。

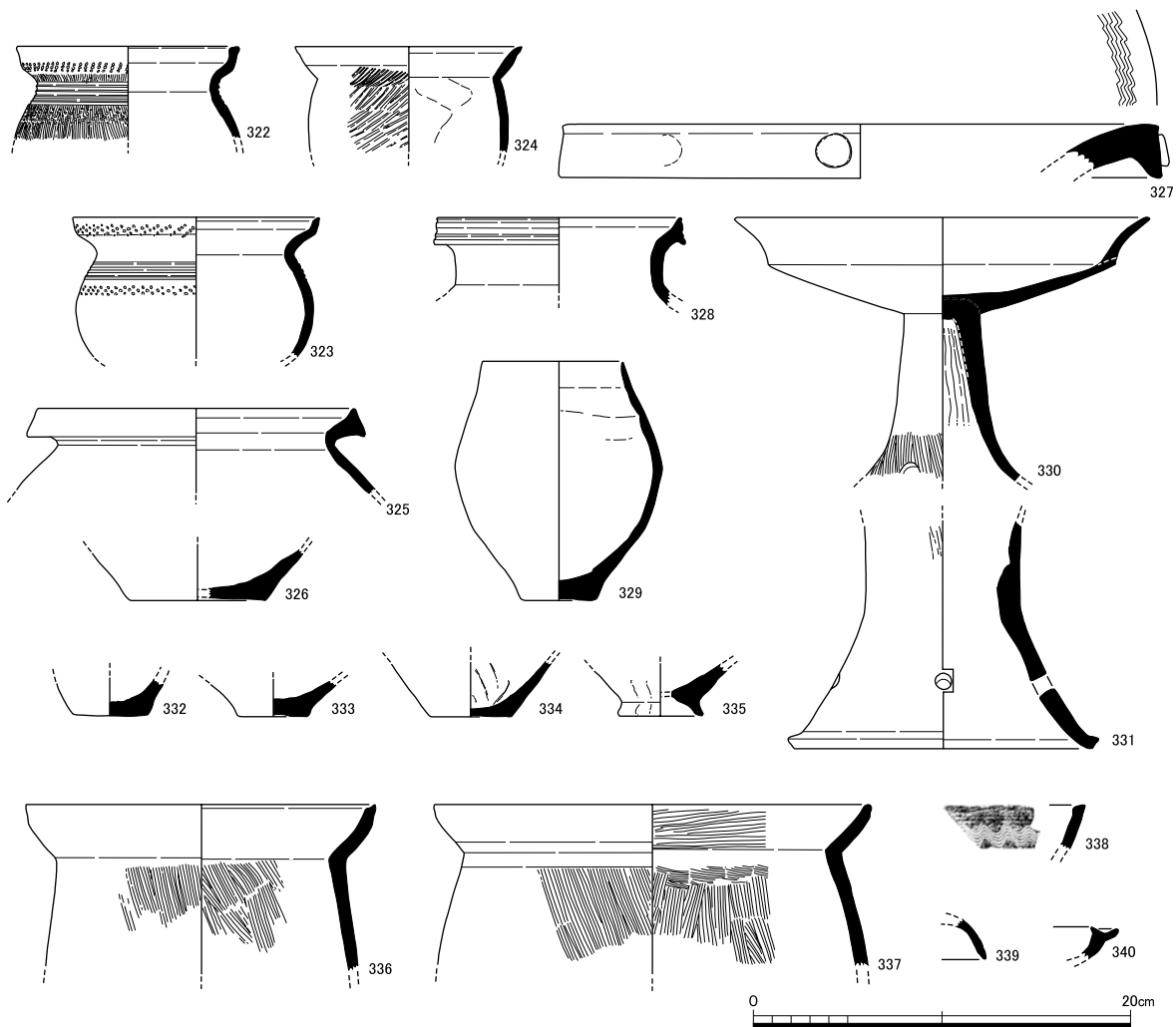


図31 流路468出土土器実測図 (1 : 4)

321は緑釉緑彩陶器の壺口縁部。ナデ調整の後口縁部内面ミガキ。灰白色の軟質の素地に浅黄色の釉を施す。山城産。内面には黄緑色の釉を一部に施す。

流路468出土遺物(322～340)(図31) 311～335は流路内(図19-22・23層)から出土した弥生土器。336～340は流路埋没後一部湿地状を呈していた土層(図19-10・12層)から出土した古墳時代の遺物である。

弥生土器には、甕(322・324～326)、鉢(323)、壺(327～329)、高杯(330)、器台(331)、底部(332～335)がある。322は受口状口縁甕。口縁部下端に櫛描烈点文を施す。胴部の文様帯は刷毛目調整のあと櫛描直線文、櫛描烈点文の二帯。323は受口状口縁鉢。口縁部下端に櫛描烈点文を施し、胴部の文様帯はナデ調整のあと櫛描直線文、櫛描烈点文の二帯。324は小型甕。外面叩き、内面板状工具によるナデ調整。325は口縁部端面を強いヨコナデにより上下に拡張する瀬戸内系の甕である。調整は磨滅しており不明である。326は325の底部。327は広口太頸壺の口縁部。口縁部端面には円形浮文を貼り付ける。また口縁部内面には5条の櫛描波状文を施す。328は広口短頸壺。口縁部を下方へ拡張し端面に3条の凹線文を施す。329は直口で卵形の体部をもつ小型無頸壺。ナデ調整で内面には粘土紐痕が残る。330は皿形杯部を有する高杯。口縁部は稜をもって外反する。杯部と脚部の接合は分割成形して組み合わせる。331は筒形器台。裾部に4孔を穿つ。335は有孔鉢底部。底部は輪状の粘土帯を貼り付けて上げ底風に仕上げている。

古墳時代の土器には土師器(336・337)と須恵器(338～340)がある。336・337は土師器長胴甕。内・外面刷毛目調整。338は須恵器壺口縁部。口縁部に6条の櫛描波状文をめぐらす。5世紀後半。339・340は須恵器杯蓋、杯身。7世紀前半。

その他の遺構・整地層出土土器(341～403)(図32・33、図版13、表3) 上記の遺構出土土器以外で重要と判断した土器をここに掲載する。いずれも整地層や後世の遺構などから出土した。

土師器(341～354)、黒色土器(355～361)、須恵器(362～377)、緑釉陶器(378～393)、灰釉陶器(394～403)がある。341・342は、13世紀代の土師器皿N。343は10世紀前半の土師器皿A。344～352は、9世紀前半の皿A、杯A、椀A。353・354は杯B。353は外面ヘラケズリ。354は外面ヘラケズリの後粗いミガキ。

355は高台付盤。356は黒色土器杯B類。内外面ミガキ。口縁端部内面に1条の沈線をめぐらす。357は黒色土器A類杯。358・359は黒色土器A類椀。358は外面ヘラケズリ、内面ミガキ。359は外面ナデ、内面ミガキで、口縁端部内面に1条の沈線がめぐる。360・361は黒色土器甕A類。口縁部内面ミガキ。

362～365は須恵器蓋。362は天井部が平坦でつまみは付かない。363・364は壺蓋。口縁部は体部からほぼ直角に折れ曲がり、端部は丸おさめる。扁平な宝珠つまみが付く。365・366は環状つまみをもつ大型の蓋。367は杯A。底部糸切りの後ヘラケズリ、体部と底部の境界は凹む。建物1柱穴466出土。368・369は杯B。器高の高いものと低いものがある。370は小型鉢。371は平瓶。扁平な体部に把手が付く。372～375は壺。372は瓶子。平坦な底部に卵形の体部からなる。口縁部は欠損。底部糸切り。体部内面にロクロ目を強く残す。373は壺G。平底で筒形の体部に細長い口頸部

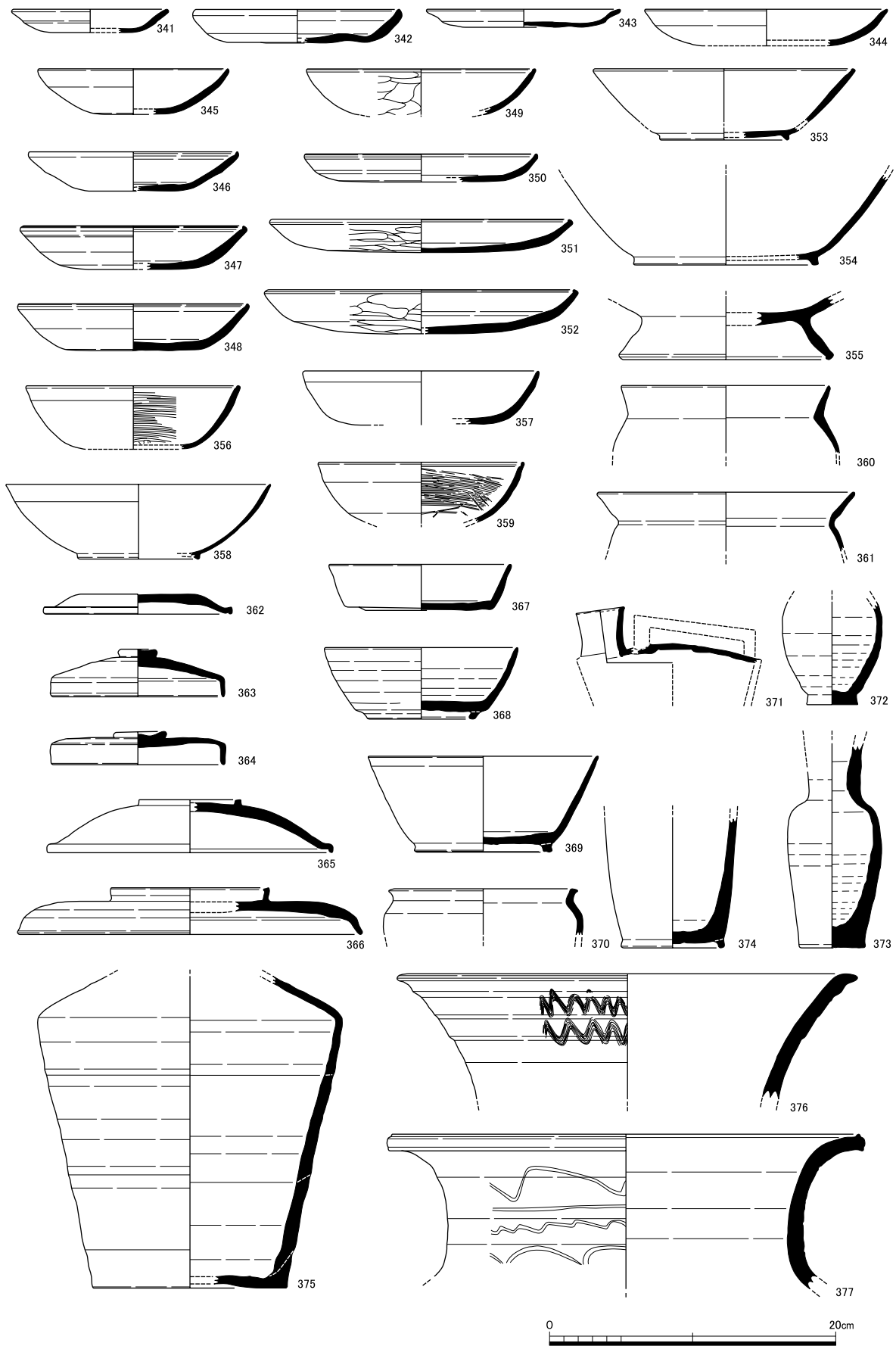


図32 その他の遺構・整地層出土土器実測図1 (1:4)

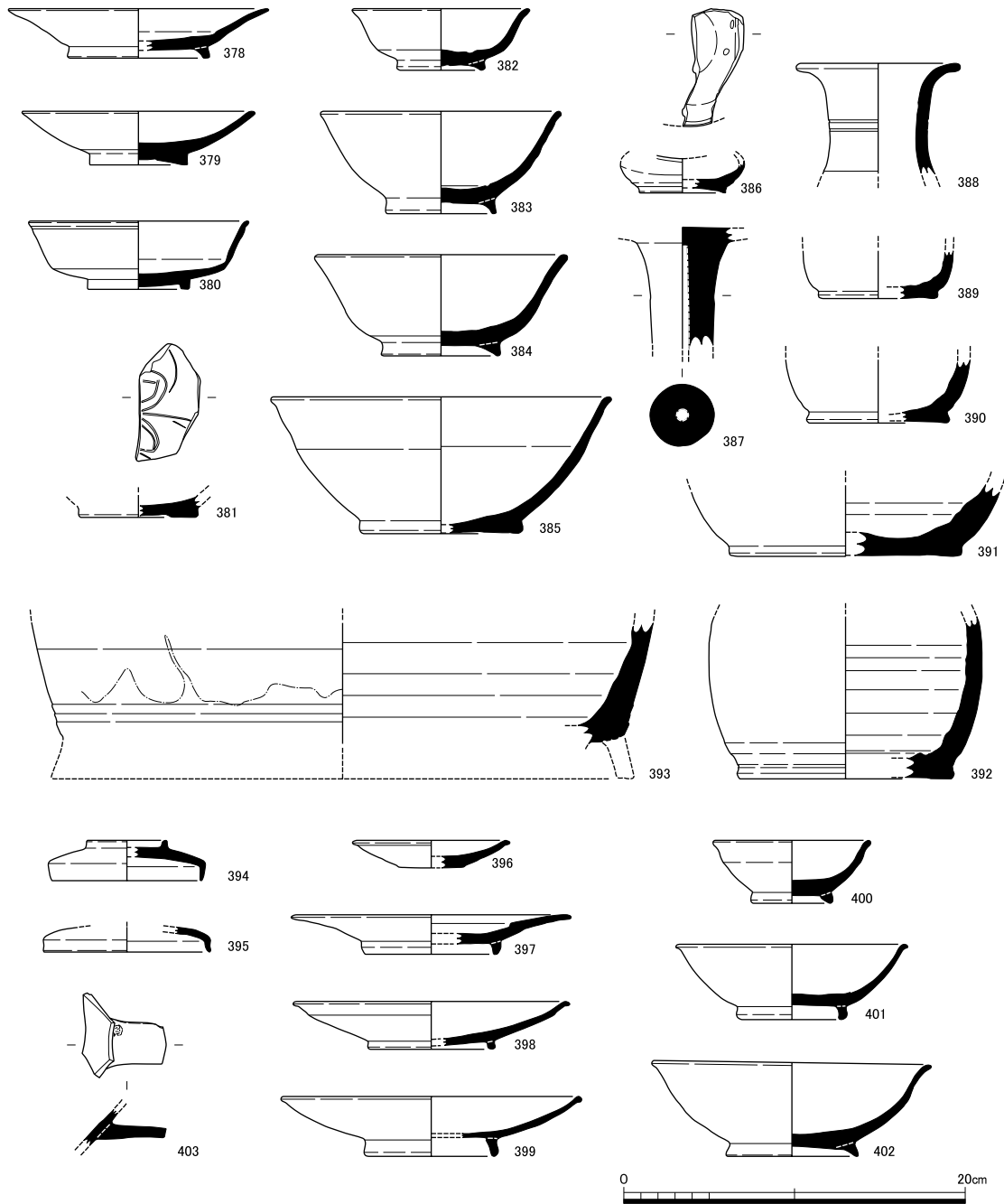


図33 その他の遺構・整地層出土土器実測図2 (1:4)

が付く。底部糸切り。体部内面ロクロ目が強く残る。374は373とほぼ同形であるが体部はやや太目である。底部ヘラ切りで高台が付く。375は体部が長くのびた短頸壺。肩部に稜をもつ。内面に粘土紐痕が残る。376・377は甕口縁部。376は櫛描波状文を2条めぐらす。377は口縁部が大きく外反する。ヘラ描き文を波状文風にめぐらす。

378・379は緑釉陶器皿。378は段皿。底部貼り付けの輪高台。外面ナデ、内面ミガキ調整。灰白色の素地に淡緑色の釉を全面に施す。猿投産。9世紀。379は削り出しの蛇ノ目高台。外面ナデ、内面ミガキ。須恵器の素地に灰色の釉を全面に施す。小塩産。9世紀後半。380は稜椀。底部削り出しの輪高台。体部中央で内側に屈曲して稜をなす。内面粗いミガキ。須恵器の素地にオリーブ灰

色の釉を全面に施す。小塩産。10世紀前半。381～385は椀。381削り出しの蛇ノ目高台。内面に陰刻花文をもつ。灰白色の軟質の素地に淡緑灰色の釉を全面に施す。京都産。382は断面三角形の貼り付け高台。底部内面に凹線がめぐる。浅黄橙色の軟質の素地に浅黄色の釉を底部外面以外に施す。近江産。383は断面三角形の貼り付け高台。底部内面に凹線がめぐる。灰白色の素地に深緑色の釉を底部外面以外に施す。近江産か。11世紀後半。384は底部断面三角形の貼り付け高台。底部内面に凹線がめぐる。浅黄橙色素地に淡緑色の釉を底部外面以外に施す。近江産。11世紀中頃。385は底部削り出しの平高台。外面ナデ、ヘラケズリの後ミガキ。内面ミガキ。灰色の軟質の素地に淡緑灰色の釉を全面に施す。京都産。386は耳皿。底部糸切り。緑黄色の釉を全面に施す。387は緑釉単彩陶器の高杯脚柱部。棒状の芯に粘土を巻き付けで成形。杯部・脚柱部ナデ調整。灰白色の素地に淡緑灰色の釉を施す。388～392は壺。388は頸部はわずかに外反しながら立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。頸部に2条の沈線がめぐる。内外面ナデ、口縁部内面ミガキ灰色の素地に淡黄色の釉を施す。389～392は底部。389は外面ミガキ。にぶい橙色の硬質の素地に深緑色の釉を全面に施す。猿投産。390～392は底部糸切り。体部ミガキ。灰白色の素地に浅黄色の釉を外面に施す。393は火舎。外面ケズリの後ナデ。灰白色の軟質の素地に浅黄色から緑色の釉を外面に施す。

394・395は灰釉陶器蓋。環状のつまみが付く。396は無高台の皿。底部糸切り397は段皿。屈曲の強い三日月高台が付く。口縁部内面施釉。398は断面隅丸方形の低い輪高台が付く。内面施釉。399は屈曲が弱く端部がすぼまる三日月高台が付く。口縁部は内外面施釉。400は断面三角形の高台が付く。口縁部内外面施釉。401は屈曲の強い三日月高台が付く。口縁部内外面施釉。底部内面に重ね焼き痕。402は底部糸切りで断面三角形の高台が付く。口縁部内外面施釉。403は双耳椀の耳部分。

表3 その他の遺構・整地層出土掲載土器一覧表

番号	種類	出土遺構	番号	種類	出土遺構	番号	種類	出土遺構
341	土師器皿	土坑	362	須恵器蓋	3層	383	緑釉陶器椀	3層
342	土師器皿	3層	363	須恵器蓋	石室	384	緑釉陶器椀	3層
343	土師器皿	土坑	364	須恵器蓋	1層	385	緑釉陶器椀	3層
344	土師器皿	土坑	365	須恵器蓋	3層	386	緑釉陶器耳皿	土坑
345	土師器杯	4層	366	須恵器蓋	3層	387	緑釉陶器高杯	4層
346	土師器杯	4層	367	須恵器杯	柱穴466	388	緑釉陶器壺	2層
347	土師器杯	4層	368	須恵器杯	4層	389	緑釉陶器壺	3層
348	土師器杯	4層	369	須恵器杯	3層	390	緑釉陶器壺	3層
349	土師器杯	4層	370	須恵器鉢	3層	391	緑釉陶器壺	3層
350	土師器皿	4層	371	須恵器平瓶	4層	392	緑釉陶器壺	土坑
351	土師器皿	4層	372	須恵器壺	3層	393	緑釉陶器甌	土坑
352	土師器皿	4層	373	須恵器壺	4層	394	灰釉陶器蓋	3層
353	土師器杯B	3層	374	須恵器壺	3層	395	灰釉陶器蓋	土坑
354	土師器杯B	3層	375	須恵器壺	3層	396	灰釉陶器皿	3層
355	土師器盤	3層	376	須恵器甕	土坑	397	灰釉陶器段皿	柱穴
356	黒色土器杯	土坑	377	須恵器甕	3層、4層	398	灰釉陶器皿	3層
357	黒色土器杯	4層	378	緑釉陶器皿	3層	399	灰釉陶器皿	3層
358	黒色土器椀A	柱穴	379	緑釉陶器皿	土坑	400	灰釉陶器椀	土坑
359	黒色土器椀A	土坑	380	緑釉陶器椀	3層	401	灰釉陶器椀	土坑
360	黒色土器甕	3層	381	緑釉陶器皿	3層	402	灰釉陶器椀	土坑
361	黒色土器甕	3層	382	緑釉陶器椀	4層	403	灰釉陶器耳部	3層

(3) 瓦類 (図34・35、図版14)

瓦1 単弁二十葉蓮華文軒丸瓦 中房蓮子は1 + 5。外区内縁珠文を配する。瓦当部側面ケズリ、表面オサエ。長岡京7193Aa。第4層出土。

瓦2 単弁八葉蓮華文軒丸瓦 中房蓮子は1 + 不明。梯形に近い花卉で弁端中央はやや窪む。弁子は長方形。先の尖った短線で表現された弁間文をもつ。高い周縁に沿って圈線がめぐる。丸瓦部凸面ナデ。凹面布目後にナデ。土坑229出土。

瓦3 単弁八葉蓮華文軒丸瓦 中房蓮子は1 + 5。瓦当部側面ナデ、裏面オサエ。第2層出土。

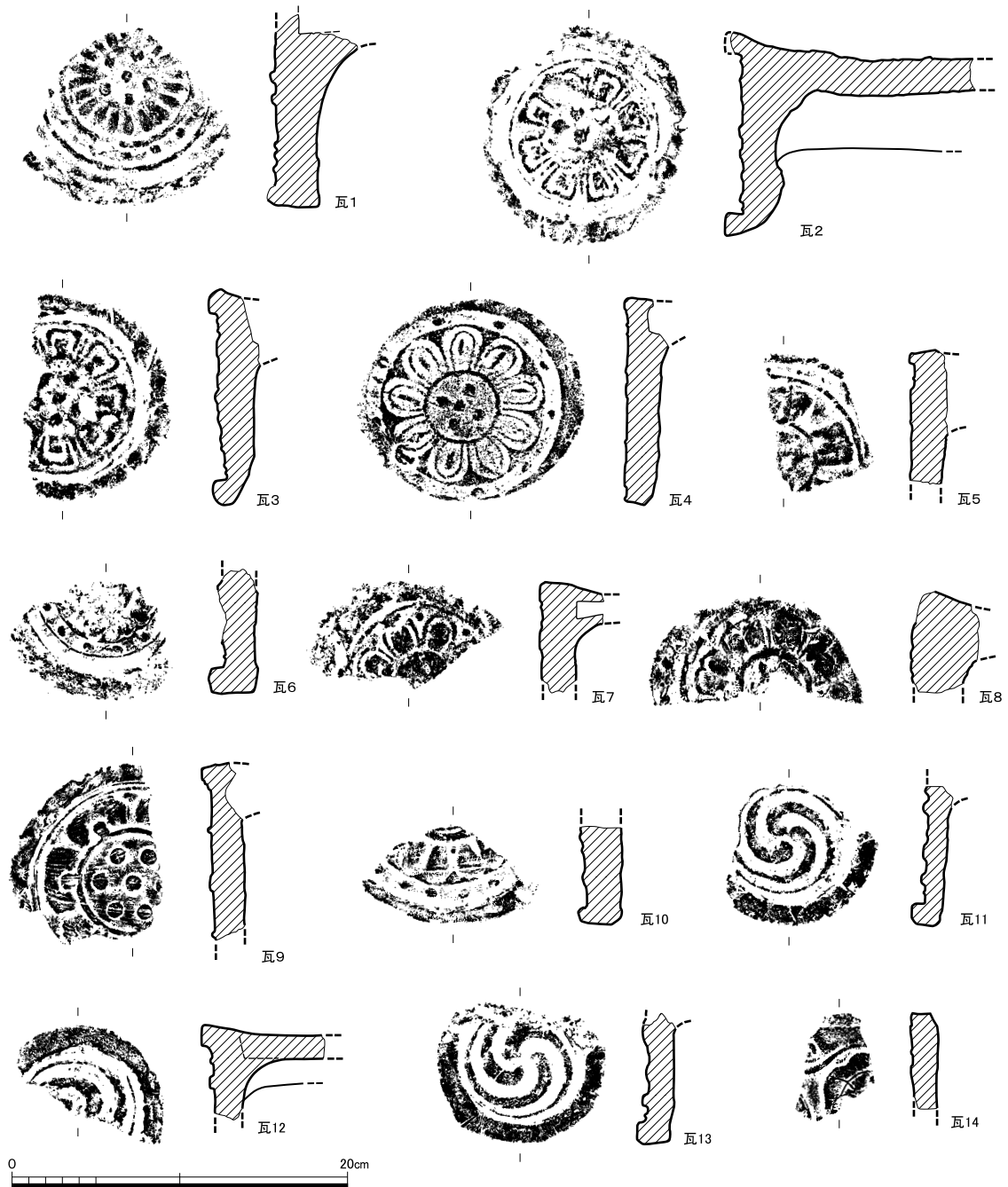


図34 軒丸瓦・金箔瓦拓影・実測図 (1 : 4)

瓦4 単弁九葉蓮華文軒丸瓦 中房は界線で画した中に1 + 4。蓮弁は凸線、間弁は連結する。外区は珠文が粗く巡る。瓦当面は楕円形。側面ナデ、裏面オサエ。土坑420出土。

瓦5 複弁蓮華文軒丸瓦 中房は平坦で圈線が巡る。裏面オサエ。第3層出土。

瓦6 複弁蓮華文軒丸瓦 中房は盛り上がる側面ケズリ、裏面ナデ。第2層出土。

瓦7 単弁蓮華文軒丸瓦 蓮弁は子葉が盛り上がる。弁の間に珠文を配する。側面ナデ、裏面オサエ。第2層出土。

瓦8 複弁蓮華文軒丸瓦 花卉は長円形の弁子を二つ並心輪郭線で囲む。側面ケズリ。土坑193出土。

瓦9 単弁蓮華文軒丸瓦 中房蓮子は1 + 6。子葉あり。側面ケズリ、裏面ナデ。播磨産。井戸213出土。

瓦10 複弁蓮華文軒丸瓦 間弁は丁字形。側面ケズリ、裏面ナデ。第3層出土。

瓦11 三巴文軒丸瓦 左巻き、側面ナデ、裏面ナデ。範は深い。第1層出土。

瓦12 三巴文軒丸瓦 右巻き、丸瓦凸面は縄タタキの後ナデ。溝301出土。

瓦13 三巴文軒丸瓦 左巻き、裏面ナデ。第2層出土。

瓦14 金箔瓦 金箔わずかに残る。第1層出土。

瓦15 均整唐草文軒平瓦 曲線顎。瓦当部凹面ケズリ、顎部凸面ナデ、平瓦部凹面布目痕。土坑271出土。

瓦16 均整唐草文軒平瓦 瓦当部中央部の破片。曲線顎。顎部ケズリ、平瓦部凹面布目痕。土坑251出土。

瓦17 均整唐草文軒平瓦 曲線顎。瓦当部凹面ケズリ、平瓦部凹面布目痕。顎部裏面ヨコケズリ、平瓦部凸面タテケズリ。溝301出土。

瓦18 緑釉半截宝相華文軒平瓦 曲線顎。瓦当部凹面布目痕。顎部凸面ヨコケズリ、平瓦部凹面布目痕、凸面縄タタキ、側面ケズリ。丹波産。溝301出土。

瓦19 均整唐草文軒平瓦 曲線顎。瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目痕、凸面タテナデ、側面ヨコケズリ。土坑271出土。

瓦20 唐草文軒平瓦 瓦当部凹面ヨコケズリ、顎部凸面ヨコケズリ。平瓦部凹面布目痕、凸面オサエ、側面ヨコケズリ。第3層出土。

瓦21 唐草文軒平瓦 瓦当凹面ナデ、顎部凸面ナデ。平瓦部凹面布目痕、凸面オサエ。第2層出土。

瓦22 唐草文軒平瓦 半折り曲げ。瓦当凹面布目痕。顎部凸面ケズリ。平瓦凹面布目痕、凸面オサエ。第1層出土。

瓦23 唐草文軒平瓦 半折り曲げ。瓦当部凹面ケズリ、顎部凸面ヨコケズリ。平瓦凹面布目痕、凸面オサエ。瓦当上端部は横位のケズリ。第2層出土。

瓦24 唐草文軒平瓦 瓦当部裏面ナデ。第2層出土。

瓦25 剣頭文軒平瓦 瓦当部裏面ナデ。平瓦部凹面布目痕。第3層出土。



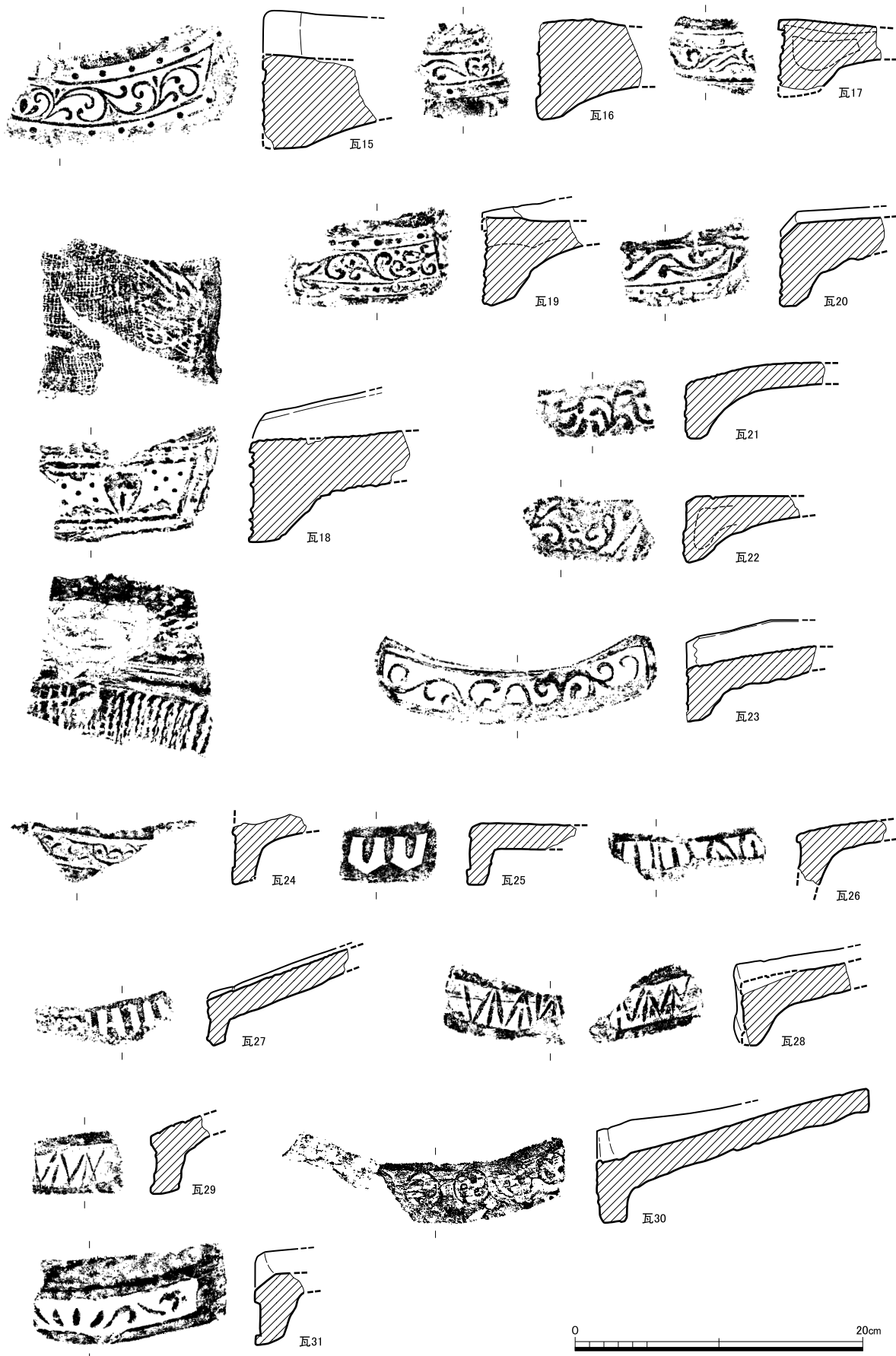


图35 軒平瓦拓影·实测图 (1 : 4)

瓦26 剣頭文軒平瓦 文様が逆転している、半折り曲げ。瓦当部布目痕、裏面ヨコナデ。第2層出土。

瓦27 剣頭文軒平瓦 瓦当部凹面タテケズリ、裏面オサエ。平瓦部凹面布目の後粗いケズリ、凸面粗いケズリ。土坑32出土。

瓦28 幾何学文軒平瓦 半折り曲げ。瓦当裏面オサエ。平瓦部凹面布目痕、裏面オサエ。側面ヨコケズリ。土坑185出土。

瓦29 幾何学文軒平瓦 凹面に布目痕、凸面はオサエ。土坑35出土。

瓦30 三巴文軒平瓦 右巻き。凹面は細かい布目痕、凸面はオサエの後粗いケズリ。土坑328出土。

瓦31 唐草文軒平瓦 凹面ヨコケズリ、裏面ナデ。土坑67出土。

#### (4) その他の遺物

##### 土製品 (図36、図版15)

土製品には土馬、円盤形土製品、有孔埴、犬型土製品、取鍋、轆羽口などがある。土馬は数個体分出土しているが小片であり、図示できるものはなかった。

取鍋 (土1～17) 土師器小型皿に近似する形態である。室町時代後半の遺構及び第1層から散発的に80片ほど出土している。口径7.0cm前後 (土1～3)、8.0cm前後 (土4～15)、12cm前後 (土16・17) の3群がある。強く被熱し内外面に銅滓が著しく付着したものが多いが、ほとんど付着のみられないものもある。土13～15は未使用品である。土17は外面に炭化物が付着している。また小片であるが、轆羽口も1点出土している。

##### 石製品 (図37、図版15)

石製品には石帯、硯、容器、石臼、石塔婆などがある。また加工痕はないが凝灰岩片が出土した。

石帯 (石1) 矩形の石板で四方を面取りし、断面は台形を呈する。中央下辺寄りに幅の広い垂孔を穿つ。裏面の四隅に2孔1対の装着用の潜り穴を縦平行に穿つ。表面および側面は丁寧に研磨されているが、裏面は研磨が粗く二次工程での加工痕を残す。色調は淡緑灰色。3層出土。

硯 (石2・3) 石2は平面形は細形の長方形で、裏面は平坦である。石3は幅広の長方形で、裏面は陸側から抉りを入れ脚状に残す。石2は1層、石3は土坑178出土。

石臼 (石4・5) 石4・5は下臼である。石4は臼目は8分割で5本溝である。石材は花崗岩である。石5は臼目は8分割で5本溝であるが磨滅が激しい。石材は花崗岩である。石4は井戸

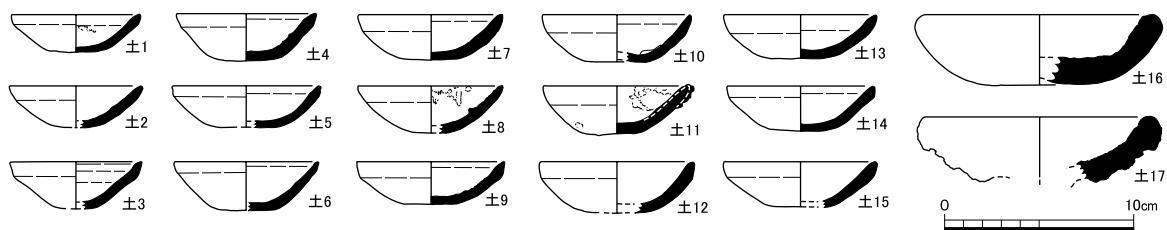


図36 土製品実測図 (1:4)

48、石5は試掘トレンチ出土。

石塔婆（石6） 縦25cm以上、横40cm以上の石塔婆で、2基の五輪塔を陽刻で表現している。空・風・火・水・地輪は線刻で表現し、火輪の軒反は上方に反る。各輪には五大の種字を刻む。また、地輪には種子の下に「□蓮」、左側に「八月」の文字が刻まれている。石材は花崗岩。石室20出土。

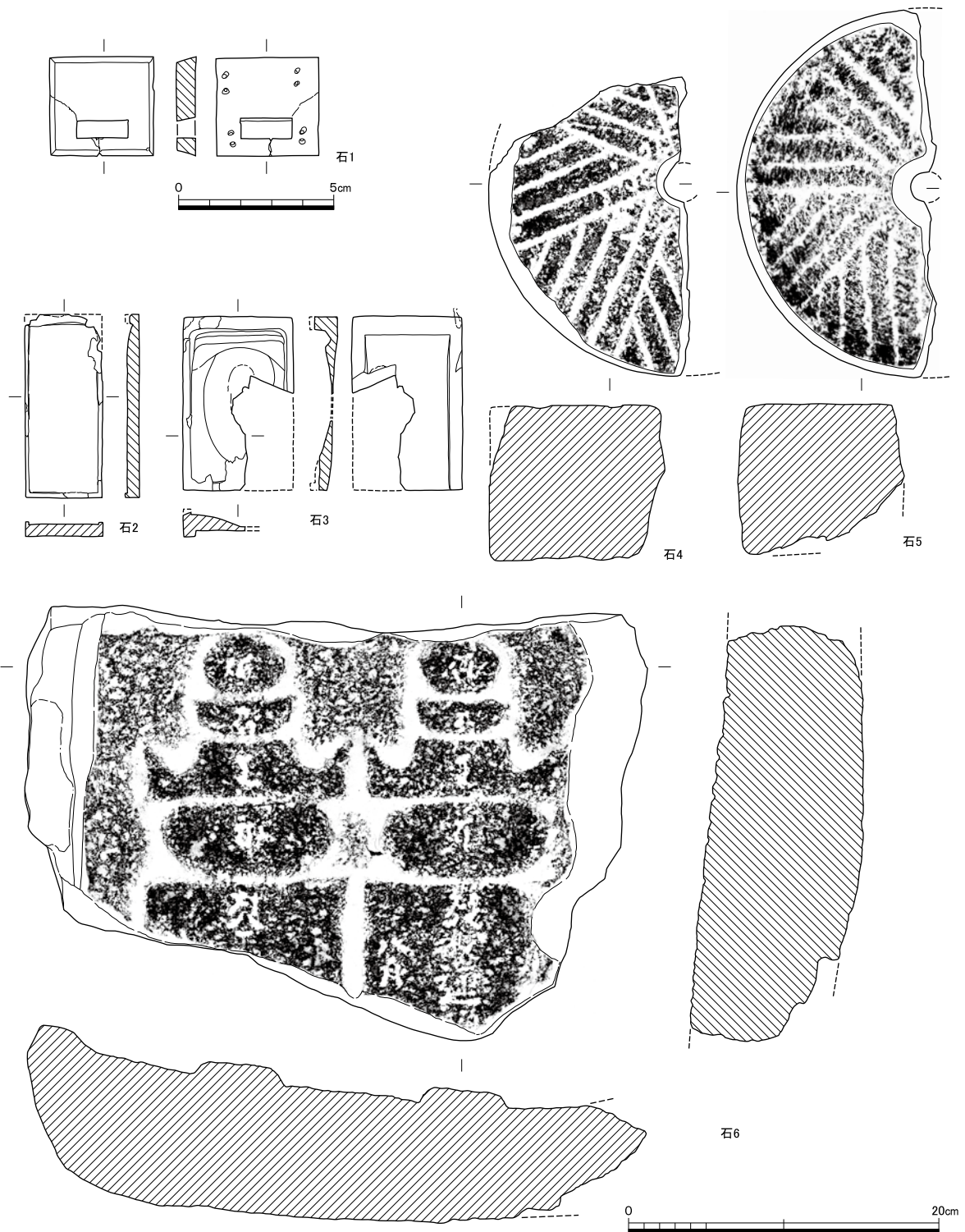


図37 石製品実測図（1：4、石1のみ1：2）

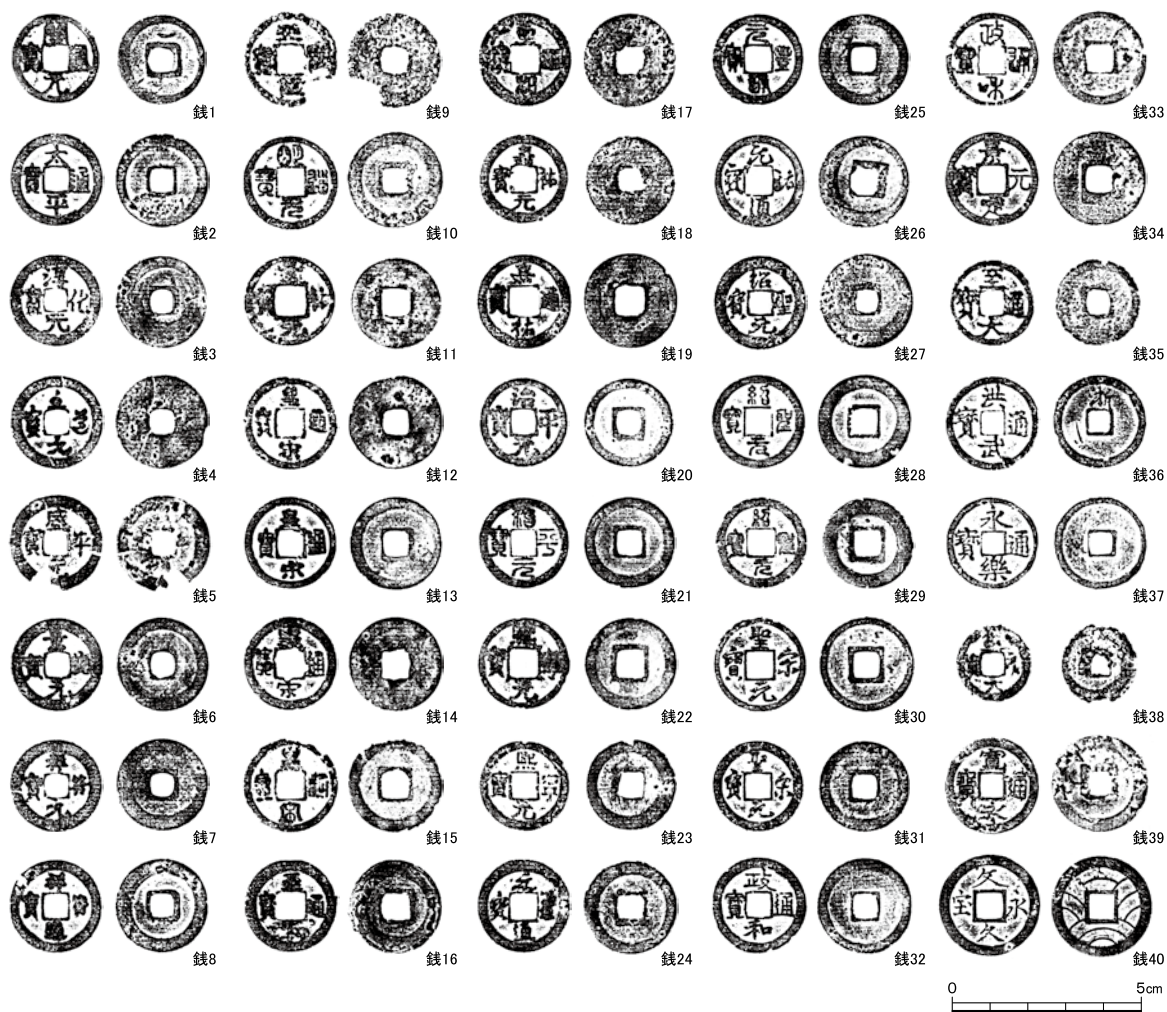


圖38 錢貨拓影（1：2）

表4 錢貨一覽表

番号	錢種	出土遺構	番号	錢種	出土遺構
錢1	開元通寶	土坑27	錢21	治平元寶	第1面
錢2	太平通寶	土坑27	錢22	熙寧元寶	土坑27
錢3	淳化元寶	土坑27	錢23	熙寧元寶	土坑27
錢4	至道元寶	第1面	錢24	元豐通寶	1層
錢5	咸平元寶	土坑27	錢25	元豐通寶	土坑53
錢6	景德元寶	土坑27	錢26	元祐通寶	土坑27
錢7	祥符元寶	第1面	錢27	紹聖元寶	1層
錢8	祥符通寶	土坑53	錢28	紹聖元寶	3層
錢9	天聖元寶	土坑27	錢29	紹聖元寶	土坑27
錢10	明道元寶	土坑53	錢30	聖宋元寶	第1面
錢11	景祐元寶	1層	錢31	聖宋元寶	土坑27
錢12	皇宋通寶	1層	錢32	政和通寶	1層
錢13	皇宋通寶	土坑27	錢33	政和通寶	土坑53
錢14	皇宋通寶	第1面	錢34	景定元寶	第1面
錢15	皇宋通寶	土坑27	錢35	至大通寶	土坑119
錢16	至和通寶	土坑27	錢36	洪武通寶	第2面
錢17	至和通寶	1層	錢37	永樂通寶	第2面
錢18	嘉祐元寶	土坑53	錢38	軋元大寶	土坑271
錢19	嘉祐通寶	土坑55	錢39	寬永通寶	井戸66
錢20	治平元寶	1層	錢40	文久永寶	井戸48

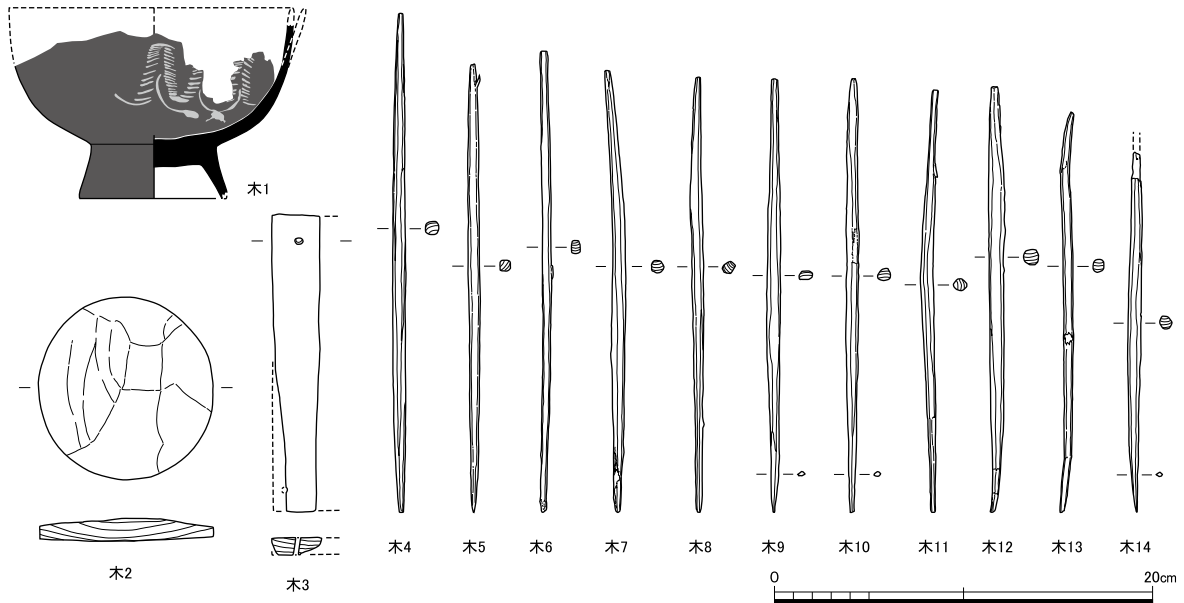


図39 土坑169出土木製品実測図（1：4）

砥石・石鍋 このほかの石製品としては砥石・石鍋がある。全体の形状が残るものではなく、今回は図示していない。

#### 金属製品（図38、表4）

金属製品には煙管、火箸、環頭鋏などの銅製品、釘や刀子などの鉄製品、銭貨がある。全ての出土品についてクリーニングなどの保存処理作業を施すことができず、銭貨以外は掲載していない。

銭貨（銭1～40） 軋元大寶、寛永通寶、文久永宝などの国産銭貨のほか、唐銭、宋銭、明銭など29種類65点が出土した（銭種不明12点を除く）。同一銭名のもので書体や法量が異なるものを含め、40枚の拓影と掲載分の出土遺構を表4に示した。

#### 木製品（図39）

木製品は土坑169から出土した。

漆器椀（木1） 大型の丸椀で口縁部は欠損している。また土圧によって変形し、歪みが著しい。高台は高い輪高台である。塗りは内面は赤色、外側は黒色で体部外面に赤漆で紋様を描く。紋様は不明である。

容器蓋（木2） 直径約9.5cm、厚さ0.6～1.2cm。外面を笠状に削り出す。部材は板目取る。

不明部材（木3） 縦15.7cm、残幅2.6cm、厚さ0.9cmの長方形の板材。上下に釘孔がある。

箸（木4～14） 長さ23cm前後から26cmを超えるものまで多数出土している。細く割り裂いた柾目材に面取りを施し、断面を0.5～0.8cmの円形および楕円形に仕上げている。幅は端部まで均等なもの、両端にかけて細く削るもの、一方だけ削るものがある。

#### 註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 財団法人京都市埋蔵文化研究所 1996年

## 5. まとめ

今回の調査では弥生時代から江戸時代にわたる多数の遺構・遺物を検出した。調査面積が狭く遺構の全容はつかむことができなかったが、この地における土地利用の変遷について、その一端を知りうる資料が得られた。

平安時代の遺構として第4面で平安時代後期の南北溝（溝301）と溝301に切られた東西溝2条（溝285：平安時代前期、溝289：平安時代中期）がある。溝301は室町小路東側の内溝に推定できる。溝285、289は四行八門制の北七門と北八門の境界付近に位置するが、これらの溝は推定ラインより2mほど北に寄っている。また、溝301に切られた方形の柱穴掘形をもつ東西1間（2.7m）南北1間（3.1m）の建物1棟がある。

出土遺物では緑釉陶器が各遺構、整地層から総破片数で2,320点出土した。他の遺跡と比して突出した数量の破片が出土している。時代や器形別の分析はできていないが、産地別の数量を掲載しておく。9世紀前半から10世紀初頭の山城産、猿投産の遺物が半数以上（山城産1,132点、猿投産173点）を占める。器形も椀・皿類のほか、香炉・香炉蓋・高杯・唾壺・把手付瓶・小壺・壺・火舎・托・硯など豊富な器形がある。

平安時代前期は文献史料によれば小規模な邸宅によって分割されていたらしく、詳細は不明である。また調査地周辺の調査においても平安時代前期の遺構はほとんど検出されていない。今後の調査結果の蓄積を待って考察を行う必要がある。

また、平安時代末期から鎌倉時代・室町時代を通じて近衛家の本邸として近衛殿が在続していた。しかし、発掘調査では鎌倉時代に属する遺構・遺物は少なく、近衛殿との関連を直接示す遺構は検出されなかった。室町時代から近世の遺構としては井戸・石室・土坑などを検出した。第2面から第4面では調査区西半部で多数の小型の遺構群や柱穴を検出し、建物としては把握できなかったが室町小路に面して町屋が展開していたと想定させる。

今回の調査では近衛殿との関連を直接示す遺構を検出することはできなかった。その原因は調査地の1町を占める近衛殿の南西隅に位置するため遺構の希薄な場所であったのか、後世の遺構との重複や削平によるものなのか、検討を要する。

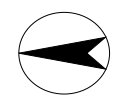
表5 緑釉陶器産地別破片数一覧表

産地	山城			東海			近江	防長	産地不明
	洛北	洛西	篠	猿投	猿投・尾北	尾張・三河・近江			
破片数	1132	219	87	173	44	207	293	47	1

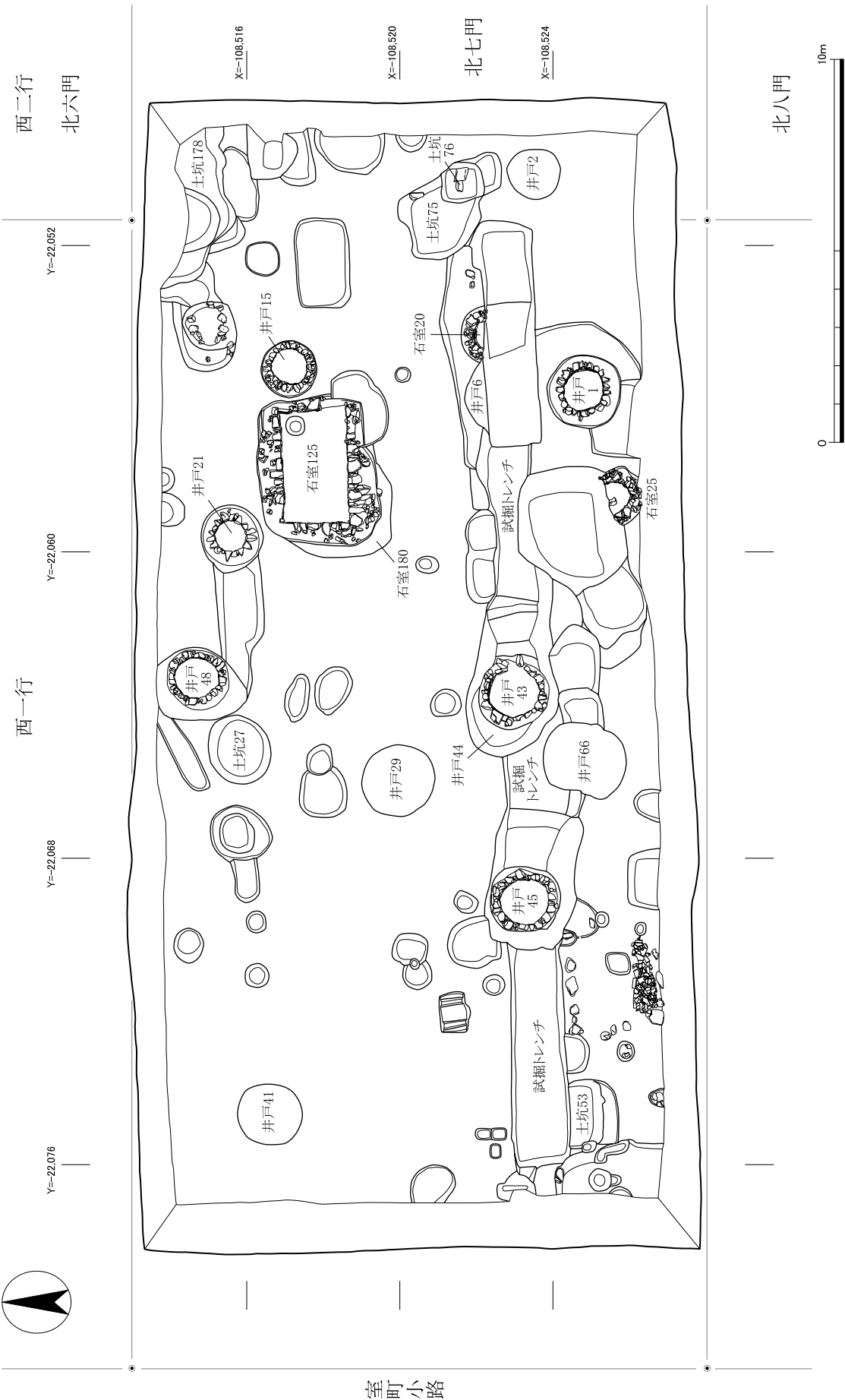
# 圖 版



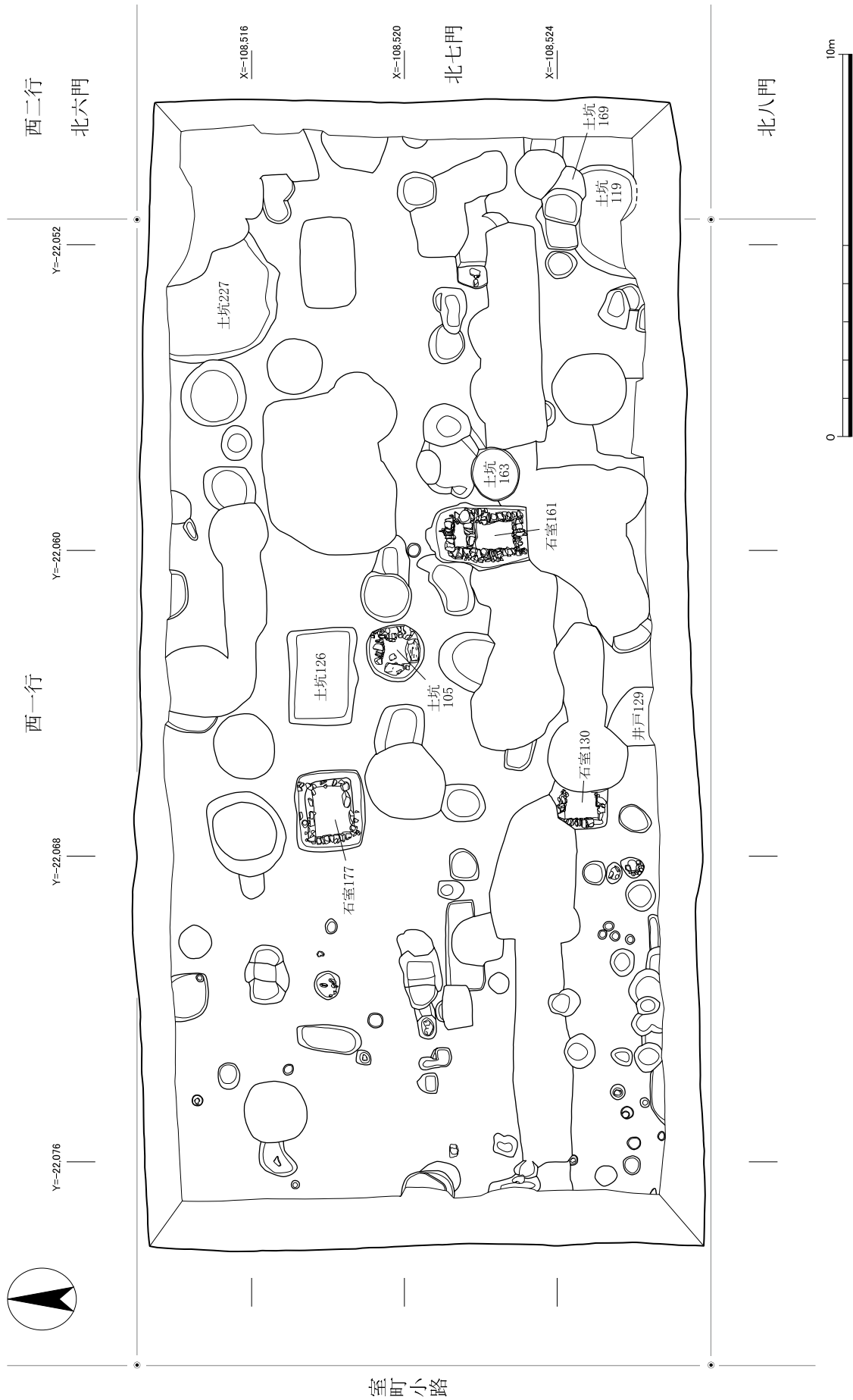




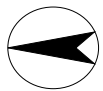
第1面平面図 (1 : 150)



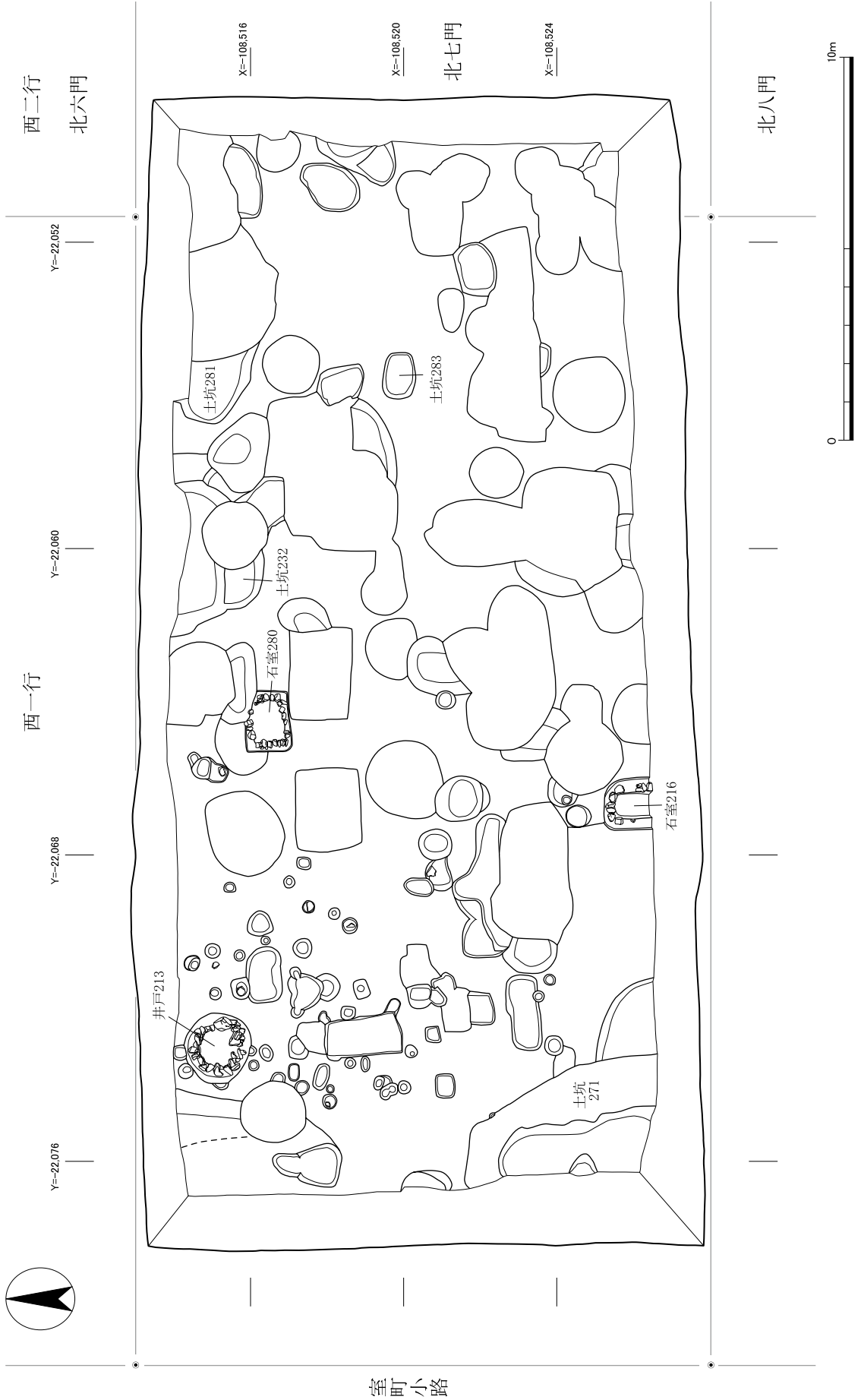
図版1 遺構



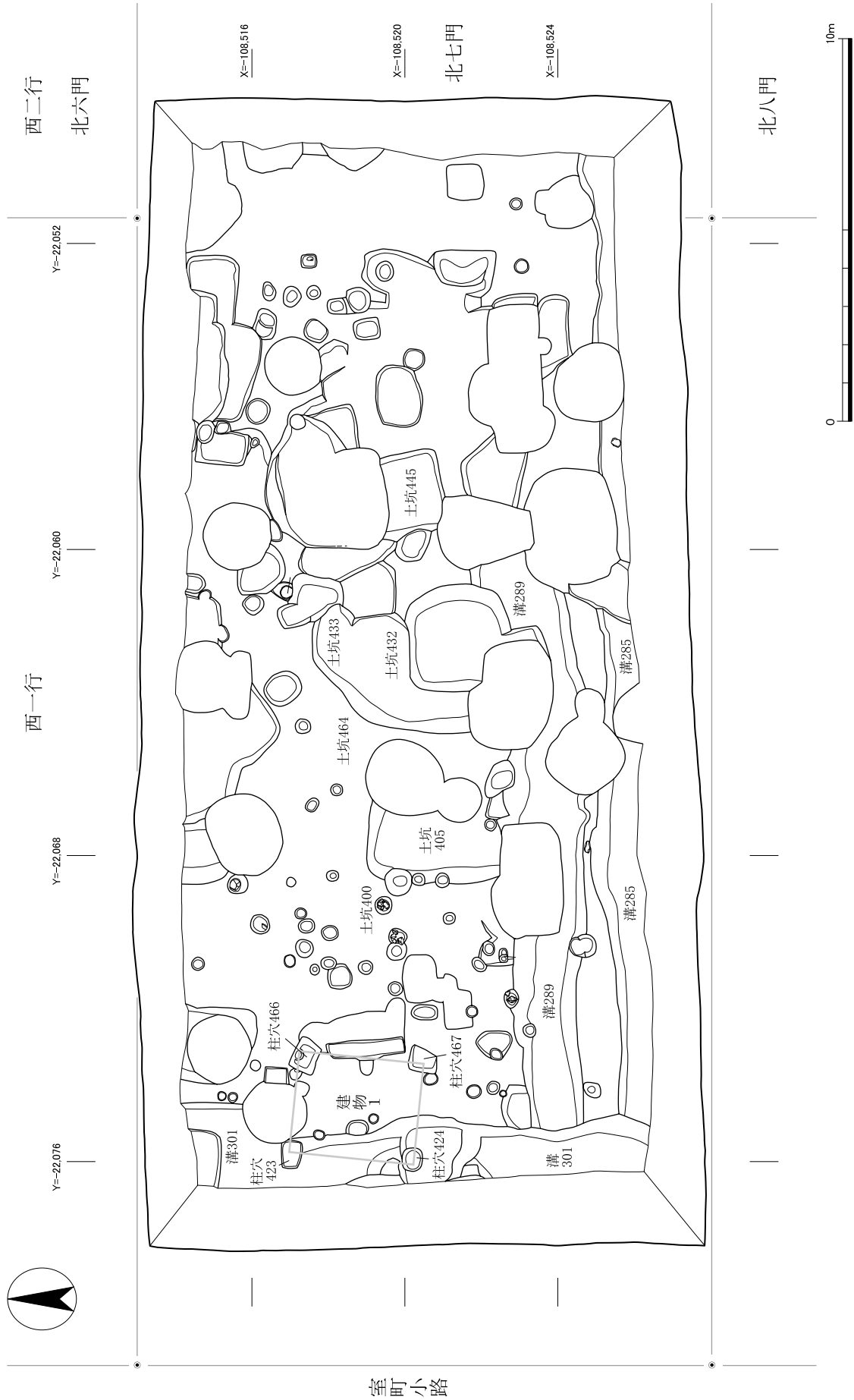
第2面平面図 (1 : 150)



第3面平面図 (1 : 150)



図版 4  
遺構



第4面平面図 (1 : 150)



1 第1面全景（東から）



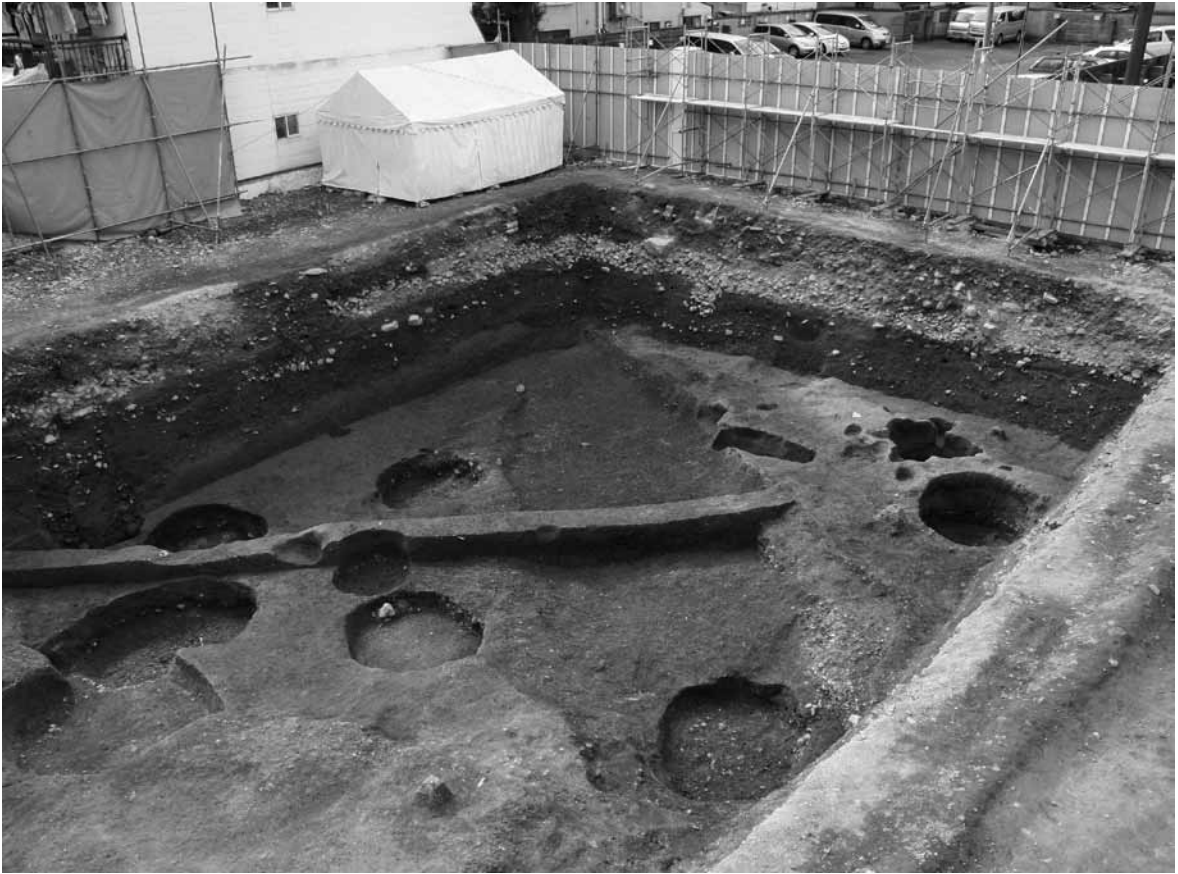
2 第2面全景（東から）



1 第3面全景（東から）



2 第4面全景（東から）



1 第5面全景（北東から）



2 南壁（北から）



1 石室20 (南から)



2 石室25 (北から)



3 石室125 (東から)



4 石室180 (東から)



5 石室161B (北から)



6 石室161A (南から)





1 土坑105 (北東から)



2 石室177 (東から)



3 土坑400 (北から)



4 石室280 (北から)



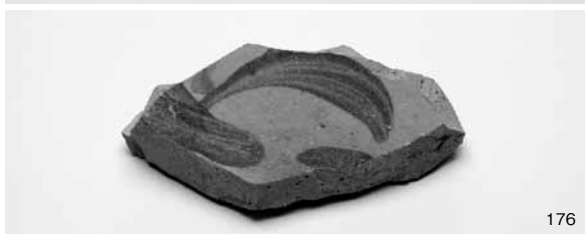
5 井戸213 (北から)



出土土器 1



出土土器 2

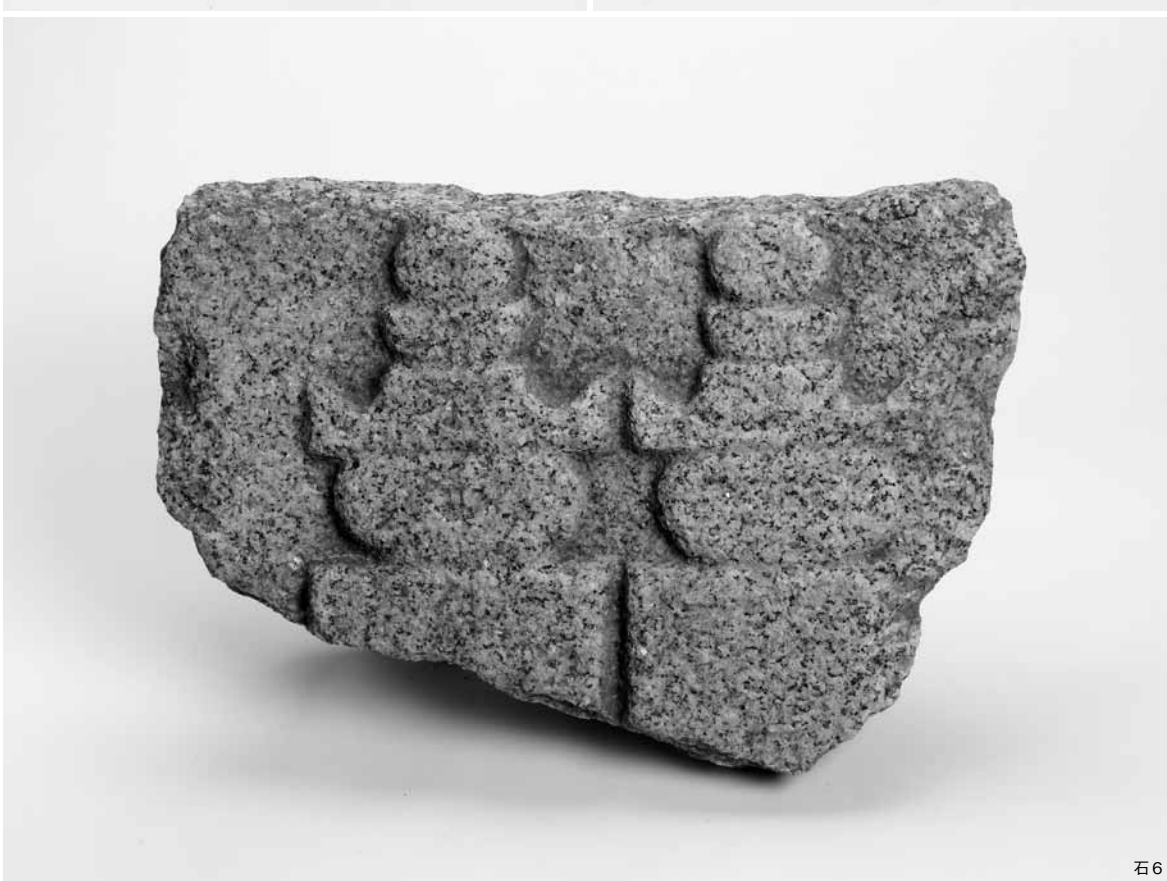




出土土器 4



軒瓦



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょうさきょういちじょうさんぼうじゅつちょうあと・きゅうにじょうじょうあと							
書名	平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-13							
編著者名	伊藤 潔							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2013年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとしかみぎょうく 京都市上京区	26100	1	35度 01分 18秒	135度 45分 30秒	2012年8月 6日～2012 年11月6日	420㎡	共同住宅 建設工事
きゅうにじょうじょうあと 旧二条城跡	むろまちどおりのみずあが 室町通出水上る このえちょう 近衛町40-1、 42、45		243					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	弥生時代 ～古墳時代	流路	弥生土器、土師器、須 恵器				
旧二条城跡	平城跡	平安時代	溝、土坑、建物	土師器、須恵器、黒色 土器、緑釉陶器、灰釉 陶器、白色土器、瓦器、 輸入陶磁器、瓦類、石 製品、金属製品				
		室町時代	石室、土坑、井戸	土師器、施釉陶器、瓦 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、金属製品、瓦類				
		安土桃山時代 ～江戸時代	石室、土坑、井戸	土師器、施釉陶器、瓦 器、焼締陶器、輸入陶 磁器、磁器、瓦類、木 製品、石製品、土製品、 金属製品				



京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-13

## 平安京左京一条三坊十町跡・旧二条城跡

発行日 2013年2月28日

編集発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1  
〒602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地  
〒604-0093 TEL 075-256-0961